
召喚した人、されたヒト

ドンカーブート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚した人、されたヒト

【Nコード】

N5501N

【作者名】

ドンカーブート

【あらすじ】

失意の中、カミサマに誤って殺された主人公。どうやらチャンスを与えるらしい。よろしい、ならば転生だ！え？転生じゃないの？理想のお姉さんカトレアを救うため主人公は世界を越える。

第0話 どうしてこうなった、のかな？（前書き）

前略

処女作です。また俺の黒歴史に新たな1ページがガガガガガガ
読む際は気をつけてください。

第0話 どうしてこうなった、のかな？

僕は今、落下している。いや、きっと正確に言えば何かに引かれて
いるのだろう。

前後上下左右あらゆる方向の感覚が弛緩したままこの身はどこかに
たどり着こうとしている。

こうなった原因はよくわからない、しかしこれを為さしめた元凶は
カミサマという

よく知ってるようでよく分からない存在であった。

俺こと相馬優介はどこにでもいるようなアラサーのサラリーマンで
あった。

普通に学校に行き、普通に青春を謳歌し、普通に大学を卒業し、普
通に就職し、普通に仕事をしていた。

そして、幼馴染ともいえる近所のお姉さんに対して、普通に……
・・本気の恋をしていた。

しかし、その思いは一通の手紙により打ち砕かれた。招待状、その
お姉さんの結婚式のものだった。

さすがに家族の前では平然を装った。朝のなんでもない食卓とちょ
つとしたイレギュラー。

「そうか、結婚しちゃうのかー」泣きそうにはなったが声は震えて
なかっただろう。

その日は仕事も手につかず、上司や同僚から厳しくも優しい声をか
けられながらようやく乗り切り

一人酒を飲んでいた。当初は数名で飲んでいたが、解散したあと、
一人で飲み直していたのだ。

そしておそらく自己新記録が出るようなペースで飲み、朦朧としな
がらも会計を終え、家路についていた。

いつもの道、いつもと違う気持ち。

不意の爆音。「うるさいな」と思い、振り返った時には既に私は車に轢かれていた。

気がつけば真つ白の部屋 いや、部屋というには何も存在しない、白い空間 そこに俺は立っていた。

目の前には貫禄と威厳をたたえ、そこにカケラ程度の申し訳なさを含んだ表情をする老人がいた。

「落ち着いて聞いて欲しいんじゃないがキミは死んだんじゃない」

「は？」

聞けばこの老人はカミサマで、飲酒運転で私を轢き殺したらしい。なぜカミサマがそんなところを走っていたかというと

車を受け取り、テンションが上がって酒を飲み、エンジンをかけてさらにテンションが上がり

なぜかその勢いでそのまま走行

その状態のままワープで帰ろうとしたら酔っていたせいで座標が狂ったんだという。

あきれて物が言えないとはこのことか。

「だってようやく手に入れたFXXだったんじゃないから・・・」

「フェラーリかよ！ってかカミサマなら自分で作れよ」

「人が頑張つて作ったものを愛するのがワシの趣味なんじゃ」

「その趣味で殺されたんだが・・・」

「うむ、一応無かったことにもできるぞ」

「え？」

「え？」

「俺は生き返ることができると言うのか？」

「ああ、そうじゃが？」

「なら、なんでここに連れて来た？そのまま元に戻してハイオシマ

イで良かったんじゃないか？」

「おぬしが絶望していたからのう。生き返らせても死にかねんかつたし、少し話も聞きたかつたんじゃ」

男説明中……

「なるほど、そういうことじゃったか……。ふむ、なら別の世界に行くか？」

「は？」

「理想のお姉さんがいる世界にじゃー！」

「理想のお姉さんといえばカトレア……。ってそうじゃなくて!？」

白状すれば俺はサブカルチャーに理解がある。アニメも好きだしラノベも読む。

ネット上の二次創作を読むのも好きだ。ってことはこれはひよっとして……

「そういうことじゃ。まあ転生じゃあカトレアとの関係が難しいからう、物語を思いっきり捻じ曲げることに

なるんじゃないか、カトレアのサモンサーヴァントで召喚されてみるか？」

「できるのか？そんなことが!？」

俺は悩んだ。一度失恋しただけで投げ出すような人生だったのか。今まで頑張った自分を捨ててまで行く価値があるのか。

元の自分として、なにが起こるかかわからないこれからの人生を全うしてもいいんじゃないか。

でも、これはおそらくチャンス。最初で最後の機会。どっちを捨てる後悔が大きいんだ……。

しばらくして

「行きます。カトレアのそばでカトレアのために何かを為してきま

す」

現実世界ではお姉さんの横にはもう誰かがいる。しかしカトレアには家族一（召し使い含む）と動物たちだけ。

自分のようなイレギュラーでもってして、カトレアを幸せに……。

「そうか、決心したか。ではいろいろ決めようか」

「決めるって、何をだ？」

「おぬしの能力とかじゃ。よもや徒手空拳で召喚されて何かできるとは思ってないじゃろう？」

「どんな能力が欲しいんじゃ？」

「えっと、じゃあ希望として……」

1：能力限界突破

2：いろんな漫画・アニメ・ゲームの魔法使用可能

3：あらゆる知識

ゲートオブヒロイン

4：王の財宝

アンリミテッドサバイバルネットワークス

5：無限の剣製

6：魔眼

7：ネギまのエヴァの別荘

「ぐらいお願いしたいんですが……」

「急に欲をかきよって。1はまあいいじゃろう。努力しだいで強くなれるだけじゃし。」

2じゃが、最初はゼロ魔の魔法だけじゃ。コントラクトサーヴァントでルーンの変わりに魔術刻印を

刻んでやるからそれからほかの魔法も使えるようにしてやるう。

3は現代地球レベルに限るぞ。

4もいいじゃろう、サービスじゃ。それと引き換えではないが5はダメじゃ。6は何の魔眼か希望は無いのか？

なら魔法が見える目とちよつとした千里眼をくれてやるう。7もええじゃろう」

「うわ、案外通った」

「うむ、半分は詫びじゃ。次に容姿だが、根本は変えんぞ。日本人のままじゃ。」

少しイケメンにしといてやるかの。ハッハッハ」

「あとは・・・？」

「うむ、いつのころに行くかじゃが、カトレアの16の誕生日にラフォンティーヌ領を与えられる設定にした。」

そのパーティーの中でカトレアがサモンサーヴァントをし・・・」

「俺が呼び出されるってわけか」

「おぬしは何歳になるんじゃ？カトレアにお姉さんになってもらうなら今のままではまずかるう？」

「え？あ、ああ。じゃあ、6歳下の10歳で」

「よし、ならば」パチンッ

カミサマが指を鳴らした瞬間、僕は小さくなっていた。なるほど、小学3年か4年ぐらいだ。

「こんなものかのう？」

「そうですね、そういえばカトレアの病気ってなんなんですか？」

「ん？知らんわい」

「へ？なんで？カミサマでしょ？」

「所詮作品の中の設定じゃ。わしが手を下せば何の病気が分かるじやろうがそれはせん。」

言ったじゃろう？わしは人が頑張って作ったものが好きなのじゃ。

自ら改変などもってのほかじゃ」

「じゃあ、僕は・・・」

「おお、追加の設定じゃ。おぬしがカトレアのそばにいとカトレアの体調が少しよくなる、じゃ。」

これで、そばにいられる可能性も高まるじやろう」

「きっかけは飲酒運転とはいえないいろいろありますがございます」

「では行ってこい」

そう言われた瞬間、僕は落ちていた。

「さてさて、せいぜい頑張って面白い物語を見せてくれよ？ワシがこの車に飽きるまでにな」

気がつけば僕は別の場所にいた、見回しても全くどこか分からない、というか異常に注目されてる？

「いらっしやい。ようこそ来てくださいました」

そこには杖を持った少女の、屈託のない柔らかな笑顔があった。

第0話 どうしてこうなった、のかな？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。読まずにここを見たかた、ありがとうございます。

内容もありますが、改行や段落など文章の読みやすさについてもアドバイスいただけるとありがたいです。

草々

第1話 ハルケギニアのヴァリエール（前書き）

拝啓

まだまだ暑い日が続きそうですね。体調管理にはお互い気をつけましょう。

そしてまだ説明と言うか前提が続きそうです。話が転がりだすにはまだかかるかな？

第1話 ハルケギニアのヴァリエール

この日、「彼女」の16の誕生日であり、「彼女」が特例によりフオンテイーヌ家の当主となる日

珍しいことにその「彼女」 カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

は朝から体調が良かったのだ。

幼いときから体が弱く、また、いくら治療しても完治に至らないカトレアをして

「きつと今日はいいいことが起きる日だわ。きつと大事な日に神様がサービスしてくれたのね」

と思わせる初秋の朝であった。

カトレアの姉妹、3つ上の姉と8つ下の妹、にとつてこの日はある意味残念な日である。

特例が認められた、つまり子を生なずすことはなく、最終的に領地はヴァリエール家に還る。

カトレアの姉、エレオノールは齒噛みした。自身もアカデミーという魔法研究機関に身を置き

妹の病気を治す何かきっかけでも、と熱心に研究している彼女にとつて、分家の決定という事実

一つの区切りにされるだろう。今までは若さと公爵家という後ろ盾でもって許されていた研究も

これからは結果を残さねばならなくなる。

「偉くなってやる。そしてまた妹を救カトレアうための研究をする」と固い決意を新たにした。

カトレアの妹、ルイズは困惑した。まだ8歳の彼女にとつて姉は、カトレア姉と同時に母のような存在である。

これは母がいない、という意味ではない。ルイズに優しく接してくれるのが唯一カトレアだったのだ。

その姉がヴアリエールからフォンティーヌになる。このことは幼いルイズにとつて

「ちい姉さまがどこか遠くに行ってしまう」と恐怖させるのに十分な事態であつた。

この三姉妹の両親も心晴れやかとはいかなかつた。父であるヴアリエール公爵も自身の望みによる分家ながら

「いつかカトレアをヴアリエール家から嫁に出す」ことを諦めていなかった。

自身が治療に優位である水のメイジ（しかもスクエアクラス）でありながら、娘には

何もしてやれてないも同然。金を惜しまず方々手を打ってみたが、未だ効果は薄いようだ。

母、カリーヌの思いは筆舌に尽くしがたい。同じ女として、（貴族の）女としての義務を果たせず

（普通の）女としての喜びも知らぬまま生涯を終える。そのことを国すら認めた（形になった）ことに。

「なぜ自分の娘がこのような目に」と普段は決して見せぬ涙を、少しだけ、目じりに溜めていた。

パーティーは盛大なものであつた。それもそのはず、公爵家の娘の誕生日であると同時にその娘への

変則ながら家督の一部の相続、襲名披露も兼ねているのである。トリスティン国内の有力貴族たちに

見せ付けるような規模に『しななければならない』公爵の心中やいかなるものであつたらうか。

そのパーティーもつつがなく終わろうとしていた。王家の勅使から分家にかかる正式な書類を受領し

カトレアはカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌとなった。

その後は山のような貢物プレゼントを横に、いろんな貴族とのあいさつに終始しているのである。

普段ならもう限界であろう体も、この日はやはり快調であった。この珍しい事態に気をよくしたカトレアは

進んで普段は不可能である知らない人とのあいさつやおしゃべりをこなしていった。

さすがに疲れてきたところで、ヴァリエール公爵はカトレアを部屋に下げさせた。もう十分だという判断だ。

カトレアもその言葉に甘えた。妹ルイスも疲れたのだろうか、少し眠そうである。

そのルイズは姉エレオノールに連れられて三姉妹はパーティーから退席した。

そして今その3人はカトレアの部屋にいる。ルイズが最後に珍しいわがママを言ったのだ。

「ちい姉さま、今日は具合がよろしいの？なら、ちい姉さまの魔法が見てみたい」

これには2人の姉も驚いた。確かにカトレアは普段魔法は使わない。使うたびに体調を崩していたからだ。

「ちびルイズ！なんてことを言うの？いくら小さいあなたでもカトレアの体のことは分かってるでしょう？」

「いいのよ姉様。かわいいルイズ、今日は調子がいいからとっておきの魔法を見せてあげる」

と言うとカトレアは杖を取り出した。

カトレアには試したい魔法があったのだ。本当なら同い年の子たち

と共に魔法学園で行使したであろう魔法。
メイジにとつての通過儀礼、サモンサーヴァントである。

「我が名はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・
ラ・フォンテーヌ

私は求め訴える。私の横を歩いてくれる、私と共に過ごしてくれ
る、私に新しい世界を見せてくれるものよ

この呼びかけが届いたならば、是非、応えてください。そして、
できるならば、私を………」

その瞬間、カトレアの前の空間が光り始めた。これにはエレオノー
ルもルイズも動物たちも驚いた。

言い忘れていたがここはカトレアの部屋である。ルイズが「一緒に
寝るの」と言っただけ

カトレアの部屋に3人集まる形になり、そこで先のお願ひである「
魔法を見せて」と至る。

そしてカトレアの部屋にはかなり多くの動物がいる。

彼女が拾ってきたものであったり、彼女に心開いて付いてきたもの
であったり理由は様々だが

その通り様々な動物が彼女の部屋に駐留しているのである。

さて、そんな部屋にあふれる光の中から現れたのは、ルイズと年も
変わらないような黒髪の少年であった。

少年は尻餅をつく体勢で現れ、部屋を見回し、そして部屋の主であ
るカトレアと目が合った。

そこでカトレアは少年に声をかけた。「いらっしやい。ようこそ来
てくださいました」

そして「よろしければお名前を教えてくださいますか？」と笑顔の
まま少年にたずねたのだった。

第1話 ハルケギニアのヴァリエール（後書き）

早速第0話をお気に入りに入れてくれた人、ありがとうございます
読んだだけの人、ありがとうございます

感想もいただけると主がモニターの前で小躍りします。
良い点悪い点関わらずよろしく願います

敬具

第2話 自己紹介 使い魔？家族？家来？（前書き）

おかしいな、一人称主体にするはずだったのに、、
まあ、シカタナイネー

ちなみにカトレアの誕生日はコスタリカ（国花：カトレヤ）の独立
記念日から

まだまだいくよおー（オリ設定的な意味で）

第2話 自己紹介 使い魔？家族？家来？

「私はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌよ。」

あなたのお名前は？」

相馬優介だった少年は困った。こっちでの名前を考えてなかったのである。

しかしはつきりしてることは、彼が自分の名前が好きではないということであつた。

優しい、というだけで何も選べなかつた自分が、好きではなかつたのだ。

そんなこんなで彼が逡巡していると、カトレアは勘違いしたのか

「大丈夫よ、私たちはあなたに危害を加えるつもりはないわ」

「（いや、エレオノールとか超危険人物だから）あ、あ、あの、
」

「ちよつと、あなたどこから入ってきたのよ？ここはおそれおおくも公爵家のやしきななのよ？」

幼いながらもはつきりした声でルイズが言う。エレオノールも続く

「そうね、今日はパーティーだったから警備も普段よりずっと厳重なのよ？いったい貴方どうやって？」

「エ？えつと・・・目の前に鏡がいきなり現れて、それに触つたらなにかよく分からないけど、ここにいました」

「私の召喚に伝えてくれたってことね？」

「えつと、そうなるん、ですか？」

「きつとそうよ、もう落ち着いたかしら？じゃあ、あなたのお名前は？」

「・・・ソーマです」

「いい名前ね。歳はいくつかわかるかしら？」

ソーマと名乗る少年つかいまとカトレアの会話を横目にエレオノールは少年を観察し考えた。

平民にしては身なりが良すぎる、しかし家名を名乗る気配もなかったから貴族でもないだろう。

商家の子だろうか、あとで読み書きや計算をやらせればはつきりするかしら。

しかし、黒髪に虹彩は黒に近いこげ茶。どちらか一方なら珍しくない。しかし両方というのは

私も初めてだ。一体この子はどこから来たというのかしら？

と思うと同時にカトレアがそのことを聞いていた。

「あの、ジャパン、っていう国の、トーキョーっていう都市まちです」

「どこのいなかよ。きいたことないわよ、そんなにもまちも？」

「貴方、何かいい加減なことを言ってるんじゃないでしょうね？」

「二人とも。ダメよ？怖がらせたら。それに大丈夫よ。きっとこの子は嘘なんてつかないわ」

「じゃあ、聞くけど、貴方の所ではその髪と目の色は一般的なのかしら？」

「そう、ですね。普通は黒です」

「へえー、めずらしいところね？」

ソーマにしてみれば目の前にいるピンクブロンドの方がよほど珍しかったりするのだが。

そんなことを思っているとカトレアは杖を掲げた。

「コントラクトサーヴァントもしくなくちゃね」しかしこれには二人から同時に待ったがかかる。

「ダメよ！！」

カトレアも少し驚いたようだ。「そんなに大きな声ださなくてもいいじゃない？」

「カトレア、貴方は自分が何をしようとしてるのか分かっているの？」

「そうよ、ちい姉さま。そんなのと、キ、キ、キスなんてゆるされないわ！」

「ソーマは私が呼んだのよ。自分で呼んだ子の処遇は自分で決めます」

「カトレア、貴方ツ……。いいわ、このことはお父様とお母様に報告させていただきます。」

そして場合が場合ならアカデミーに「エレオノール姉さま！」え！？」

カトレアにしては珍しく怒気を含んだ声。

「ソーマはフォンテーヌの私にとって最初の家族です。そして私の最初の家来にします。」

ヴァリエール公爵様たちへの報告も自分で致します！」

口調、言い回し、呼び方……。それら全てが、カトレアが本気であるといっている。

エレオノールは諦めたように「わかったわよ。明日の朝食の時にでも話をしましょう、とここで」

ソーマのほうを向く。

「まだ名前を名乗ってなかったわね？」

私はエレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「わたしはルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

それよりちい姉さまそろそろねないと

「そうね、ソーマも一緒に寝ましょう？」

「ハア！？」本日二度目のハモリ。

「あら？明日の朝食までは少なくとも私が面倒を見るのが普通でしょっ。」

「だけどそんな、使い魔と一緒になんて」「・・・」「食い下がるルイズ。考えるエレオノール、そして
「わかったわ。私もこの部屋と一緒に寝ます。それが条件よ」
「え!？」ルイズが驚く番である。
「なによ?文句があるのかしら?」
「イイエ、ゴザイマセン」この力関係は絶対であるようだ。

エレオノールは廊下にいたメイドに2、3指示を出し、一度自分の部屋に戻っていた。

「あの子は何か違う気がする。何か・・・一体あの子のなにがひっかかっているのかしら?」

髪や目の色は違うけど普通の子、内容はとっぴで嘘か本当か分からないけど普通の受け答え。

その普通さに何か違和感を覚えているエレオノールであった。

しかし自分もカトレアには弱い。病気の妹、その妹にろくに何もしてやれない研究員。

「明日考えよう。杞憂に終わるかもしれないし」

カトレアに甘いとはいえ公爵であり、アノ「母」である。甘い判断などありえないだろう。

エレオノールは寝るための準備を済ましカトレアの部屋に向かった。

エレオノールがカトレアの部屋に入るときには既に、メイドに出した指示は完遂されていたようだった。

「皆で寝るから」と寝具を少し追加で持ってこさせたのだ。誕生日だったということもあるのだろう

メイドは笑顔で仕事をこなしていたという。ちなみに使い魔は動物たちの間に隠れていたらしい。

空気も読めるのだな、と少し感心すると同時に「そこで動物に混じって寝ればいいのでは?」と

期待せずに言い放つ。カトレアの笑顔が怖いと思ったのは初めてだ。

ルイズはカトレアの髪を梳かしてもらっている。よく見る光景だ。部屋の隅で小熊と戯れてる少年を除けばだが。そして寝る場所でもめた後によく就寝となった。

ソーマはテンパっていた。ベッドでほかの2人が寝てるなか、カトレアに抱きしめられているからだ。

そもそものはじまりは、ルイズがカトレアの隣がいいと言い、カトレアはソーマの隣で寝ると言い

エレオノールが安全管理上ソーマとカトレアの間に入ると言い、ソーマは皆の顔をきよるきよる見ていた。

結局エレオノールが折れる形となり、扉に近い方からルイズ、カトレア、ソーマ、エレオノールの順になった。

寝たふりをしているソーマはまさに目と鼻の先にいる憧れのカトレアに・・・何もできなかった。

さすが優しいと書いてヘタレと読む男である。緊張で眠れそうにない中、カトレアはつぶやいた。

「今日は来てくれてありがとう」「まるで友達を家に呼んだような軽さであった。つづけて

「あなたは私を守ります」「母のような暖かさ、優しさそして「だから、あなたも私を・・・」
最後は聞こえなかった。

ソーマは「あの『烈風』カリンから守ってくれれば十分だ」
そんなことを思いながら、どうすれば眠れるのかを考えるのであった。

第2話 自己紹介 使い魔？家族？家来？（後書き）

複数人数が入り乱れての会話文

文字だけで誰か特定できるような文章が書きたいです。

そして、読んでいただきありがとうございます

感想受付を制限無しにしました。というか自分のミスです
感想お待ちしております。

第3話 ヴァリエールの公爵夫妻（前書き）

執筆中に居眠りかましたのでどこかで無茶苦茶になってないか心配です

第3話 ヴァリエールの公爵夫妻

朝、ルイズは怒っていた、そして理解した。「こいつはちい姉さまを奪うワルモノなんだ」と。

きっかけは少し時間を遡さかのぼったところにある。

ルイズはカトレアに朝の恒例行事、おはようのキスをねだろうとしていた。

そしてカトレアの背中に抱きついた。背中？ルイズは疑問に思った。普段なら私を抱きしめながら寝てくれるはずなのに、どうして私に背を、、、！？

ルイズは気づいたのだ。この日のカトレアの愛情は別の方を向いていると。

そしてそれはおそらく・・・。

しかしルイズは気づかなかった。普段の姉カトレアならば寝ているときでも咳き込んで

ルイズを心配させたりしたのだが、この日はそれが『一度も』無かったことに。

そしてその原因が、彼女がワルモノと認定したその少年にあることにも。

朝、ソーマは困っていた。エレオノールがこっちに寝返りを打ってきていたのだ。

もとから僕を抱いているカトレア、こっちを向いて何かを求めるように手を伸ばすエレオノール。

逃げ場などなく僕の腕は絡め取られた。寝ているエレオノールは刺々しさもない綺麗な人だった。

僕は諦めたように天井を見つめながら「これからどうなるのかなあ・

・」と力なくつぶやいた。

三姉妹＋1は普段より少し早く起きていた。

エレオノールは殺気立ってるルイズをいぶかしく思いながら、彼女を自室へと促した。

3人で昨日の問答の続きをしたかったのだ。今ならばさらに冷静に話ができるだろう。

おそらくカトレアの決心は固い。ならば、この使い魔を従者として両親に認めさせるのが最善である。

少年の得度は知れないが、今までも拾ってきた動物たちをむりやりに認めさせてきた。

しかし今回は意思疎通ができる分、厳しいものになるだろうか。

いやむしろ誰がこの使い魔が姦計の類に関わってないと証明できるだろうか。

こうなると使い魔と両親次第である。私にできることといえば

「父様と母様に渡りをつけてあげるわ。もっとも、話のきっかけくらいにしかならないでしょうけど。

あと、せめて従者らしく振舞いなさい。命の保障すらできなくなるわ」

そう言っつて部屋を出ようと私を使い魔が呼び止めた。

「わかりました、ありがとうございます。時に私はカトレア様に大事なお話がありますので

朝食に遅れる旨、お伝え願えますでしょうか？カトレア様もよろしいですか？」

エレオノールは感心した。しっかり従者しているではないか、と。

「わかったわ、でもあまり遅くならないようにしなさい」そう言っつて部屋を出た。

「カトレア様、大事なお話が「カトレア」・・・」

「カトレア様」「カトレア」

「カトレア・・・さん」

「はい。なんでしょう、ソーマ？」

「実は・・・」

この日のヴァリエール家の食卓は普段より少しピリピリしていた。原因はというと

「クソッ、貴族のツラをしたハイエナどもが！」ヴァリエール公爵である。

パーティーで幾度となく持ち出された婚姻話。「子が生なせなくても養子という手がありますぞ？」

公爵からすればフォンティーヌ家乗っ取り話にほかならない。許せるはずがないのだ。

いや、本来の貴族としては正しい姿かもしれないが、今の公爵には無神経としか映らなかつた。

「お父様、カトレアが、フォンティーヌ家の当主としてお話があるとのことですよ」

「それが、今ここにいない理由か！？」まだ怒りは収まっていないようだ。

「おそらくそうだと思います」

「エレオノール、あなたはカトレアが話すであろう内容に心当たりがあるのですね？」

『烈風』の刺すような視線。エレオノールは意に介さぬふうを装い茶を一口。

しかし実のところ、カリィ又は事態をある程度把握していた。

当代、いやもう二度と現れないであろう不世出の風メイジ、カリィ

又にとつて

この屋敷内においてサイレントを使わない密談など筒抜けも同然なのである。

ようやくカトレアが来た。「失礼致しますわ」他人行儀な物言いに公爵は顔をしかめる。

カトレアが入ってきた瞬間、公爵は我が目を疑った。愛娘が少年を連れていたのである。

「そいつはなんだ？どこから連れてきたのだ？それとも誰かに押し付けられたのか？」

「この子は私がサモンサーヴァントで呼んだ私の家族であり従者なの」静かに、しかしはっきりと告げる。

公爵が気色ばむ。「サモンサーヴァントだと？人間を呼んだというのか、カトレア！？」

「そうなの、きっとカミサマからの誕生日の贈り物だわ」

「（間違っていない、間違っていないけど・・・）」思わずソーマは眉間をおさえた。

「ええい、どういうことだ一体！？エレオノール、お前知っていたのか？」

「・・・はい、その使い魔が召喚されたときに一緒に部屋にいましたから」

「お前がついていながらなんということだ・・・。わしは認めんぞ、家族だの家来だのと！」

「ならば、フォンティーヌ家当主として私が認め、面倒を見るだけです！」

「二人とも落ち着きなさい。カトレア、一応聞きますが、貴方は本気なのですね？」

「はい、杖にかけて」

杖にかけて・・・貴族にとっての宣誓である。

本気度合いを察したカリーヌは聞く。

「では、その使い魔と話をさせてもらえますか？」

カトレアとソーマは目を合わせ、うなづく。背中を押されたソーマはカリーヌの近くに行き、膝をつける。

「質問は単純です。貴方はどんな目的でここに来たのですか？」

「私は、主であるカトレアに請われ、主であるカトレアの願いのもとにここに来ました」

ならば私の目的は一つ。その主を助ける、苦難より救う、それに尽きるのでございます」

その言葉を聞いたカトレアの体が、雷に打たれたかのようにビクッとはねた。

表情にも少し驚きが混じっている。

「そして、できるならば、私を・・・助けて」

ソーマを呼んだときに願ったこと。ソーマと一緒に寝る前に言おうとしたこと。

しかし彼は母に、^{カリーヌ}助けると言い放ったのだ。私の願いを・・・。

「使い魔風情に何ができるといふんだ？ 凶に乗るな！」公爵が口を挟む

「アナタは少し黙っていてください」静かに言う。公爵も少々たじろいだ。

「貴方、名前はなんというのかしら？」

「ソーマでございます」

「そう・・・。カトレア、この子と二人で話をさせてもらってもよろしいかしら？」

「・・・はい、ですが」

「心配しないで。手荒なことはしません。」

アナタ、少し冷・静・になってカトレアと話をしてきたらいいかかしら？」

「あ、ああ、うむ」

「エレオノール、昨晩はずっと一緒にいたのでしょうか？ 貴方もカトリアと一緒に行きなさい」

「お母様、私も」

「ルイズ、貴方は魔法の練習があります。貴方はまだ魔法が使えないのだからきちんと取り組みなさい」

魔法のことを言われルイズは肩を落とす。

朝食が終わり、食堂だった広間に残っている二人。

カリィヌとソーマはまるで決闘直前のように対峙していた。

「（烈風カリィヌとタイマンとか死亡フラグ上位種じゃないか？）」

「さて、単刀直入にうかがいます。貴方は一体何者なのですか？」

母の目から騎士の目となったカリィヌが静かに尋問たずねた。

第3話 ヴァリエールの公爵夫妻（後書き）

読んでいただきありがとうございます

お気に入り登録ありがとうございます
評価頂きありがとうございます

感想乞食です

いいわるいかわからず感想お待ちしてます

第4話 序盤の山場 例：DQ5のラインハットの洞窟（前書き）

さてそろそろ設定が活かせるかな？

今回から様式を少し変えました。読みやすくなってるでしょうかね？

第4話 序盤の山場 例：DQ5のラインハットの洞窟

「とりあえずどういうことか順番に説明してくれるか？」

公爵は幾分落ち着いた様子であった。しかしそれでもまだ晴れぬ疑惑が使い魔への猜疑心をぬぐえないでいる。

「かわいいルイズにお願いされてね、ゴホツ、サモンサーヴァントを、してね……。そうしたらソーマが来たのよ。昨日は、ゴホツゴホツ、はあ、体調も良かったし」

先ほどまでとは打って変わって、苦しそうなカトレアである。

昨日も、いやついさっきまではあんなに元気そうだったのに、そう思ったエレオノールが説明を引き継ぐ。

「私もずっと一緒だったから私が説明するわ。カトレア、貴方は少し楽にしてなさい」

エレオノールは昨日知りえた情報を話していく。使い魔の名前、聞いたことのない町から来たこと、コントラクトサーヴァントを止めたこと、そして使い魔の身なりや会話からエレオノールが推測したことを話し始めたところで彼女は気づいた。

「ねえ、あの子、昨日と違う服を着てなかったかしら？」

「ああ、あれ？持ってきてきたみたいなの」

「持ってきてたって、あの子ここに来たとき手ぶらだったじゃないの!？」

「うーん、何かのマジック、ゴホツ、アイテムみたいだったけど」

「あの子そんなの持ってたの？」

研究者としての血が騒ぐ。服を圧縮していたというのだろうか？興味湧いてきた。

「よく分からないのだけど、手のひらサイズの、ゴホ、水晶の中にね、ふう、すごく大きな空間が圧縮してあるみたいなの」

苦しそうに、しかし、内容については事も無げに言い切った。

「ハア!？」

それを聞いた親子はハモっていた。

実は、朝食前、エレオノールが自分の部屋に戻った後に、ソーマは『別荘』をカトレアに見せていて、しかも実際に2人で向こうに行っていたのだ。それ故か、カトレア自身は原理がよくわかっていなくても、状況だけは把握できていたのだ。さすが勘のいい娘である。

納まらないのはエレオノールである。

「なにそれ？なにそれ！？ナニソレ！！研究シナクチャ研究シナクチャ研究シナクチャ」

姉は未知のマジックアイテムに心躍らせる一方で、公爵は逆に落ち着き、難しい顔をしていた。

「(・・・一体何者なのだ。未知のマジックアイテム、おそらくそれ1つだけではないだろう。やはり何かの陰謀に加担、いや、本人のあずかり知らぬところで片棒を担がされてるのかもしれない)」
しかし、それでもなおその使い魔を信頼しているであろうカトレアを見てさらに一層悩む羽目になる公爵閣下であった。

「貴方は一体何者のですか？」

見るものに無条件で威圧感を与える射抜くような視線、少年の一挙手一投足すら見逃さぬといった意思の光を湛えた目。

「私はカトレア様呼び出された使い魔でございます」

膝をついた状態で答える。こちらの目もカリーヌをまっすぐ射抜いている。

「貴方は本当に人間なのかしら？」

「・・・質問の意図が、分かりかねます」

これは本音である。ソーマはまだ人間を辞めたつもりはなかったからだ。むしろ目の前にいるかつての姫騎士の方がいくらか人間を辞めているんじゃないかと思うほどである。

「そう、話すつもりはないということね？」

ソーマには見えていた。カリーヌから迸る魔力が彼女の隠し持つ杖に集まりだし、自分を襲う形になっていく様子が。

「エアハンマー！」

不可視の風の槌、『烈風』が使えばそれはもはや壁であろうか。

しかし、(順番的に)殺傷能力の低い魔法を使ったという事実はソーマを幾許か安心させた。

そう、彼は避けていた。カリーヌの目に驚愕が浮かぶ。子供の身体能力で避けられるはずがないのに避けたことだけではない。彼は子供同然の身体能力で『烈風』のエアハンマーを避けたのだ。

「よく、避けましたね」

椅子から立ち上がりながら『烈風』は言う。実のところ、彼女はこの少年を初手で制圧したかった。見た目に似合わぬ場慣れした物言い、『烈風』を恐れぬ態度、朝食に遅れてきた事実。『烈風』の中では結論が出ていた。

「(コイツは私と戦う準備ができている!)」

彼女にはそれがどのような準備なのか、畏なのか、魔法なのか、もしくは一対一でも勝ちうる実力があるのかは計りかねていたが、そういう結論であった。

一方のソーマはといえば先ほどの安心もどこへやら

「(今のエアハンマー、子供に向けていい速さじゃないだろ!)」
当たっていればおそらく、この広間の、あの遠い壁まで飛ばされていたであろう威力。もちろん骨の何本かは折れるだろう。魔法の種類で安心はしたものの、予断など許せる状況ではなかった。

「どついつつもりですか？」

ソーマは静かにたずねる。

「私はフォンティーヌ家当主のカトレア様に使える身、その私に杖を向ける意味が分からないわけではないでしょう？」

小さい体での精一杯の背伸び、威圧。しかし『烈風』は躊躇なく答える。

「洗脳されていないとも限りません。なによりそんな急な話を鵜呑みにできるわけがありません」

ある意味当然の返答。ソーマにしても、原作を知らなければカトレアがなぜここまで無条件に自分を信じているかなどわからなかったであろう。いやむしろ、知っていても行きすぎと思うぐらいである。

「それはあとで公爵閣下に聞くか、ご自身で確認すればいいことです」

ソーマも杖を抜く。

「（付け焼刃、と言うより一夜漬けでどこまでもつか・・・）」

カトレアとの別荘への旅はこの『烈風』対策のためであった。別荘には自分の杖が用意されてあったのだ。カミサマからのありがたいメモ付きで。

カトレアは自分の母を信じていると同時に、ソーマが魔法を使う光景を見て、あの時に二人だけで話すことを許したのだ。

「やっと杖を抜きましたね。ようやく本気ということかしら？」

「会話中もずっと本気でしたよ」

ソーマが漏らす。確かに自分は相手にとって正体不明である。それ故に誠心誠意応えたつもりだったのだ。しかし逆にその態度こそがカリーヌを硬化させていたのはいかなる皮肉であろうか。

「先に言っておくわ。貴方にはまだ聞きたいことがあります。だから殺しはしません」

「死ななければどういう状態でもいい、と聞こえたのですが？それより私が全力であっても貴方を殺すことはおそらく不可能ですよ？」「ふふふ、本当にそうかしらね？」

ハルケギニア公式チートvsカミサマ由来の後天性チート、開戦

第4話 序盤の山場 例：DQ5のラインハットの洞窟（後書き）

信じられるか？これ、原作開始の7年半前なんだぜ？

サイトとの絡みも頭の中にあるのに、そこに行くまでに燃えつきそ
うです。

読んでいただきありがとうございます

お気に入り登録ありがとうございます

評価ありがとうございます

感想お待ちしております

第5話 序盤の強敵 例：DQ5のゲマ（いわゆる無理ゲー）（前書き）

戦闘描写です。疲れました。

細かい描写を挟みながら戦闘のスピード感を維持する。
物書き歴3日の自分にできるわけ無いですね。

第5話 序盤の強敵 例：DQ5のゲマ（いわゆる無理ゲー）

殺す気はないと宣言した『烈風』であるが、その攻撃は苛烈であった。

この、部屋としては広いが、戦場としては狭い広間を縦横無尽に飛び回りつつ、ソーマに次々と魔法を浴びせていく。しかし彼には届かない。不可視の魔法を紙一重で避け続ける様は『烈風』にある種の確信を抱かせていった。

ソーマには魔法が見える、ならば説明もつく。その前提で殺傷能力の高い魔法も織り交ぜ撃っていく。

『烈風』の攻撃の幅が増えたことによりソーマは一気に劣勢となる。攻撃が避けきれなくなってきたのである。ソーマは直撃するであろう魔法の一部を、自身の魔法でかろうじて相殺することにより耐えていた。

もちろん直撃しないだけで相殺しきれなかった残りは喰らっているのだ。体は10歳児、体力は心許ない。押し切られるのも時間の問題だろう。

ソーマが勝つには、前提として彼が固定砲台のように動かず『烈風』に魔法を浴びせる必要があるのだが、実際は彼が攻撃する時間はおろか、止まる隙さえ与えてもらえていなかった。

ソーマは考えていた。カミサマにもらった能力のうち、今の自分に使えるのはこの世界の魔法と魔眼、あとは知識だ。そして、この世界の枠に囚われない想像力。知識と想像力。これこそ、いやこれのみが、今の自分の武器だ。

ちなみに王の財宝は手加減も制御もままならなかったもので、武器・武装という点においてはお休みであるが、対魔法用の盾となるものを見つけていた。

ガ・ジャルグ、魔法を切る槍。つまり“あの”ゲイ・ジャルグなのだが、この場ではおあつらえ向きだろう。

『烈風』は刮目した。ソーマがどこからか取り出した槍、その槍の存在感もそうだが、その槍を振るうことで彼は、まるで魔法などなかったようにやり過ぎたのだ。

かつて戦場で養われた本能が警告音を発する、あの槍は危険だと。そんな刹那の逡巡で、攻守が入れ替わった。

ソーマは躊躇ためらわなかった。今できることを全力でする。もしも一度主導権を渡せばもはや耐える術はないだろう。

まずはタバサでおなじみウインディ・アイシクル。氷の矢である必要は無い。礫つぶてで十分だ。イメージは散弾銃。杖を振るう、何度も、何度も。

氷礫の銃弾は面を作り『烈風』へと向かう。氷の質量は単純な風の魔法で吹き飛ばすことができないのだろうか、弾幕の薄いところへ高速で移動しながら、ブレイドでもって氷を切り伏せていく。

いかに『烈風』とはいえ、やはり人の身、呼吸というもの、いわゆる溜めが存在する。いかなる偶然か、弾が尽きると『烈風』の呼吸のタイミングは同時であった。

もし『烈風』に余裕があったならば、次の瞬間切り伏せられていたのはソーマだったかもしれない。

ソーマはかまわず次の魔法を展開する。ファイヤー・ウォール、文字通り炎の壁である。ソーマはそれを風魔法で前方へ飛ばしたのだ。

今度は少し『烈風』にも余裕があった。どうやらこれは乱射してこないらしい、自分の移動速度を持ってすれば避けることもできる。動きながらそう考え、どうやって彼を追い詰めるかを模索しよう

としたとき、突如、炎の壁に穴が開いた。

その瞬間『烈風』は後方へ弾き飛ばされた。壁に当たる寸前で魔法によりダメージを抑えたものの、彼女の顔には困惑の色が広がった。

「なぜ炎の向こうの私をここまで正確に狙えたというの!？」

声には出さない叫び。それもそのはず、炎の壁ごと自分をエアハンマーで打ち抜いたのだ。いったいどのような種があるというのか。

ソーマはほくそ笑んだ。カミサマにもらったもう一つの魔眼・千里眼を、この狭い空間で有効活用してみせたのである。

しかしソーマは休まない。次の魔法は小型のストーム。そこに床の破片から錬金した粉末を舞わせ、そのストームを『烈風』に向かって放つ。

彼女はもちろん難なく避けた、しかし、今の彼女に油断など無い。ソーマが発火の魔法を自身のストームにかける。いわゆる粉塵爆発である。後方で起きる爆発。その瞬間、彼女もウィンドを唱え、盾としたのだ。

『烈風』は冷や汗を流した。ただのストームに見えたからこそ、警戒した。予想は的中。彼の放ったストームが爆発したのだ。

炎をとまなつた爆風と衝撃だけだったのが幸いであった。あそこに石でも混ざっていれば自分のウィンドの盾を抜かれていたかもしれない。

「何が『全力でも私を殺せない』よ……。まったく」

更なる危険人物認定を受けるソーマであった。

ソーマは焦っていた。今の不意打ちの爆発、それで決めるはずだったのである。それが防がれた。

実はソーマはまだ、なるべく傷つけずに勝とうなんていう甘い考えを持っていた。だからこそその先の粉塵爆発の規模である。

制圧だけならもつと広範囲を爆発させればよかった。自分の守りについては王の財宝には盾もあった。つまりは勝てたのだ。

しかし彼はその勝機を逸した。そして何より、彼の精神力が限界に近づいていた。

もとよりハルケギニアの魔法に触れてから丸一日しか経過していないのだ。三十路の精神力と科学知識をもつてしても、精神力の無駄遣いは避けられなかったのである。

魔法を止めたソーマを見据え、『烈風』は考えようとして・・・やめた。自分の全速、全力でもつてして叩くことにした。

実は彼女が攻勢時に何度かこの手段を採ろうとしていた。しかし明らかに近接戦闘に弱そうな彼の躯体は、それ自体が畏の可能性を考えさせた。

余談ながら、それは考えすぎであった。近接戦闘での不利を補いながら、勝利条件を満たす武器を、彼は持ちえていなかったのだ。

そこから決着までは一瞬であった。全速力でもつてしてブレイドを叩き込む『烈風』に対しガ・ジヤルグで受けるソーマ。槍に触れたブレイドが消え、それでもなおレイピア型の杖は止まらない。

そうしてソーマは力づくで槍もろとも壁まで、意識ごと吹き飛ばされたのだった。

気を失ったソーマに近づきながら、カリー又は息を整え、考えていた。

「手加減されてたかもしれない」

これは戦闘中ずっと彼女に付きまっていた感覚であった。あの槍の威圧感だけではない。魔法の運用にしても、もつと効果的にこちらにダメージを、いや、致命傷すら与えられるはずであった。

そうしなかったのか、できなかったのか、したくなかったのか。

今考えたところでしょうがないことだ、と割り切った。

そうしてソーマを抱きかかえる。重さはルイズと変わらないかもしれない、そんなことを思いながら辺りを見回した。

むちゃくちゃに散らかった“元”食堂。それよりも、不思議なことにあの槍が見つからないのだ。

この子はまだまだ謎が尽きない。しかし先ほどの戦いは試合であつて死合いではなかった。カリー又はこの戦いを通じて得た感覚を信じた。

「少しは信じてもよさそうね。聞きたいことも増えたし。鍛えがいもありそうだし、これからが楽しみだね」

エレオノールたちが入ってきたのは、そんな恐ろしい独り言をつぶやいたのと同時であつた。

第5話 序盤の強敵 例：DQ5のゲマ（いわゆる無理ゲ）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

自分なりに頑張った結果がこれです。

今回についてはぜひとも感想が聞きたかったりするのでよろしくお願ひします。

最後になりましたが

読んでいただいた皆様、お気に入りに入れて下さった皆様、評価していただいた皆様

ありがとうございます

第6話 話は本人の知らないところで進む(前書き)

あっちはアツいバトルを繰り広げる一方

こちらでは、、、やっぱりバトルです、静かな静かな戦い

何でみんな、ほのぼのしてくれないの？

第6話 話は本人の知らないところで進む

そんな現場から少し離れた部屋。父と娘二人の会話は、もはや親子の会話とは思えず、その内容も堂々巡りというありさまであった。その会話は、見方を変えれば当主同士の折衝で、必死に双方をなだめる調整役の図なのだが、一番冷静で、二人の間を取り持とうしているのはなぜかエレオノールであった。

エレオノールは知っていた。父も妹も、絶対に譲れないところを譲る人間ではないのだ。だからこそその調整役である。立場的には第三者といえる。ソーマが持っているという謎だらけのマジックアイテムに興味はあるが。

しかし、やはり先ほどから妹の様子がおかしい。いや、むしろいつもどおりの病弱な彼女なのである。やはり、昨日からの元気さはちょっとした小康状態というだけだったのであるうか。いや、それにしては……。

カトレアをずっと見てきたエレオノールである。昨日からの妹の体調になにか特別なものを感じ取ることは難しいことではなかった。

「ソーマを私の、フォンテーヌの家族として迎え入れます」

「そんなことが許されると思っとなるのか、カトレアよ!？」

会議は踊る、されど進まず。それはたとえ二人きりの会談であっても、いや、二人きりだからこそ対立する点が明確になるからであるうか、それとも似たもの親子、頑固同士のなせるわざか、互いの主張はただひたすらに平行線であった。

カトレアはソーマを使い魔としてではなく、人として、家族として付き合おうとしている。そして彼女はさっき彼が言ってくれたことを思い出していた。

「主を助ける、主を救う、そのために来た」
彼には私が難しい病気を抱えていると告げている。それでもなお、私を助けると、両親の前で宣言したのだ。ならば、私は彼の居場所をハルケギニアに創る。

公爵は悩んでいた。娘が明確に反抗してくるのだ。普段ならば聞いているフリをしながらも、蝶のようにヒラヒラと言葉をつむぎ、気がつけば逆に納得させられている。

しかし今日はどうだ。

対立することを厭わず、意思を持って自分の意見を通そうとしている。おそらく、かわいい娘の初めての親への反抗だろう。

そんな娘の思いが、ただでさえ使い魔に向けられていて、さらにはその使い魔が人間の、しかも男（の子）だとは……。さらに頭を抱える公爵であった。

実を言えば公爵はカトレアの要求を全部でなくとも呑まざるを得ないことを理解していた。たとえ、自分が拒否しても、カトレアは彼女の思うとおりに話を進めてしまっただろう。

フォンティーヌ家はヴァリエール家の後ろ盾で成り立つ、言葉を選ばずに状況だけ正確に言い表すならば傀儡である。もちろんトリステイン貴族の間でもそれは周知の事実である。

しかし、本音と建前は別である。そのことを表立てて非難する者などいない。それは公爵と同時に、フォンティーヌ家の設立を認められた王家にも喧嘩を売る行為だからである。

誰がすすんで虎の尾を踏みにいこうか。

つまりは、対外的にフォンティーヌが一貴族と認められている以上、ヴァリエールが何を言っても仕方がない。当主カトレアが決めたことを公爵が認めないからといって、カトレアの決定が覆るわけ

でもないのだ。

それに、監視の目が届かなくなる可能性がある。まだ得体の知れないあの使い魔はカトレアともども手許においておきたい。

その使い魔と二人きりで話すと言ったカリー又は大丈夫なのだろうか。

公爵の表情が幾分柔らかくなり、それを見たカトレアがたずねる。「どうなのですか？ヴァリエール公爵」

そう言い切る前に爆音が届いた。あわてた様子でメイドが入ってくる

「し、失礼します！食堂の方から、その、す、すごい爆発音が」
聞くが早いか公爵は立ち上がり、食堂へ向かっていった。

エレオノールもそれに続くこうとするがカトレアに呼び止められる。

「エレオノール姉さま、私も行くわ。貴方も手伝って」

メイドを近くに呼び姉とメイドに支えられながらカトレアも食堂に向かった。

ヴァリエール公爵が食堂に入る、しかしそこはどうも食堂とはいえない空間になっていた。吹き飛ばされた椅子、ところどころ焦げたり切れたりしてる食卓、床や壁もそこかしこに陥没やひび割れがある。

しかし被害こそ見受けられるもののそこはまだ『部屋』の体裁を維持していた。

これがどちらの手によるものであっても公爵は驚きを隠せなかった。

妻が原因ならば、ここまでする必要があったということ。

彼が原因ならば、ここまで多種多様の被害をもたらすだけの手段があり、その間、『烈風』の攻撃に耐えたということだ。

公爵はそこまで考えたとき、部屋の奥に自分の妻の姿を見つけた。ここでも驚いたのは妻の服がぼろぼろだったからである。それとも、その妻の手に抱かれた少年の姿を見たからであろうか。

「大丈夫なのか？」

「私のこと？それともこの子のことかしら？」

少しからかうように言う。

「もちろんカリーヌのことは心配だ。しかし、今その使い魔に死なれると、カトレアがどうなるか分からんからな」

「そう。で、そちらの話はついたの？」

「まだだが、初めてカトレアに反抗されてな」

「そう、あの子、そこまで・・・」

しばらくの沈黙。カトレアの性格を鑑みるに、彼女の反抗に両親として思うところがあるようである。

公爵が切り出す。

「お前のほうはどうなんだ？その子を見極めることはできたのか？」

「全部分かったわけじゃないけど、そうね、信じてもいいんじゃないかしら？もしもの時は屋敷の一部ごと吹き飛ばせばいいのよ」

「そうならないことを祈るか」

二人は静かにまだ気絶したままの少年を見つめた。

カトレアとメイドと共に食堂に乗り込んだエレオノールは心底驚いた。見るも無惨、とまではいかないまでも、明らかに争ったであろう爪あとがそこかしこに見受けられる。

そしてぼろぼろになってお母様に抱きとめられているあの使い魔の少年。

エレオノールは理解した。あの子が、あの恐怖の権化カリーヌと戦ったとデジレいうことを。

そこまで考えて、部屋の奥で両親が会話してる姿を確認し、その

会話が終わったころであろうか、エレオノールはもう一度驚くことになった。

なんとカトレアが一人で歩いて両親の方へ向かったのだ。さっきまでは立つのもやっと、二人に抱えられてようやく歩いていたというのに。

父である公爵も驚いた。さっきまでは、やはり病人のようであったカトレアが、今は昨日のように、あるいは今日の朝食のときに血色のいい顔をしているのだ。

そんな驚きをよそに、カトレアは二人のもとに近づき、言い放つ。

「公爵夫人、これはどういうことですか？」

「落ち着きなさい、カトレア。貴方の話を聞いてあげようというのよ？」

「え？それは、本当なのですか？」

「ええ、ただしいろいろ条件があるわ。そうね、まずはこの子がちゃんと自分のことを私たちに教えてくれることから、かしら？」

そのころ、エレオノールとついてきたメイドは情報の処理が追いつかず立ち尽くしていた。

第6話 話は本人の知らないところで進む（後書き）

ええと、補足というか言い訳というか。

粉塵爆発って規模が規模ならそこまで大きな音ってしないですよね。あくまで粉末状の可燃物の急激急速連鎖的な燃焼反応ということ？
でしょうから。

でも今回は爆音です。なぜ？魔法だからさ！ほんとゴメンナサイ。
r z

そして、読んでいただきありがとうございます

お気に入り登録、評価大変うれしく思っております。

感想絶賛受付中です。「読みにくいよバカ」でもいいです。
お待ちしております。

補遺 別荘での話（前書き）

要するに、3話でカトレアとソーマが二人つきりになった後ですね
本来なら話の中に組み込むべきなのでしょうけど

自分の想像力と構成力じゃいかんともしがたかったので

こういった形で放出（はなてん）です

ついでながら、実はカミサマと相馬の間にあつた「齟齬^{そご}」が少しず
つ明らかに！？

補遺 別荘での話

「カトレア・・・さん」

「はい。なんでしよう、ソーマ？」

「実は、見せたいものがあるんです。で、その前にサイレントをお願いできますか？」

「ええ、わかったわ」

そして僕は何も無い空間から水晶玉を取り出して見せた。

王の財宝の部分限定開放なのだが、やってみたらできた、という程度であった。

「綺麗な水晶ね、ん？小さなお城が入ってるのね。ところでこれで何をするのかしら？」

その水晶見たカトレアの反応は一般的なものであったと言えるだろう。ただこれがこちらで言うマジックアイテムの類だと気づいた点をのぞけば。

「これは別荘と違ってですね、空間をこの中に圧縮している・・・と言って通じますか？要はこの水晶の中は別の世界で、しかも、行き来することができるとです」

「まあ、それはすごいですわ」

手を合わせながら、驚きの言葉を漏らす笑顔のカトレア。とても驚いているようには見えないのはご愛嬌か。

「それでは、行ってどうするのですか？」

理解が早い、というかこの勘の良さは非常にありがたい。

「実はこの世界と別荘の中とは時間の流れが違うのです。こちらの1時間が別荘の24時間となります。なので、こちらの1時間を使って自分に何ができるかを確認したいのです」

「不思議なアイテムね。一体どこで手に入れたのかしら？それに、そんなものを持つてる貴方は一体どこから来たのかしら？昨日のト

「キョーも嘘ではないのでしょっけど」

やはり、どうしようもなく勘がいい。しかし勘のよさゆえの思い込みは危険すぎる。

「カトレアさ・・んの味方です。それだけは、信じてください」「ええ、信じてるわ。人も見極めるのも貴族の仕事よ？それに私は当主ですからね」

「ありがとうございます、それでは行ってまいります」

「あら？私は連れて行ってくれないのかしら？」

当然のように聞かれた。そうだよ、カトレアってこういう人だよ。しかし一応説明をする。

「向こうは安全な場所もありますが危険もございます。それに私自身もよく把握してない部分がございます」

「あら、危険ならなおさら一人では行かせられないわ」

「どうやらついてくることは決定事項のようだ。懸念していたとはいえ・・。仕方がない、腹をくくるか。カミサマ、普通のを頼むぜ。」

「はあ、わかりましたでは行きましょう」

そうして二人はこの部屋から消えた。

「まあ！すごいですね！」

さもありません。南国風に彩られた、いわばリゾート地のような出で立ち。気候的にトリスティンにはありえない光景だろう。しかし、なぜか暑くもなく寒くもない。感覚からもたらされる情報がアンバランスだ。

「たぶんこつちだと思っただけど・・。」

カトレアを連れて歩き出す。しかし城が見当たらない。しかし、何か建物が見えたのでそっちへ進むと、今度は僕が驚く番であった。「なんでだよ・・。」

そこには、かつて自分がたまに遊びに行っていた田舎の家があった。

違いといえば庭の広さと二階があることだろうか。いや、中も変わっているかもしれない。

「どうしたの？」

「いえ、なんでもありません。こっちはです」

玄関へと案内する。一応靴は脱いでもらった。すぐに文化の差を理解してくれたようだ。

「ロマリアにあつてはロマリア人のすることに習え、って言ってね。そっちにもあるんですか、と思いながら家の探索を始める。」

「ふう……。すごいわね、ここは」

「そうだね……。正直僕も驚いてます」

今僕たちは縁側に座っている。カトレアはといえば座布団が気に入ったのか、しきりになでたりしてる。

探索の結果、田舎の家とは似ても似つかないことがわかった。明らかに現代の施工技術で古い家を再現した類だ。家電についても最新の物なのだろう。電気がどこから来てるかは気になるが。

部屋の数も増えている。和室、台所、応接間に普通の部屋が6つだ。収納スペースも考えればもとよりずっと広いだろう。そして風呂が馬鹿でかい……。誰の趣味だ？

「では飲み物でも持ってきてますね」

和室を通り台所へ向かう。テーブルの上にさっきまではなかったメモと……

「これはどういう意味なんだ？」

伸縮するタイプの警棒であった。とりあえずメモを読もう。

「やあ、元気にしてるかな？こっちは楽しませてもらってるよ。さ

て、建物については要望がなかったから適当に選んでおいたよ。お城とか面ど、仰々しいし管理が大変だもんね。

その警棒は君の杖だよ。持ち運びに便利だし丈夫だし言うことなしだよ。でもまだ仮契約状態だから魔力の消費が激しいかもしれないよ。折を見て本契約するか別の杖を見つけてね。

ちなみに別荘の中なら君は杖なしでも魔法が使えるよ。だってこの世界そのものが君の杖みたいなものだからね。ついでに、ここならカトレアの病気を抑える効果も高いから少しぐらい離れてても大丈夫だから安心してね。

後は君の能力についてかな？今の君の身体能力はただの子ども同然、油断するなよ？王の財宝だけど中身考えてなかったでしょ？適当に入れておいたよ。わしより下級の神の持ち物も適当に入れてるから確認してね。

使い方だけど、ここに来たってことはゲートの開け方はわかってるね？慣れれば自分から多少離れててもあけられるよ。あと物の呼び寄せ方だけど、ある程度は出したいものの明確なイメージを持ってね。『剣』ってだけじゃダメだから。後で確認した方がいいよ。

そう、宝具の一部は封印してるよ、エアとかエクスカリバーとかスパボでも1面からマップ兵器はないでしょ？アヴァロンは自分には使えないからね。カトレアに、とかズルはダメだよ。

知識は検索型になってるよ。ある事柄を思い浮かべて、それに関わる事項があれば浮かんでくるはずだから。範囲は『現代までの地球レベル』だからね。伝わってなくても存在してたらひっかかるはずだよ。

あ、そうそう、コントラクトサーヴァントだけど、しばらくやめた方がいいよ。キスした瞬間に魔術刻印刻むし魔術回路みたいな物も一気に全部通すから、子どもの体じゃあ耐えられずにショック死するかもね。

最後に二階だけど、階段なかったでしょ？壁のどこかが君の魔力に反応して開くようになってるから探してね。上にはいろいろある

から期待しててね。

それじゃあ頑張つてね。初戦から死なないようにね「ハート」

思わずこめかみを押さえた。小筆で書いたような字、最後のハートマークまで無闇に達筆なあたり、一層力が抜ける。

気を取り直し、杖けいぼうを手に取ったところで重なっていたもう一枚のメモに気がついた。

「そっちの魔法の呪文だ。今、どれだけ使えるかは君次第だけど、何ができるのかぐらいは確認しておきたまえ」

謎の口調がひっかかる。しかし、これがないと困っていただろう。カトレアも全呪文を把握してるとは思えない。

とりあえず紅茶を入れよう。美味しい紅茶の入れ方はもう「知っている」んだ。

縁側まで戻るとカトレアは眠っていた。僕が使っていた座布団を抱えながら、それは幸せそうに。

和室の机に紅茶を置き、カトレアの横に座る。眠っているカトレアの顔を見る。

綺麗だ、少女から女性に成長する過程、開きかけた蕾つぼみのような印象をつける。じっと見ているだけで、まるで悪いことをしてる、そんな気分させられる。

そんなカトレアに手を伸ばし・・・しかしその手は虚空をさまよった。なでるとか髪に触れるとか普通だよね、普通なのか、いいのか？

その瞬間、さまよっていた手が掴まれた。

「ヒアアッ！」

変な声が出た。ありえないほどの速さで心臓が鼓動する。浅くなる呼吸。しかしその掴まれた手はそのままカトレアの頬まで誘導された。

「ふふつ、女の子を待たせた罰です。それと、こんな素晴らしいところに連れて来てもらったご褒美」

寝転がったまま、僕の手を離さずにカトレアは僕のほうを見る。少しいたずらっ子のような笑みを浮かべながら見つめられる。

「ア、ああ、あの、お茶が冷め、ちやいますから」

これが精一杯であった。

このあとは特に何かあったわけではない。着替えを見つけていたので着替える、お腹がすいたので軽食を作る、魔法の練習をする、精神鍛錬と称して座禅を組みそこで王の財宝の中を整理確認する、カトレアにトイレの説明をする、柱に僕の身長を刻んでもらう、体重計の説明をすると凍れる笑顔で返される、自分の身体能力を確認する、晩御飯を作り（脳内レシピ最強！）食べるまではよかった。シャワータイムは危険だったが、事前に言い含めておいたしなんとかやり過ごした。それにしても『くまマジックアイテムなんだ』は便利な言葉である。

そして問題発生。別荘の仕様で、別荘時間にして24時間経過しないと外に出れないのだ。

うん、ついて来るって言われてすっかりぶっ飛んでたぜ。つまり一緒に寝る・・・必要は無いがおそらくカトレアは許してくれないだろう。やばい、食われる（違）

「さっき私に触ろうとしたのは誰だったかしら？」

やめてごめんなさいゆるしてください。どうしてそんな満面の笑みなんですか、カトレアさん!?

洋室にベッドもあったがこんな機会は無いということと和室に布団で寝ることに。もちろん二組目の布団を出そうとしたらカトレアさんに止められました。

そして例によって抱かれながら寝ています。

「狭いからくつつかないとね、ふふっ」

笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点である。はい、今、全力で理解しました。

「もし、僕のことを皆に認められなかったらどうするんですか？」

「そんなこと考えなくても大丈夫よ。私が認めればそれで十分で十全なの。後はおまけのようなものよ」

「でも、いろいろと面倒を・・・」

「貴方の主が大丈夫って言ってるのよ。私が信じられないかしら？」

「そんなことはないですけど、それがカトレアさんの負担になったり・・・」

「うふふ、ありがとう。本当に大丈夫よ」

僕を抱きしめる力が少し強まる。

「さあ、今日は貴方も疲れてるでしょう？早く寝ましょう。明日は貴方のお披露目という大事な日なんだから」

その通り疲れていた僕は、そのカトレアの言葉を聞き届けたかどうかの眠ってしまった。

こうして僕たちの“余分な”1日は終わった。

翌朝、布団をしまい、着替えを済ませた僕と、目覚まし時計とにらめっこしていたカトレアは元のハルケギニアに戻るのであった。

補遺 別荘での話（後書き）

書いてみると説明のオンパレードにして過去最長を記録しました。さかのぼっての説明回は矛盾が怖いです。

ソーマ視点になりましたね。じゃあきつとカトリア視点もあるわけ。

書きませんよ？きつとそんな要望もないでしょうし・・・無いよね？

ここまで読んでいただきありがとうございます

お気に入りに入れて下さる人数が増えるたびに感激しております。本当にありがとうございます。

感想もちらほら頂き始めました。

みなさまぜひぜひ感想をよろしく願います。

第7話 ルイズのことは忘れてたわけじゃないんだからねっ！(前書き)

実は結構難産だった回

理由は自分のわがままでキャラを動かそうとすると
いうことを聞いてくれないとかそんな感じ

第7話 ルイズのことは忘れてたわけじゃないんだからねっ！

カトレアは考えていた。自身もソーマのことを全部知ってるわけではない。しかしあの子が話さないのだから今は必要ないと、いわば棚上げしていたのだ。

これはソーマを信用しているカトレアのみ為せる業だ。伊達に同衾を許していないわけである。

しかしまわりの人間は違う。信用するしないというレベルではない。おそらく『存在を認める必要がない』ぐらいの関係なのだ。これはこの世界の貴族にとって見れば当然の感覚だ。平民はもはや人ではないのだから。

だからこそカトレアはソーマを人として認めたがったのだ、使い魔としてではなく人として。

部屋に入ったカトレアも、例外なく混乱していた。なぜ部屋がこうなっている、ソーマはどうなった、母はなぜこのようなことを。その思いを元凶であろう母にぶつける。しかし返ってきた返事は予想外のものだった。

私の話を聞いてくれるというのだ、しかし条件付で。その条件は『ソーマが自分のことをちゃんと説明すること』

私は彼が何者でもかまわない。しかし周りにとって彼は許される存在なのだろうか。

カトレアの不安はまだ尽きない。

ここにきてエレオノールもようやく復帰し、不思議な家族会議が始まる。

ソーマの傷は公爵が癒していた。もとより少々の切り傷と打撲で

ある。今は公爵がソーマを抱いているが、そのソーマをどこに寝かせるにあたり、また争いが始まるのである。

カトレアは自分の部屋でいいと言い、公爵はもちろん反対し、カリーも渋い顔をしている。しかしなぜかエレオノールの態度がはつきりしない。

それは豹変とも言っていないカトレアの病状の変化のせいであった。元気になったり、元に戻ったり。昨日から今に至るまでのカトレアの幾度の変貌に、エレオノールは何か理由を探し、想像の域を出ないまでも、一つの仮説を立てていた。

そしてそれは同時に、この使い魔が本当に人間なのか、という疑問を投げかけるものであった。

「（おそらくカトレアのためには一緒の方が良い、そのはずだけどやっぱりまだ怖い、どうすれば？）」

そんな様子に気づいたのはカリーであった。普段なら一番うるさいであろう娘が静かなのだ。さすがに不思議に思い尋ねてみたのである。

「どうしたのエレオノール？貴方らしくないわね。何か考えてることがあるのかしら、この子にすることだね？」

全くの凶星、自分の懸念は上手く隠せるだろうか。

「カトレアの・・・体調と、その子の関係です。昨日はともかく、今日のカトレアはおかしすぎます」

もちろん体調の意味だが、それ以外にも当てはまりそうだ。

「どういふことかしら？詳しく話さない」

「実は・・・」

エレオノールは今日の、短い間に起きたカトレアの体調の変化と、それに関する自らの推論をおそろそそるカリー又^{カトレア}に述べた。

「そう、そんなことになってたの・・・」

カリー又は少し肩を落とす。娘の変化に気づけなかった。これは

仕方がないことではある。その肝心な場面にいなかったのだから。

「ひよつとすると使い魔としての特別な能力かもしれないわね」

エレオノールは驚く。なぜだ、この母が気づかぬはずがない。いったいどうして。

再び考え込むエレオノール、そしてたどりついた。それは情報量の差がもたらした『ズレ』であった。

そう、カリー又はカトレアとソーマがコントラクトサーヴァントをしてないことを知らないのだ

自分の懸念が、最悪の想像が露見しないと悟ったエレオノールはようやく調子を取り戻す。

「かも知れませんか。間に何らかのパスが繋がっていて、でもそのパスには距離的限界がある」

「そうだとしたら、始祖ブリミルはあの子にどんな人生を歩ませたくて、この子を選んだのかしらね」

「これが運命というのなら、私はあの子の姉として始祖を恨みますわ」

病気の子が始祖の思し召しにより連れてこられた子によって元気になる。一見ハッピーエンドかも知れないが、病気で苦しんできた妹を見続けてきた姉にとっては歪んだ幸せにしか見えないのだ。

もっともこの現状を副次的に生み出したのはまったく別のカミサマだったりするのだが、エレオノールたちには知る由もない。

「仮説の確認が取ればいろいろ実験したいところだわ。距離とか使い魔の体調や気分によって何か変わるのか。でも・・・」

言いよどむエレオノール。その気持ちを察するカリーヌ。

「そうね、今はあの子が苦しむ姿は見たくないわ」

「アナタ、そこまでにしておいてください。カトレア、貴方もです」
一触即発、とまでは行かないものの少々険悪に過ぎる雰囲気であ

った二人の間にカリーヌが割って入る。

そしてカリーヌはさっきの推測を二人に話す。公爵はなるほど、といった顔と同時に渋い顔でもあった。

「認めねばならんということか・・・」

公爵がつぶやく。大事な娘のためとはいえ、娘のそばに子どもで使い魔とはいえ男を置かねばならない。父としての苦悩である。そのころエレオノールと一緒に寝たことが知れたらどうなるのだろうかと思っていた。

「ア・ナ・タ？」

カリーヌが追い討ちをかけた。公爵もようやく観念した。

一方カトレアは少し不思議そうな顔をしている。しかしエレオノールと目が合い、どこか『安心して』といったように見える姉の目を見て、このままのほうが都合がいいこともあり、納得し部屋に向かうのであった。

カトレアの部屋に用意されたベッド、そこにソーマは寝かされている。

あの後大変だったのはおそらくこの家に仕えるメイド達ではなかっただろうか。食堂の片付け、傷ついた調度品や備品の入れ替え、魔法が使えるものは修繕の仕事もある。そしてこのベッドの準備とかなりあわただしかったのだ。

全ての原因がとばっちりであったと知ったらどういう顔をしたであろうか。

カトレアの部屋での再度の話し合い。そこで決まったのは、カトレアとカリーヌが部屋に残り、エレオノールと公爵がルイズの説明に当たるということであった。

ヴァリエール家の三女であるルイズは8歳であるが、未だ魔法の力が発現していなかった。基礎とされるコモンマジックでさえ暴走

させるのだ。

事態を重く見た公爵夫妻は次から次に優秀とされているメイジを家庭教師として招聘しょうへいしているのだが、どうやらまだ改善のめどは立っていないようだ。

この日も例に違たがわず練兵場でマンツーマンのレッスンであったのだが、そのせいで屋敷で起きてる『事件』を把握できなかったのである。

そのためか事の顛末を聞かされたルイズはあっけに取られるしかなかった。むしろ、8歳の子どもが処理できる情報量を超えていたかもしれない。

ルイズは我が耳を疑った。彼女にしてみればあの使い魔は大事な姉カトレアを奪ったワルモノだ。すぐにはエレオノールに聞かされたこれらの処遇に納得することはできないだろう。

しかし彼女に追い討ちをかけたのは使い魔としての能力を聞かされたことである。

「ほんとうなの！？ですか・・・？」

思わず取り乱しそうになり、姉ににらまれる。

「（わたしにとつても、ちい姉さまが元気になるのはよろこばしいこと、なのに、どうして？）」

相反する二つの感情が緋な交まぜになりそうになところからルイズは独自の答えを出す。

「（きつとみんなだまされてるんだ。私があつたワルモノの化けの皮をはいでやって、ちい姉さまを、みんなを助けるんだ）」

ルイズは肯定の意思を示す。エレオノールは、妙に従順だな、と思ったがそれ以上は感じ取れなかった。

しばらくしてもソーマは目を覚まさない。その横でカトレアとカリーヌが話をしていた。

カトレアが聞いたのは二人きりになった後どうなったのか。
カリーヌが聞いたのはカトレアの体調の変化について。

こんなにゆっくり話すのは久しぶりではないだろうか、とカリーヌ
又は思っていた。この子のためとは、いえいろいろ手を尽くすため
外に出ていることが多かった。この子は本当はさびしかったんじゃない
だろうか。しかしおそらくそのことすら感謝し全てを許すのが
我が娘カトレアであろう。

もうすぐ昼食になるだろうか。どうしよう、この部屋で取るうか、
とカリーヌが考えていたとき、扉がノックされエレオノールたちが
入ってきた。部屋の様子を見てルイズはほっとした顔をしている。
どうやら昼食をどうするかとそれからを含めた相談がしたかった
らしい。

さてどうしようか、と考えようとしたとき、うあっ、っというう
めき声とともにソーマが目を覚めたのだ。

皆でソーマを囲む。ソーマは理解が追いついてないようだ。

起きると『知らない天井だ』なんてことはなかった。ここはきつ
とカトレアの部屋だ。しかしなぜか皆さん勢ぞろいでこっちを見て
いる。

どうしよう？どうしたらいいんだろう？とりあえずここはあいさ
つと無事だということのアピールだよな？

「あ、お、おはよう、ございませす・・・」

ふさわしいようなふさわしくないような、そんなあいさつであっ
た。

第7話 ルイズのことは忘れてたわけじゃないんだからねっ！（後書き）

PV、ユニークとも自分には信じられない数字がでてます。

ほんとに読んでいただいている皆さんには感謝の言葉もありません。

処女作ゆえの見苦しさ等あるでしょうがこれからもよろしく願います。

また、お気に入り登録をしていただいた方、評価をしてくださった方、本当にありがとうございます。

そして感想もお待ちしております。よろしく願います。

第8話 ソーマ語る（前書き）

書いてるうちに收拾がつかなくなってまさかの中途半端さを正直スマンカッタと思ってる。

第8話 ソーマ語る

気がついたものの状況の把握できないソーマはとりあえずあいさつをしていた。

「おはよう、ございます・・・」

スムーズに声が出た、言語中枢はやられてないようだ。それにしても体には痛みがない。どうやら治療してもらったか。

そんなことを布団の中で手や足、指を動かしながら考える。

「やっと起きましたね。体は大丈夫かしら？」

カリーヌがたずねてきた。ソーマの見間違えでなければ大分柔らかい表情をしている。

「はい、もらったのは実質一撃なので、おそらくなんとか」

体を起こしながら答える。やったのはあんただろ、とは言わない。

「そうか、ならば少し聞きたいことがある。答えてくれるか？」

かわって公爵がたずねてくる。おそらく僕自身のことだろう。一体どこまで話すべきか。

ソーマはこれからのことに頭を悩ませた。

「では聞かせてもらうが、君は一体何者なのだね」

丁寧な物言いに面食らうソーマ。少し考えて、決心する。

「僕は自分が何者なのかわかりません」

「ちよつと、ふざけてるの？」

「ルイズ、貴方はちよつと黙ってなさい」

茶々を入れるルイズ、たしなめるエレオノール。

「すみません、ですが本当のことなんです。昨日、召喚されたときには娘さんたちにこういいました。“日本のトーキョーから来た”と」

「そうよ！アンタ嘘ついて、ヒツ！？」

懲りないルイズ、今度はカリーヌが睨む。こうかはばつぐんだ。

「嘘ではありませんが、ここに来るまでに別の場所を経由していただきます。そして、そこでの経験で、自分が本来使えなかったような力が使えるようになったんです。僕が元々いた世界は・・・」
皆声も出せずに彼がいた異世界の話に聞き入っている。それもそのはず、ハルケギニアではありえない話であつたからだ。

曰く貴族のいない世界、王ではなく国民の代表が国を治める世界、魔法のない世界、魔法の変わりに違う力が発達した世界、出生・死亡・移動などがきつちり国に管理されている世界、宗教宗派が数多く存在する世界。

特に魔法の代わりの力については公爵とエレオノールが真剣に聞いていた。馬車は廃れ、それでも物と人の移動が滞らない。人が少ないかといえばそうではない。ソーマが住んでいた国だけで1億を超える人口を誇る。それを支える食料、食料を購入するための金、金を稼ぐための仕事。国の基盤の安定がうかがえる。

ここで不思議に思われたこと、それはソーマがなぜここまで詳しく社会の仕組みを知っているかである。

ソーマは答える。

「子どもが学校へ行くことが子どもの仕事のようなものだったので、これにはさらに驚かされたらしい。子どもが皆一律で学校へ行くというのは、この世界の人間からはどうひねっても出てこない発想である。」

そしてソーマは続ける。

「だからこそ、さっき言ったようにみんなに一応働くチャンスはあるんです。正直、能力次第ですかね？」

唸る公爵、考えるエレオノール、感心するカリリーヌ、あまり信じてない様子のルイズ、そして、微笑みを浮かべながら話を聞くカトリアであつた。

「元の世界から見ても君が異質であることはわかつた。では君の能

力はいつたいなんなんだね？」

ついに来た質問。いつたいどこから、そしてどこまで話すべきか。考えているとカリーヌが重ねてたずねてきた。

「あの槍はなんだったのですか？どこから出して、どこやったのです？」

「・・・では、まず槍を取り出した能力についてお話ししよう」

そう言うとソーマは、虚空へ手を伸ばし、気づけばその手には衣服が握られていた。別荘から“持ってきてい”たものだ。

「空間を捻じ曲げる力でも言うのでしょうか。あるいは異空間にアクセスできる能力？ちなみに人は入れません」

エレオノールの目が爛々と輝く。その目に薄ら寒いものを感じながら説明を続ける。

「で、武器については特別です。僕の意味で出し入れできますし、僕の意識が途絶えれば消えるようになってます」

ほう、とカリーヌは感心する。確かにあれだけの武器は奪われれば脅威であるが、これならその心配もない。逆に言えば“独り占め”の形態ではあるが。

「そしてあの槍についてですが・・・」

ソーマはカリーヌのほうを見遣る。カリーヌも、早く話せ、という目をしている。

「あれはこちらでいう魔法の力が槍に宿ったかたちになります」

曖昧な説明。さすがに皆よくわからないという顔をしている。ソーマは説明を続ける。

「皆さんにとって魔法は身近すぎてそういう感覚がないかもしれませんが、あれは立派な奇跡です。この世界の法則を一時的に歪めているんです。そして、あの槍にも、そういう力があります。もっともこの魔法のように汎用性はなく何かに特化した形にはなりません」

カリーヌが息を呑む。自分の“奇跡”を打ち消したその“奇跡”、それが語られる。

「その槍は伝承に曰く『どんな魔法もきかない』槍なのです」

今度こそ全員が驚いた。ルイズなんかは信じられないと言い、エレオノールにいたっては見せて見せて見せてと発狂寸前である。

「一応怪我人と病人がいる部屋です、静かになさい」

さすがにカリリーヌがエレオノールを止めた。ほぅっっておけばソーマの胸倉でも掴んで振り回していたかもしれない。

「我々に対するアンチテーゼのような槍なのだな」

公爵が難しい顔で言う。もはや魔法が世の理を担っている世界においてこれほど都合の悪い武器もないだろう。

「しかし、現状は君しか取り出せず、君を抜きにして存在し得ないというのならば当面の心配はないか。君が我々に敵対するというのなら話は別だが？」

ソーマは両手を挙げ首を振りその意思がないことを示した。

「私はカトレア様の使い魔です。その主や主の大事な人に牙を向ける趣味は持ち合わせておりません」

使い魔モードのソーマはなぜか仰々しい物言いになる。しかし、彼の発言はカトレアに害為すものが現れれば容赦はしないという意味だ。それを分かってか否か公爵は目を細めた。

公爵は次に、おそらく一番気になっている話題に触れる。

「それでは、君とカトレアの病気の関係についてだ。君は何か心当たりはあるかね？」

ソーマは知っていた。しかし、その能力を合理的に説明できない以上とぼけることにした。

「どういうことでしょうか？私自身も把握してないことがありますので詳しくお聞かせ願えますか？」

説明を受けるソーマ。ソーマの想像通り、やはり自分からカトレアが離れると元の病弱なカトレアに戻るといふ。

「私自身に覚えはありませんが、カトレア様の使い魔として呼び出された以上、主の助けになる存在であると自負しております」

「うむ、君自身に分からぬというのならば、やはり使い魔の特殊能力というものか」

公爵たちは納得するが、カトレアに睨まれたような気がしたソーマは少し肝を冷やしている。

「（嘘に敏感なカトレアにはれたか？ごまかせそう、にはないからあとで謝っておこう）」

などと考えるソーマであった。

ここでカーリーヌが急にソーマのほうを向き、聞きただす。

「そう、貴方のその目にはいったい何が見えているの？」

さて魔眼はどう説明したものか、とソーマは思ったが案外すぐにごまかす方法を見つけた。

「魔法が・・・見えます。正確には違和感の塊のようなものですがお互いが違う世界の住人である以上、この説明を頭ごなしに否定はできないだろう。実際、カーリーヌはそれで魔法を回避されたのだから尚更だ。」

ソーマがそんなことを考えてると、そこにはやはり笑顔が怖いカトレアさんがいた。後でどれだけ詫びればいいのか、なんてことを考えたりしていた。

「では一度娘の、ルイズの魔法を見てあげてくれませんか？」

何の前触れもなく、カーリーヌが提案する。

「ハアツ？」

「エツ？」

当事者二人が素っ頓狂な声を上げた。

第8話 ソーマ語る（後書き）

今回で第1部（召喚／認知）を終わらせたかったんですが、そうは問屋が卸さない。

というより私の脳みそが許してくれませんでした。

ついでにPCの機嫌も悪いです。メモリ256MBじゃ文章も書けないってのか!?

意見評価あるなしに関わらず読んでいただけてるのが私の原動力です。

皆様本当にありがとうございます

読んでいただいた方、お気に入り登録・評価していただいた方々に幸多からんことを。

感想もお待ちしております。まだまだ余裕があるので今ならガッツリ返信させていただきます。

第9話 ハルケギニアのソーマ(前書き)

分けたのに、
、
分けたのにこんなに長くなっちゃった

第9話 ハルケギニアのソーマ

ハモリはしなかったものの、同時に素っ頓狂な声を上げた二人。その一方であるルイズは困惑から怒りへとその心情を変化させていた。

「どうしてこんなヤツにまほうを教わらないといけないのですか！

？」

吠^ほえるルイズ。コクコクと頷^{うなず}くソーマ。

「お黙りなさい、ちびルイズ。あなた自分の状況が本当に分かっているの？」

この世界の貴族とはすなわち、魔法を使う者である。もちろん魔法だけが貴族の格を決めるものではない。しかし他の能力をさておいて、魔法の出来で評価される風潮なのである。

現状ルイズは簡単な魔法すらきちんと扱えていない。このことは家族の悩みの種であった。

8歳という年齢を考えれば焦る必要など無いと思われるかもしれないが、貴族の子どもは自我が芽生えるころには魔法の練習をさせられる。いわば共通で必須の習い事なのである。

みんな同じ習い事、それは周囲との差をはつきりさせる。ルイズ自身も悩んでいるのだ。

話を戻すと、カリーヌはソーマの『魔法が見える目』でルイズの失敗の原因を探ってもらいたかった。

ふむ、と公爵がうなずき、ソーマにたずねる。

「その前に聞かねばならんことがある。ソーマ、君はこれからどうしたいのかね？」

この世界に、この家に組み込まれる覚悟はあるのかを、その覚悟の程を問う。

「先に申し上げましたとおり、私はカトレア様に呼ばれた身。そのカトレア様のために全力で尽くすのが私でございます」

「ならば、その主たるカトレアの大事な妹のことだ。見てやってはくれぬか？」

「そんなぁ・・・」

「ハイ、わかりました。ですが、私もこの世界の魔法が扱えるというだけで、きちんと体系だてて理解しているわけではありません。なので、私もルイズ様と一緒に魔法を習うことはできませんでしょうか？」

「ほえッ!？」

予想外の話に混乱するルイズ。公爵とカリー又は考えて、先にカリー又は答えた。

「いきなり同時とはいきませんから、まずは私が教えましょう」

その瞬間、憐憫の目がソーマに向けられた。その様子に気づいたカリー又は、コホン、と咳払いをしソーマに言った。

「まずは座学です。この世界の魔法の成り立ちと意味をきちんと覚えてもらいます」

ソーマは最初苦笑いをしていたが、すぐに真剣な顔になり頭を下げていた。

公爵は娘に話しかけている。
公爵は娘に話しかけている。

「お前もいてくれると助かるのだがな。やはりアカデミーに戻らねばならぬか？」

「はい、残念ながら。今回もカトレアの晴れの舞台ということで特別に休みをもらってますから」

エレオノールに見せぬよう少しほっとした表情をするルイズ。しかし見透かしたようにエレオノールが言い放つ。

「ちびルイズ、次に会うときには少しは練習の成果を見せなさいよ？」

「ひゃいッ、エレオノール姉さま！」

声が裏返るほど力強く返事をしたルイズだった。

「あとは……」

つぶやく公爵。トリスティンでのソーマの立場をどう確保するか。

彼は従者ではなく家臣だとカトレアが言うのだから、いろいろ必要なものが出てくる。従者ならばそのままでもいいが、家臣となるとやはり……。

「ソーマ、トリスティンで誰かの養子になる気はないか？」

「……えっ？」「」「」

3姉妹とソーマが同時に驚きの声を上げた。カトレアの表情が少し険しくなる。それを横目にソーマが意図をたずねる。

「どういうことですか？」

「うむ、つまりな……」

聞けば、やはりこの世界では家（貴族）というものが重視される。徒手空拳の少年がいきなり家臣とはやはり難しいということであった。そして……

「ヴァリエールは後ろ盾にはなれても、男の養子は取れん。フォンティーンも同様だ」

このあたりは貴族社会において女しかないことの難しさである。

「一応アテはある。どうかね？」

「それは、カトレア様のためになると、私がカトレア様のそばに居るための布石ということですね？」

「そういうことだ」

ようやくカトレアの怒気は納まったか、とソーマは考えると同時にあることに気づいた。カトレアがほぼ会話に参加してないことだ。ソーマは嫌な予感がしていた。

「はい、是非よろしく願います。過分の配慮痛み入ります。代わりと言っては失礼ですが……」

ソーマは考えていたある提案をぶち上げた。

「私の中にある私の世界の知識のうちで、役立ちそうなものを提供できれば、と思います」

「おう、それはぜひとも期待したいところだな」

「そうね、ぜひ、アカデミーも一枚かませてもらいたいわ」

乗り気の二人。政治の話になるとついていけない3人をよそに話は進む。が、すぐにソーマが懸念を口にした。

「この世界は、急な変化、革新に耐性はありますか？」

皆頭にハテナマークを浮かべている。ソーマが続ける。

「私の世界に魔法使いが現れば、世界の国々が確保に動くでしょう。いや、他国のものになるぐらいならと殺してしまうかもしれない」

ここで政治に明るい公爵が気づく。

「つまり私がやりすぎた場合、この世界でもそれが起こり得るのではないかということですよ」

この懸念はもっともだ。出る杭は打たれるのが常。それにこの世界では始祖ブリミルの力、つまり魔法以外を　いや、時に魔法であつても　異端として処罰するのだ。

「ここトリスティンはとりわけ伝統にうるさいですが、アカデミーなら多少突飛なことでも研究可能ですわ」

エレオノールが言う。エレオノールとしては何か一つでも土産を持って帰りたいのだ。

「ふむ、問題ないなら国に進めさせて、こちらへの批判をかわすか。しかしこういう話になると退屈する人がいるのも事実、そして暇になることで思い出すこともある。」

「お母さま、お話がむずかしくてよくわかりません、それと・・・おなかがすきました」

昼食前から続く、予想以上に長引いてしまった話は昼食の時間を大きく狂わせたようだ。

「そうね、難しい話はどこでひとまず休憩にしましょう。ソーマ、貴方は大丈夫かしら？なら一緒に食べましょうか」

カリーヌのその一言によって、ようやく少し遅い昼食となった。

「そういえば、貴方の世界での食事はどんなものなの？」

昼食のさなか、エレオノールが気になったように聞いてくる。

「ここまで豪勢なのは元の世界でもかなり有名な専門店に行かなければ食べられないでしょう」

「あたりまえよ」

ルイズが胸を張る。ソーマが続ける。

「ですが、平民でも、何とか奮発すれば口にできるでしょうね」

その言葉に皆が驚かされる。それに気づいたのかソーマは言葉を補う。

「平民といっても貴族はいませんから。意味としては『普通の人』でしょうか。反対語は金持ちですね」

やはり、と公爵。貧富の差はあっても、その差はこことは比較にならぬほど小さいのかと感じている。

カリーヌとエレオノールも似た感想を持っている。世界という入れ物の形が違えば、中に入る人のあり方も変わる、という解釈。ルイズはまた分からないような顔をして、カトレアは・・・聞いてはいるようだが静かに食事を進めている。

「ところでアナタ、さっきのソーマの養父のアテというのはやはり・・・」

「ああ、レニエ殿に頼もうかと思っている」

聞けば、公爵家の家臣であった人で、既に家督を譲って隠居しているのだという。娘の恋人である元貴族の男を婿養子にするなど、ヴァリエールが剛ならその人は柔という様子。ソーマは聞きながらそんなことを考えていた。

レニエの名前を聞いてエレオノールとルイズが渋い顔をする。彼女らの目には伝統を守らない自由すぎる人という印象らしい。

食事も終わったころ、公爵が真面目な顔で言う。

「君にも家族がいただろう。しかし君はそのことを一言も話さない。私は親から君を引き離してしまったことを、君をこの世界でのいざこざに巻き込んでしまうことを申し訳なく思う」

頭こそ下げなかったが、公爵が年端もいかぬ少年に詫びを入れたのだ。皆が驚く中、ソーマは

「気にしないでください。両親とは死に別れたようなものですし、カトレア様に呼ばれここに来たことを不幸だなんて思っていないせうから」

と返した。死に別れた、というのが死んだのはソーマの方なのだが、周りは知る由もない。

「そうか、それは・・・」

もう一度謝罪しかけ、公爵は止まった。ソーマの顔があまりにも穏やかだったからである。

「ふむ、では、妙な言い回しになってしまっし、遅くなってしまうたが“ハルケギニアによっこそ”」

それに対してソーマは深々と頭を下げたのであった。

ここで話が終わればハッピーエンドだったかもしれない。しかし、話が終わるこのときを“彼女”はずっと待っていた。

「お話は終わりましたの？」

あまりに素晴らしい笑顔をしてるカトレアだった。

「では私もソーマと二人で話がありますので失礼させていただきます。行きましよう、ソーマ」

ソーマは身の危険を感じ、助けを求めなるべく皆を見た・・・が、様にそらされてしまった。

皆気づいていた。今のカトレアに逆らうべきではない、と。

「早く行きましょう」

「は、はい」

同意の声を発する前に腕を引つ張られ退室したソーマを見送る面々。

ただルイズだけは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「私にもお話してくださいませよね？」

「話ならさつきも・・・」

カトレアの部屋で詰問が始まる。

「私には嘘をつく必要はないですよ？きちんと話してくださいませよね？」

「うづく・・・」

「さあ！ほら！」

あくまで笑顔のカトレア。この後、ごまかさずに、はぐらかすことを選んだソーマは、その結果^す拗ねることになったカトレアを必死に慰めることになった。

そこに救いの手か、いやさらに地獄へと引きずりこむ魔の手であるうか、ルイズが乱入してきた。

「ちい姉さま、だいじょうぶですか!？」

「聞いてちょうだい、私のかわいいルイズ。この人が・・・」

2対1はまずい。しかし逃げるといふ選択肢はない。ならば助けを呼ぶしか、そんなソーマの祈りが通じたのであるうか、更なる乱入者、エレオノールが現れた。

「ソーマ、私にも貴方の（世界の）話を聞かせて」

残念ながら助けではなかったようだ。さらに混沌となる室内。

「ソーマさんは私を信じてくれないんですね・・・」

「アンタ、私のちい姉さまになにしたの!？」

「ソーマ、ホラ、なんかマジックアイテム無いの?こつ、おもしろそうなの」

ここに来て初めて出会った3人と、同じ場所でありながら、その
ときはまるで違う会話の中身。

どうしていいかわからない状況でありながら、ソーマはあの時は
感じられなかった、うれしさや、楽しさをかみしめつつ、苦笑いし
ながらどうするかを考えるのであった。

第9話 ハルケギニアのソーマ（後書き）

第一部、完！

ようやくたどりつきました。やはり想像力が足りない。ソノ結果ガコレダヨ

なんか突拍子もないことになっています。整合性とか納得とかあったもんじゃないかも。

そのあたりは要勉強ですね

ここまで読んでいただいた皆様にはただひたすら感謝でございます。物語はまだ続きますが、これからも応援いただけますよっ心からお願ひ致します。

第二部にはいる前に別作品の嘘予告がございます。なので明日はある意味一旦お休みでございます。なので明日はあ期待せずにお待ちください。

嘘予告 古代の魔法王国からルイズに召（ry）前書き（

先に謝っておきます

いろいろゴメンナサイorz

嘘予告 古代の魔法王国からルイズに召（ry

俺は、、自分の呼び出した召喚の門に吸い込まれたはずだ。忌々しき“勇者ご一行”に打ち負かされて。

ここはそんな向こう側の世界、、そんな分けないな。

男の上空に広がるは澄み切った青空、そして遠くに見える古い建造方式の建物、そして

「アンタ、だれ？」

周りには30人程度の似たような服を着た子どもたち。

「ルイズが人間を召喚したぞ！」

「ねえ、あれって貴族じゃない？マントをつけてるし」

「うん、そういえば身なりもいいな」

「え？それってマジやばくない？」

耳に入ってくる周りの評価で、事態を把握するルイズ。

「ミスタ・コルベール。召喚のやり直しをさせてください」

「ならん。この召喚の儀式は始祖ブリミルの名のもとに行われる神聖なものだ。それに君も知ってる通り、2回目の召喚は前の使い魔が死ななければ不可能だ」

「そんなぁ・・・」

男を無視して進められる会話。しかし男は冷静に状況を分析していた。

「（ここは、少なくとも魔法王国^{ジュール}ではない。ましてや地上のはずがない。過去か未来か、あるいは・・・。クフフフ、そうか、神は私にこの世界の王になれと言いたいのだな！ラヴオスのせいで運命神など全く信じていなかったが、今ならお前の存在を信じてやれるぞ）」

一人でくつくつと笑い出す男の様子に回りは気づかない。唯一、小柄な体躯の、そしてその身にしては大柄な杖を持った少女、タバサのみが多少気にかけてくらいである。

男のちよつとした変化すら見逃させるルイズとコルベールの漫才、否、問答は続いていたが、男はそろそろ情報が欲しいと思い、ふるいにかけることにした。

その瞬間放たれた男の殺気と魔力、それに明らかな明確な反応を示したのは先の少女タバサと、今の今までその男を呼んだ張本人と問答をしていた男、コルベールであった。

「（男はさすがといったところか。おそらく引率やまとめ役の類であろうからな。にしても、あのような少女が……。少し興味が出てきたぞ）」

男が考え込む中、コルベールは警戒を解かぬままその男を見やっただ。なるほど明らかに装飾過多な服装、杖は持っていないようだが先ほどの明らかな殺意と魔力、などと考察しているときにその男に呼びかけられた。

「すまない、その御仁。この集団のまとめ役とお見つけするが？」

「はい、コルベールと申します。ええと、ミスタ……」

なおも警戒を解かぬコルベール。

「ダルトンだ。今はなき魔法王国ジールという国の国王であった」

その瞬間、周囲がざわつく。当たり前だ。自称、亡国とはいえ一
国の王が呼ばれたのだから。

ルイズは混乱しついでいけなかった。

ダルトンがダルトン王国ではなくジールの国王を騙かたつたのには理由がある。

人とは歴史があるものを崇拜する。ここでダルトン王国を名乗つても国を興した優秀な人という評価がつくかもしれないが、なぜか

存在に箔はつかない。たとえ無能でも歴史ある国の国王はそれだけで箔がつくのだ。

彼は本来冷静で計算高い男だ。そしてそういった能力でもってジルにおいても女王の右腕として君臨していた。

ゆえに彼は慎重に策をめぐらす。もともと本人の魔法の才能と相まって力押しが多かったのも事実ではあるが。

しかし、あときは預言者を騙る未来から来た魔王にその地位を奪われ冷静さを失い、そこに潰け込まれる形で敗北したのだ。

「これは失礼しました」

かしこまるコルベール、しかしこれを制すダルトン。

「普通でいい。もとより持つべき国も失った元王になど何の価値もない」

「あ、あの・・・」

おずおずとルイズが話しかける。自分がしでかしたことの大きさに押しつぶされそうになっているようだ。

「ふうむ、君か、私を呼んだのは？礼を言うぞ。私はあのままでは死ぬ運命だったからな」

半分嘘である。どうなるか分からなかった、が正解である。しかしこのきっかけを作った少女に感謝しているのは確かだった。

「あ、は、はい」

返事するのがやっとのルイズ。そこでようやくコルベールが場の空気を読む。

「皆さん、学院に戻りますよ。ミスタ・ダルトンもご足労願えますか？この学院の責任者とお会いしていただきたいのですが」

「ええ、それはこちらからお願いしたいことです（せいぜい利用させてもらおうか！）」

その後、生徒たちが飛んだことにダルトンが驚き、聞かされる技術の差にコルベールが驚き、ルイズが自分の不幸を嘆きながら三者

は学院へと向かっていった。

自らが呼び出した風韻竜の上でタバサは考えていた。知らぬ国の王を名乗る男、皆に向けた殺気の意味、謎の笑い。しかし、今考えなくても詮無きこと、とすぐにタバサは切り替えて読んでいた本に目を落とす。

「必要があれば命令が下るはず」

つぶやいた言葉は彼女の竜以外に届くことなく、青い空に消えていった。

嘘予告 古代の魔法王国からルイズに召（ry）（後書き）

はい、まさに

どうしてこうなった

です。ダルトンの大事なポイント「小物臭」がどこにもありません。書いた本人からして「誰だ、お前は？」状態です。

正直、表に出すのものはばかられましたが

「ネタならいいか」ということになりました。

別の話として、スクエニ系でまた一人召喚される草案があります。

そちらは割と真面目に考えてます。物語はテンプレどおりでしょうけど。

次から通常営業を予定しています。

第10話 ルイズとソーマ（前書き）

第2部、始まりました。

2部はオムニバスとなります。

分からないことがあってもどこかで保管されるはずですので
疑問があっても気長にお待ちください

でも忘れてたり矛盾があるかも

それではお楽しみください

第10話 ルイズとソーマ

「なんでわたしがあんなヤツにまほうを見てもらわなきゃいけないのよ」

ルイズは一人、部屋で悪態をつく。昨日のソーマの登場からどうも落ち着かないのである。

「ぜったい何かあるわ！わたしはだまされないんだから。始祖ブリルよ、ちい姉さまを悪の手からお救いください」

しかしお祈りを奉げたところでふと気づく。

「いいえ、むしろこの手でまもるわ！そうだわ、こうしちゃいられないわ」

これは、そんなルイズのがんばるお話

「なによあなた、そんなことも知らないの？」

「なにぶん異世界から来ましたもので」

「まだそんなこと言ってるの？」

「止めなさい、ルイズ。ちょうどいいわ、ルイズの復習代わりにもう一度説明しますよ、始祖ブリルとは・・・」

お屋敷の一室、ルイズとソーマはカリーヌから歴史の授業を受けていた。

「・・・そしてブリルの息子と弟子によって興された・・・」

ちなみにルイズには教科書のようなものがあるが、ソーマにはない。

「・・・て生まれた国がトリステインでありアルビオンであり・・・」

別にいじめられている訳ではない。純粹に読めない。ハルケギニ

アの字の読み書きができないのだ。

「・・・て各国に与えられたのが始祖のルビーたる4つの指輪と・・・」

字を教えるのはもっぱらカトレアの仕事である。そのこともルイズは気に入らないようだ。

「ではトリステインにあるルビーはなにかしら？ルイズ」

「ハイ、水のルビーです」

「そうですね。ソーマ、ここまでは大丈夫かしら？」

「はい、大丈夫です、カリィ又様」

「そう。では、これらとは別にまだ重要な国があります。わが国のクルデンホルフ・・・」

「では、今日はここまでにしましょう」

「ありがとうございます」

「ソーマ、午後は文字の勉強ね」

邪魔にならない場所にいたカトレアが声をかける。

「ぐぬぬ」

「ルイズ、貴方は午後は魔法の練習だったわね。今日こそはしっかりなさい」

「・・・はい」

「ねえカトレアさん。あの日、ルイズの魔法を見て欲しいってカリィ様をお願いされたけどどうということなの？」

「ルイズは魔法を成功させたことがないの」

ひそひそと話す二人。

「でもまだ子どもですよ？確か8歳でしょう？」

「年齢は関係ないの。それに貴族の子弟たちは普通5歳くらいから魔法の練習を始めるわ」

「そこまで焦る必要があるのかなあ？」

「それがハルケギニアなのよ。トリステインは特にね」

「ああ、さつきあったゲルマニアなら能力次第というわけですか」
「伝統のない国だ、って馬鹿にすることも多いのだけれどもね。ルイズもそう」

「貴方たち」

「はい・・・すみません」

「くっ・・・」

走って部屋から出て行くルイズ。

「あの子も焦っているのですよ」

「魔法の才と貴族としての能力は別と思うんですけどね」

「そうも言ってもらえないのがこの世界なのよ」
残った3人が話す。

「6000年ですか。正直なところなかなか面倒な奇跡を残したも
のですね、始祖は。」

「その奇跡で人はここまで来られたのです」

「私も魔法がなければ生き長らえなかったかもしれない」

「無ければ無くなり人は進化するんですけどね」

「貴方が、ということですか」

「私も大抵イレギュラーですがね」

「そんなイレギュラーが無ければきっと私は病気のままでしたよ」

「ではそのイレギュラーに感謝しなければいけないですね」

「...そんなこんなで月日は流れ...」

「ソーマ、もう魔法への理解も深まりましたね？」

「はい、カーリー様をはじめとした皆様のおかげでございます」

「もう読み書きも十全にできるわよね」

「では、あの日の約束を果たしていただきましょうか。ルイズもよろしいですわね？」

ルイズが目を見開き、すぐ元に戻った。カーリーの言葉の意味を

正確に理解したのだ。

「わかりました」

「かわいいルイズ、これがなにかのきっかけになるといいわね」

「はい、お母さま、ちい姉さま」

ルイズは憂鬱であつた。自分のこの劣等感を解消できるならというんな本を読み、いろんな呪文を唱えた。スペルも完璧だし、魔法を使った後の自身の精神力の減衰も感じられた。

しかし魔法が成功しないのだ。なにをどうしても『爆発』に帰結する。これでは貴族たりえない。魔法も満足に使えない貴族などない。

この苦しみから解放たれるなら悪魔にでも魂を売ってやろう、そんな風にも考えていた。

しかし、実際そんな『悪魔』を前にやはり尻込みをしてしまう。あるいは代償への恐怖であろうか。

それは練兵場の端で行われた。皆が緊張する中、ルイズがスペルを唱える、瞬間、爆発音が響く。

ルイズは肩を落とす。またできなかった。しかし今日は違う。この使い魔なら、あるいは……。

「すみません、カリー又様も魔法を使っただけませんか？」

「ええ。わかつたわ」

ソーマは驚いていた。魔眼にはルイズの『失敗魔法』になんら失敗の要素が映らなかつたのだ。そしてつぶやいた。

「どういうこと、でしょうか……？」

「なにがですか？なにかわかつたのですか？」

カリー又もソーマの言葉の意図がつかめない。

「失敗、してないのです」

「はあ？」

思わずルイズが声を上げる。カトレアも心配そうだ。

「どうということなの？」

「あれがルイズ様の魔法だと、そうとしか思えないのです」

「そんないいかげんなことを言わないで。あなたになにがわかるの」

「カリー又様、今ある魔法は本当に4系統のみでしょうか。それ以外は存在しないのでしょうか」

「どういことですか？」

「あれで魔法が完成しているというなら、ルイズ様はそれ以外の魔法の才を持っているということですよ」

「まあ、それは！？」

「そんなことで……。私はふつうのまほうがつかえない欠陥けっかんきぞくだって、あんたもそう言うのね！？」

走ってその場を離れるルイズ。ソーマを信じていたわけじゃない、だが利用しようとはしていた。しかし、そのわずかな望みすら踏みにじられた。そう思ってルイズは“逃げた”のだ。

「あんな魔法は初めてですよ」

ソーマは言う。この世界で、それほど多くの魔法を見たわけではない、しかしアレは異質である。それは分かるのだ。

「私たちにとっても初めてなの。だから誰が見ても失敗魔法扱いなのよ」

「可能性、分かってないわけではないでしょう。アレが失敗で無いとするならば……」

「虚無……。でも、まさかあの子が」

「問題は使った系統の判別より本人の納得になってしまっているところでしょうか」

「うふふ、あの子はいろんな人に似て頑固ですからね」

「カトレア、貴方だったら。そうね、虚無といっても納得しないでしようし、それに……」

「虚無だということはまずいことですか？」

「ええ、真実であれ嘘であれね」

「じゃあ、このことは内緒ね」
「了解しました」

「ルイズ、私のかわいいルイズ」

「ヒック、ちい、姉さま、ヒック・・・」

「何を泣いているの？」

「わたし、わたし・・・」

「いいのよ、ルイズ。たとえ世界が貴方につらく当たろうとも、私たちは貴方の味方よ」

「わたし、たち？」

「そうよ、お父様もお母様もエレオノール姉様も、ソーマだってそうよ？」

「あの、使い魔が・・・？」

「ええ、こんな風に泣いてしまう貴方を助けようとしているのよ。」

それは私の使い魔だからじゃない。純粹に助けたいって思いなのよ」

「ちい姉さま、わたし、わたし・・・」

「かわいいルイズ、貴方はまだ焦る必要なんて無いぐらい小さいのよ？もつと、いろんなものを見て、いろんなところから学びなさい」
続けるカトレア。

「水魔法だつて人を傷つけたり人を癒したりできるわ。だから貴方の魔法もいつか爆発以外の何かが、ルイズにしか無い何かができるようになるわ。今だつてそうかもしれないけどね、ウフフ」

その後ルイズの泣き声だけが部屋に響いた。

「盗み聞きとは感心しませんね」

「心配だっただけですよ」

「なんの心配かしら？」

「さてなんでしたか？」

やっぱりみんな優しいな、と思うソーマだった。

さてその後のルイズは、一見変わらないように見える。魔法を求めめる態度、がむしゃらな練習、必死な勉強。

しかし、ルイズは自分の魔法の“結果”を受け入れた。

ソーマが初めて言ってくれた『これは失敗魔法じゃない』という言葉。

ちい姉さまが言ってくれた『私だけの魔法がある』という言葉。

それらが今のルイズを動かしている原動力である。きっと本人に聞けば不本意だという態度を取るだろう。特にソーマの言葉に支えられているなどと認めるはずが無い。

しかしルイズも気づいているだろう、自分が救われたことに。

「ソーマ！アンタ貴族になったんだからもつと貴族らしくなさい！貴族っぽくない貴族の養子になったって貴族は貴族なんだからね」

「三つ子の魂百まで、ってね」

「なによ、どういう意味よ？」

「仮に平民が貴族になっても、貴族が平民になっても、その人の心がいきなり変わるわけではないということ」

「そんなことより、アンタお父様に会ったらいつもお金の話ばかりね？もう少しなんとかならないの？」

「それが私の存在意義みたいなものですから。お金も稼げない人が領地を治められませんかよ」

「なによ！？貴族たるものもつと大きく構えなさいよ。商人みたいに小さいことを言うんじゃないわ」

「見栄を張るにも限界があるでしょう？クルデンホルフに絡め取られそうな貴族がどれほどいるか」

「そ、それはそれよ」

「それじゃあ私はカトレア様のところに行きますね」

「ちよつと！？待ちなさいよ。話はまだ終わってないのよ。逃げるなんて卑怯よ！」

立場が変わっても何も変わらない二人。いつものように絡むルイズとかわすソーマだった。

第10話 ルイズとソーマ（後書き）

ルイズ変、ではなくルイズ編でした

たぶんルイズに初めてソーマの名前を呼ばせました
そのためだけの回といっても過言ではありません

ここまでお読みいただきありがとうございます。

PVとユニークがすごいことになってます。本当に感謝です。
キリのいいところで一度発表したいと思ってます。

評価していただいた方、お気に入りに入れていただいた方

ありがとうございます。ありがとうございます。（大事なことなの
で2度書きました

感想お待ちしております、ぜひぜひよろしくおねがいします。

第11話 カリーヌとソーマ（前書き）

この2部はそれぞれの関係を取り上げたもので構成されるためか会話文が多いです。むしろ会話が前提です。

そのため、説明が入ると、話の薄さのわりにグッと文字が多くなります。

適当に読み進めても問題ないと思うので各自対処をお願いします

第11話 カリーヌとソーマ

「ぐあつ」

「まだまだですね」

吹き飛ばされるソーマ、杖を降ろすカリーヌ。

ソーマが召喚された時から4ヶ月ほど過ぎ、時は冬、場所は練兵場。そこでソーマはカリーヌから魔法の『授業』を受けていた。

この4ヶ月でソーマはカリーヌからいろんなことを教わった。カトレアや時には公爵自ら教えることもあったが、カリーヌが基本的に教えることとなっていた。

内容は魔法にとどまらず、ハルケギニアの歴史から貴族の礼儀作法、あり方まで多岐にわたった。

「貴方は貴族になるのだから」と言い含められた。

魔法以外はルイズと共に学ぶことも多かった。年下とはいえ、貴族として、生徒として先んじている彼女はやたらソーマに対して偉そうであった。

秋の深まったところからか、魔法は座学から実践的なものになっていった。

ソーマの武器である魔眼も、早々カリーヌに弱点を見抜かれた。要するに、魔法もその発動も見えなければどうしようもないのである。目に頼らず勘を鍛える、を主眼に訓練が行われた。

屋外における1対多、ソーマのもっとも苦手とするシチュエーションである。その『多』がカリーヌの偏在である。誰が戦うことができるというのか。

そして冒頭のように吹き飛ばされる。偏在に『物理的』に吹き飛ばされたのだ。

魔法が見える、遠くのもが見える。見える分見えるものに注意

が行く、その隙を突かれる。陽動と実働、見事なバランスと言えよう。

今このときはガ・ジャルグも禁止されている。今、カリー又は戦場の空気をソーマにいかんなく叩きつけているのだ。

「では少し休みましょうか」

「は、はい、、ありがとうございます」

最近こんなばかりだ、とソーマは倒れながら思っていた。防衛戦や突破戦のような戦闘教義から、カトレアを巻き込んだ要人警護のやり方まで、カリー又は手を変え品を変えソーマを鍛えていた。

「お疲れさま、ソーマ」

カトレアはどこまでも笑顔でソーマを心配するそぶりを微塵も見せずにお茶を飲んでいた。

今は訓練で死ぬこともないし、強くなればなるほど都合が良い。なにより昨日少し喧嘩をしていたのだ。もちろんすぐにソーマは謝ったが、乙女の怒りがそんなすぐに霧散するはずもなく、こういう意趣返しになるのであった。

「イ、イル、、ウオ、タル、デル」

ヒーリングで傷を癒すも体力は回復しない。這うようにしてソーマは椅子に座る。用意されていた紅茶はまだ冷めていないようだ。

「休憩が済んだらあと3本ぐらい同じようにしましょう」

カリー又は教本に手加減という項目はないらしい。それは最初の体力作りの段階から変わらなかった。

「(いつたどこに軍の備品を背負わせてひたすら持久走をさせる鬼がいるってんだ)」

心の叫びは誰にも届かない。

ちなみにカトレアはそんなときはカリー又と二人で馬に乗っている。輜重用の軍馬であろうか、二人乗せたこときではビクともしない様子であった。

「返事がないようなので5本に増やしましょう」

トリップしているソーマの耳朵を叩く悪魔の福音。

撤回の不可を悟ったソーマは諦めて返事をする。

「はい、わかりました。ぜひともお手柔らかにお願いします」

今日は晩御飯を食べる前に倒れるだろうなあ、とソーマは思ったのだった。

そんな死と隣り合わせのような訓練も3年もたてば慣れてしまうようで、もとより能力成長において多大なアドバンテージを持つソーマは、偏在カリーヌ軍に突破戦を挑めるほど成長していた。

ここで目を見張るのは能力の運用もさることながら、カリーヌによつて磨き上げられた戦術眼、戦略眼である。

力押しだけではなく、きちんと相手の強み弱みを分析する。自分の動きで相手を動かしその隙を突く。

カリーヌの偏在を相手にしながらも、ソーマは自身の全力でもってこれを成し遂げることを可能としていた。

「突破に全力でどうするんです？」と厳しい言葉を先生から頂くも、ようやくできたと、力をつけた実感にソーマは顔をほころばせた。

ちなみにそんな訓練の様子を見たルイズの反応は『よく生きてるわね』であった。

そのころから実地訓練という名の亜人討伐もこなすようになっていったソーマ。

そんなころのいろんな一幕。

「20は少し遅い気がします」

「18まで学校に行く人が大半で、22まで勉強してても珍しくもない世界ですからね。20で成人でも不都合がないんです。世界的には18が主流かもしれません」

「学校が無い時代はどうだったのかしら？」

「うーん、そのころは15前後ぐらいでしょうか」

「貴方が15で貴族になることになったのも縁ですね」

「貴族中心の世界で、文字通り『人と成る』ですか」

「アラ？どういう意味かしら？」

「私の世界の文字の『漢字』といひまして・・・」

「そういえばレニ工殿に会ったのですね？」

「はい。非常にすばらしい方との印象を受けました」

「本当のところはどうなのですか？」

「不気味です。あの目は世が世なら世界をまとめる目です」

「そこまで感じ取れたのなら問題ないわね。まあ、しっかりなさい
「なにか因縁でも？」

「たいしたことはないのですが、あの人は昔魔法衛士隊の隊長でして、
気風が自由でしまりの無い隊でしたが、本人の統率能力もさることながら、
部隊も異様なまでの練度と命令遂行能力がありました」
「優秀、と評価するにはいささか早計ですかね」

「だから不気味で正解かもしれないわよ？」

「レニ工様のご息女もその旦那様も非常に良い方なのに」

「娘はある人に憧れて男装したり、元貴族とはいえ平民を好きになったり。
やはりあの人の娘ね」

「通りでドレスではなく軍服のような衣装を召してらっしゃったわけです」

「そう、貴方の世界にも貴族はいたのかしら？」

「いましたね。有名な国の話をすれば、最後は国民によって国民の前で王は首を刎ねられました」

「なんてこと・・・」

「まあ、先代先々代の王の借金だとか、王妃の浪費癖だとか色々言

われてますが、事実として王制が平民、とそれに与する一部の貴族
によって打倒されました」

「それで王なき国はまとまったのかしら？」

「求心力と政治力がない、結局は恐怖政治でしたね。指導力にも問題があつたでしょう。王制打破という目的がなくなつたら内側で大もめ。結局打破を為した中心人物も、彼の反対派により首を刎ねられました」

「因果応報ね！」

「落ち着いてください。この世界のように王は始祖の血を継いでいる、なんてことはないですから。そしてその後、指導力のある人間によつてまとめられたわけです。名をナポレオン・ボナパルト。ある人が彼の目を人を統べる目と表現していましたが、おそらくレニ工様も同じような目なのでしょう」

「そういえばそんなことも言つてたわね。とすれば、二人の差は野心の有無かしら？」

「レニ工殿が面倒くさがりだっただけではないですか？」

「フフツ、そうかもしれませぬね」

「今日の訓練は戦術という枷をはずしましょう」

昼食の時に不意にカリィヌが言う。焦るトーマ。

「え？それではただの決闘では？」

「ああ、貴方はもちろん普通の魔法だけですよ」

それは死んでしまう。ソーマはいったい何が起こっているのか理解が追いつかない。

「あ、あの、カリィヌ様？」

「鬼は鬼らしく戦わせていただきます。おとなしく、とは言いません。鬼に襲われる恐ろしさをせいぜい感じなさい」

「何のことか、わからないのですが・・・？」

「前回の討伐の時に私を鬼とか言つた者がいたそうですが？」

ソーマは思い出していた。昨日すれ違ったそのときの部隊長がどういうわけか憔悴し、特別訓練があったと話していたことを。

「特定もできませんでしたから部隊員全員の連帯責任とさせていたできませんでした」

責任はいいが、ただの悪口（それも誤解なのだが）に適用することじゃない！と、ソーマは理不尽さに頭を抱えた。実は自業自得なのだが。

「ですが・・・」

「後は貴方だけです。思いっきりかかってらっしゃい」

屋敷にいても届く振動と、たまに高く空を舞うソーマを見つけたメイドは『人ってあんなに高く飛べるんだあ』と声を漏らし、そんな“訓練”の様子をちらりと見たルイズは『ああ、今度こそ死んだわね』とつぶやいたのだった。

第11話 カリーヌとソーマ（後書き）

自分の書くカリーヌがどんどんかわいい人になっていく・・・なぜだ！？

『全力』でかまってやれる息子がいたらこうなるの、、か、、も？

まあ腐っても（嘘です腐ってません）鋼鉄の規律の体現者ですからやるときはやります。

いつも読んでくれている方、初めて読んでいただいた方ありがとうございます。

評価、お気に入り登録、ありがとうございます

感想お待ちしております。

今なら熱のこもった返事がくるかも？え？いらない？またまた冗談を

ではまた明日お会いしましょう

第12話 エレオノールとソーマ(前書き)

アニメしか知らないけど

エレオノールは一途で妹思いですごく頑張ってるお姉さんだと思っ
んだ。

第12話 エレオノールとソーマ

「へえ、なるほどね」

エレオノールは感心していた。今回は火薬についての話だ。

「そういう魔法が関わらないことって結構曖昧なんでしょうかね？」

「少なくとも専門で研究してる人はいないわね」

単に黒色火薬といっても、用途によって配合の比を変えなければならぬし、それより配合される元の硫黄や硝酸カリウムの純度についてもこの世界では考えられていないようだ。

ソーマはエレオノールとの問答から、小型の銃が発達しておらず、主な用途が大砲など強度に不安がなく、そこそこ大雑把でも問題ない故のいい加減さだと思いついた。

しかし硫黄などは秘薬に近い扱いだというから、その有効活用のため、と云ってこういう助言をしている。

「ありがとう、いつも参考になるわ」

「本当は女の人とはもっと平和な小話とかしたいんですけどね」

「それはカトレア用に取っておきなさい」

“助言”はエレオノールがヴァリエール家に帰る度にソーマが話し、アカデミーへの土産となる。

内容はさまざまで、金属の特性や、細菌の存在や消毒の必要性、果てはクーラーや冷蔵庫の原理にまで至った。

だがアカデミーの存在意義が魔法の軍事転用の方面に偏重しているらしく、土産もウケのいい話ばかりではないらしい。

例えばソーマは衛生面こそ軍における最大の課題だと思っているのだが、この国ではなかなかその意図は通じないようだ。

一度二人が激しく討論をしたことがある。話題は天気というありふれたものだった。

ソーマが雲の成り立ち、雨や雪の正体など話すところまでは良かったが、天気予報の話でエレオノールは真つ向から反発した。

魔法が存在し、精霊が信じられているこの世界では受け入れられないであろう。何より雨乞いで精霊に奉げ物をすれば、運がよければ実際に精霊が雨を降らす世界なのだ。

「僕の世界では1週間程度なら天気の先読みができる」

「そんなの結局精霊様の気分次第なのよ」

「行軍にも関わるでしょう？いつでも相手が精霊の力を使えるとは限らないですし」

「残念だけど、そういう魔法の力を無視してる時点でブリミル教の教義にひっかかるのよ」

「むちゃくちゃですね」

「始祖の悪口を言う気？」

「始祖ではなく今ブリミル教を担っている人への悪口です」

始祖も教皇も教会もということか、という誤解をもとに、この後もエレオノールの説教が続いたのだった。

しかし自然科学すらブリミル教は許容できない。魔法を無視して今ある事実を観測し予測する。狭い分野ならまだしも、天気という大きな括りでは無理からぬことか。

逆に一方的な講義になることがある。説明の中の物質や概念が存在しないときだ。

例えば無煙火薬の話をしても肝心のニトロセルロースのことが分からないのだ。

ソーマはそういう時は話をなかったことにしてくれ、と頼むことにしている。存在するなら運用でごまかせるが、新しく作るのは時期尚早だと考えているからだ。

しかしエレオノールにすれば研究者として忘れる気はなく、その特徴や材料をしつこく問い質すのであった。

金属については、合金の運用についてが主であった。しかし触媒として使える可能性がある、と言われ、ソーマはいろんな金属のサンプルを渡した。

仮にこの世界で見つかったといなくとも、存在はしているのでそれを『見つけた』といってお土産にすることも容易であった。

そのアリバイ作りのためにヴァリエール領内の森に行き、亜人などの討伐をさせられるソーマはたまったものではない。

しかし、エレオノールに渡す金属や合金のレシピは多種多様であり、アカデミーは用途を探る仕事をさせられている。

ちなみに商品価値や軍用価値が高そうな金属については公爵に渡している。いきなり国の手柄にしては、世話になっている公爵に申し訳ないからだ。

「アカデミーは分析屋じゃないのよ？」

「体系化しないからです。あと、金属の見極めも個人の感覚というのが信じられません」

ついにエレオノールから苦情が出た。ソーマとすればこっちも苦労してるんだから、という言い分がある。

それより合金の割合まで本人の感覚というのがソーマには驚きであった。確かに魔法はソーマがかつて奇跡と評した力だが、ここまできるとあきれて物も言えないようだ。

「結局研究がうまくいっても、その結果を公表せずに自分の領地に持って帰ってしまうのよ」

「研究機関の名折れですね」

「研究じゃ家は潤わないのよ」

「研究員のセリフじゃないですね」

世界は違えど状況は似たり寄ったりらしい。

「私の研究がすんなり行ってるのもヴァリエールの力あってこそよ。普通の家なら握りつぶされてるわ」

公爵様様だなど思いながら、ソーマは少しあきれた様子を見せたのだった。

エレオノールが怒鳴り込んできた。もはや珍しいことでもなく、ソーマもあわてる様子はない。他愛ない話から愚痴になる。

「お父様にはもつといる見せてるんですって？この間なんて、上司に『ヴァリエール公爵は新しい金属をいろいろ自軍の装備に使っている。なぜそういうのを持ってこない？』なんて嫌味を言われたのよ！」

「一研究者より公爵様優先です」

「貴方、ジャルジエの家に入ってから性格悪くなっただんじやない？」

「そうですね？エレオノール様の機嫌が悪いだけでは？」

「昔はかわいかったというのに」

「かわいいだけでは貴族は務まりませんからね」

貴族の養子となり一応名実共に貴族となったソーマ。今はヴァリエール家に向いて奉公中という名目である。

「はあ、レニエ殿が気に入るわけね」

「義父も私もそこまで変わってるとは思いませんか？」

「2人とも十分変な人よ！」

「私は普通ですよ。ただ少し見ていた世界が違うだけです。そういう意味だと義父がトリステイン純正の変人となってしまいますね」

「それは、どうあっても揺らがないわ」

ある日、ヴァリエール家に帰っていたエレオノールは酔っていた。研究員としてのストレスもあっただろうが、理由の大半は飲んでいたお酒。ヴァリエール特産のリンゴ酒『カルヴァドス』が最近の彼女お気に入りだったからである。

そんなところに都合よく、いや運悪く通りかかる一人の男、ソーマ。彼も訓練から戻ってきたところである。

「あら、エレオノール様。帰ってらしたんですか」

「・・・ちよつとこつちへ来なさい。そして私と飲みなさい」

「もう酔ってるじゃないですか？ちよつと待つてください、水を、つてちよつと・・・？」

言い切る前に、エレオノールはソーマを自分の巢穴^やへ連行した。

「どうしたんですか？珍しく酔ってるみたいですけど」

エレオノールにとっては別に珍しいことではない。ただ実家ではルイズやカトレアのことか心配で飲まないだけなのだ。

「いいから貴方も飲みなさい」

そう言つてグラスに酒をなみなみと注ぐ。さすがにソーマは躊躇した。

「私の注いだ酒が飲めないのかしら？」

酔っぱらいの絡み方は次元の壁を超えてなお共通のようだ。

ソーマはめつたにストレートでこつこつ酒を飲まない。それは地球にいた時代から変わらない。

たいてい多少水を足すか、まずい酒ならサイダー割りであつた。少なくともアルコールが40度を超える酒をそのまま、なんてありえないのだ。

故にソーマは見えないところで杖を振り、口の中で少しずつ薄めながら飲んでいった。

しかし、酔っているとはいえそれに気づかぬほど甘いエレオノールではない。杖を取り上げ、流し込むようにソーマに酒を飲ませた。結果として、どうしようもなくなった二人がそこにいた。

「ね〜ソーマ？私って貴方のなんなの〜？」

「大切な人ですよ〜。私が仕える〜、ヴありエーる家の長姉^{ちやうじ}なんですからあ〜」

「ばかあ〜！そ〜ゆ〜ことを聞いてるんじゃないの〜！」

ただただカオスであった。客観的に見れば痴話ゲンカだが、この屋敷にそういう目で二人を見るものはいない。

「私は、もうすぐ26で、婚約者はいるけど、あんまり会えなくてもアカデミーは辞めたくなくて、もう、どうすればいいの?」

「婚約者の前で、そういう風に、素直になればいいん、ですよ。婚約者は、きつとエレオノール様を、ヴァリエール家の、長女としてではなく、一人の女性として、見てくれます」

正史では妹たちのために研究に没頭した姉は、この世界においては研究に純粹な楽しさを感じていた。

それゆえに正史にあったはずの悲痛なまでの必死さはなく、逆にアカデミー内の腐敗や墮落に気づき、自然に酒を^{あお}呷る量も増えるのであった。

「ソーマ、私は貴方のとつてのなに?」

「酒飲み友達ですか?」

少しふざけてソーマが言う。エレオノールが怒る。

「ふざけないで、よ・・・」

言い終わる前にソーマがエレオノールを抱きしめる。ヘタレとは、自分が好意を向けてない相手には、残酷なまでに優しいのだ。

「大切ですよ、言わなくてもわかるでしょう?」

もうソーマはエレオノールを放している。

「言わないと・・・わからないじゃない!」

「言わないとわからないですか?なら、貴方もちゃんと言っべき人に言っただけなさい」

「うん」

いいながらソーマの胸に頭をあずけるエレオノール。

そうしてすっかり酔っぱらった二人はそのまま寝てしまった。

あくる朝、ソーマが目を覚ます。まだ夜は明けてないのだが、頭

痛がひどく、目が覚めてしまった。

ソーマはベッドから出て、横で寝ているエレオノールの眼鏡を外し、布団をかけなおす。

「なにがあつたん、だっけ？」

お互い服は着ている、何もなかった、一緒にお酒を飲んで、ちょっと飲みすぎただけ。

そう考え、しかし朝までエレオノールの部屋にいるのもどうかと思ひ、自分の部屋に戻ることにした。

ちなみに最近ソーマも自分の部屋を持っている。さすがに貴族になって、奉公という扱いの今、自分の部屋がないのはおかしい、となつたのだ。

部屋には錬金で作つた売り物や実験用の機材、研究中のガラクタなどお世辞にもきれいとはいえない。

それゆえ、ではないが、カトレアの病状が悪化を見せない今でも、ソーマはカトレアの部屋で寝ることが普通であつた。

ソーマは自分の部屋の扉を開けた。そこにはあふれんばかりの笑顔をとたえたカトレアがいた。

「すいません間違えました」

ソーマの部屋はカトレアの部屋の隣なのだ。

「まちがいなく貴方の部屋ですわ？ 昨晚はどこでお楽しみだったのかしら？」

一晩エレオノールの部屋過ごし、あまつさえ一緒に寝たのだ。勘が鋭いカトレアでなくとも気づくだろう。

「すいませんでしたー！」

見る人が見れば、美しいまでのバックジャンプ土下座だった、と評したのであろう。

その後、ソーマは二日酔いと闘いながらカトレアを慰めた。

「他の女の匂いを振りまきながら私に触れる気なのですか？」と言われたときは、ソーマも泣きそうになつたが、なんとか堪え、よう

やくカトレアに許してもらえたのは朝食の時間が迫るところだった。

「おはよう、カトレア、ソーマ」

いつにない上機嫌、そして眩しいまでの笑顔をソーマに向けながらあいさつをしたエレオノールを見て、カトレアはもう一度徹底的に尋問することを決めたのだった。

第12話 エレオノールとソーマ（後書き）

カトレアさんが順調にヤンデレになっていく……。なぜだ、俺のせいなのか？

ところで皆さんは「異世界に召喚」と聞く何を思い浮かべますか？
私が思い浮かべたのは魔法騎士レイアースでした。
次点でふしぎ遊戯です、がこっちは異世界であっても召喚じゃない
よね……

ここまで読んでいただきありがとうございました。

アクセス、評価、お気に入り、感想、どれも本当にモチベーションアップに繋がってます。

これからも是非よろしくお願いします。

第13話 討伐隊とソーマ（カーリヌ編 番外）（前書き）

番外という名のスピントフ

ちなみに全員分の番外はない、、はず。

第13話 討伐隊とソーマ（カーリーヌ編 番外）

ソーマがカーリーヌの偏在と戦えるようになったところに別の訓練が追加された。いや、訓練という名の平定活動、亜人討伐である。

確かに地図を見る限り道が森を迂回していることが多い、と感じていたソーマだが、実際に会うまでそういう亜人の存在を信じられなかった。

今回は森の最寄の村で一泊した後、討伐に向かう手はずで、森に着いたのは昼過ぎだった。

「あと何千年かたつたら人間みたいにならないのかな？」

「そうなのは間違いなくその時にいる人間と戦争でしょうな」

今回の部隊長のゼラスキスである。ヴァリエール家でも要職にあり、また戦闘メイジとしても高い能力を持つ。

「話し合いができるまで進化してくれないものかな」

「話し合いができる人間同士でも戦争をしますよ」

そんな実のない会話をしていると、目標であるオーク鬼を見つけた。斥候役なのだろうか、こちらを見つけた瞬間雄叫びを上げて・
・逃げ出したのだ。

「待ち伏せされるかな？」

「以前にメイジ部隊が返り討ちにあつてる以上、慎重を期すべきですね」

ソーマは千里眼を発動させ、索敵範囲を広げる。それと同時にあらゆるものを見つける。

「俺達が突っ込んだ時に回りこむための部隊がいる、迂回しながらこっちに向かっているな」

ソーマの報告に顔を蒼くする人間の隊員たち。しかしソーマは続ける。

「だが、あいつらの作戦は成功が前提で穴だらけだ。そこを逆手に

取る」

かくしてソーマは単騎で回りこむ部隊を制圧しに行った。

「一人で大丈夫なんですかね？」

「あれでもカリリー又様の愛弟子だ。何とかするんだろ。森がなくなるなんてことがなければいいがな」

軽口を叩き合う隊員たち。彼らに課された任務が難しくないからであった。

「相手が防衛戦を挑んでくるとはいえ、万一出てこられても面倒です。しっかり足止めしますよ」

ゼラスキスは皆の気を引き締めた。

ソーマは別の部隊を捕捉していた。件の挟み撃ち用部隊だろう。

それと同時にオーク鬼の出入りが激しい洞窟も見つけていた。

「さつさと終わらして帰るか！」

予定のない強襲を受けオーク鬼は混乱した。目の前の子どもが、オーク鬼の目から見ても悪鬼羅刹のごとく映ったであろう。

誰も見ていない今、ソーマは思う存分に力を振るう。宝具と魔法、二つの“奇跡”はあつという間にオーク鬼の死体の山を作る。

数匹のオーク鬼など歯牙にもかけぬように屠ったソーマ。その様子を見る人が見れば、あるいは『烈風』と評したかもしれない。

「早く行ってあいつらを安心させないとな」

すぐにソーマはオーク鬼を逆に挟み撃ちにするべく動いた。

ゼラスキスの部隊はいわば出し惜しみをしていた。この後に敵の本陣があるのに、全力を出すわけにはいかないのだ。しかしそこはさすがに歴戦の猛者か、見事に膠着状態じょうちやくを演出しゅつしゅつしていた。

そして不意に届くオーク鬼の汚い悲鳴。機を逃さず攻勢に出るゼラスキス隊。そう、ソーマが後方から強襲をかけたのだ。

オーク鬼の先兵を片付けたソーマはゼラスキスに報告をした。

「あつちにやつらが出入りしてる洞窟があつた」

「おそらくアジトでしょうな」

「あいつら家は建てないのかな？」

「群れの規模にもよるでしょうが、これだけ材料が豊富な森に住んでるにもかかわらず洞窟なのですから建てないでしょう」

「初めて家を建てたオーク鬼が現れたら話がしたいな」

「話すのと家を建てるのとどちらが先でしょうかね？」

報告が済めば再びそんな意味の無い会話を二人は続けていた。

「大きいな」

「大きいですね」

洞窟の前に着いたソーマ一行。

「横穴とか、下手をすれば山の向こうまで繋がっているかもな」

「殲滅は難しいでしょうかね？」

「俺一人で・・・」

「ダメです」

「・・・ケチ」

「先ほどの作戦とは違すきかいます。何よりカリー又様より独断専行は控えさせるよう仰せつかっております」

「はあ、とりあえず見える範囲で横穴でも埋めるか」

「オーク鬼が通れそうなサイズだけ埋めていきますか」

「気取られずに済ませたいため、物理的破壊での穴埋めはできない。つまりは土メイジ頼りである。」

穴埋めのために部隊を散開させる。万が一オーク鬼に遭遇したら全力で逃げるよう言い含めてある。

その間、トーマは洞窟内を『視て』いた。内部の規模が大きく、オーク鬼の数も依然多い。しかしソーマが最初に思ったことは

「これは・・・上から押しつぶせるか？」

であった。つまり洞窟そのものを上から崩して埋めてしまおうというのだ。

「取り逃がしても再利用されないためには必要だな。しかし土メイジは討伐でも要^{かなめ}だしこれ以上酷使するのもなあ……。しかたがない、いざというときは宝具でも使うか」

宝具で自然破壊をしようとする男、ソーマであった。

時がたち、また隊員全員が最初の入り口前に集合していた。この時まで二度、交戦があった。

どちらも声を出す暇も与えずに瞬殺した。これ以上警戒され、また時間をかけるわけにはいかなかった。

皆の前でソーマが大まかな作戦内容を話す。

「殲滅がベストだが、目標はこの洞窟を使い物にならなくすることだ。追撃の必要もあるが最低限に留める。

土メイジを前衛と中衛に振り分け、間と後衛に水、火メイジを配置する。火メイジは仕事がないことを祈っておけ、むやみにファイヤーボールなんて撃つなよ？下手すりゃこつちが全滅するからな。

先頭はゼラスキス、^{しんがり}殿は俺だ。ゼラスキスは常に索敵を中心に行い、あまり戦おうとするな。いざというときは殿を任せねばならん。作戦は以上だ。皆の働きに期待する」

「殿にならないよう、始祖に祈りますか」

「祈るより敵を探せ。こちらは少数精鋭とはいえ囲まれてはひとたまりも無い」

「いざというときはソーマ様一人で逃げてくださいね」

「一人でオーク鬼の軍団に立ち向かうのと、カリーヌ様に立ち向かうのとどつちがいいと思う？」

「鬼とカリーヌ様を同列には扱えません」

「もはや意味は同じだろう」

「聞かなかったことにします。では行きましょう」

この討伐隊は12名。内訳は土5、水3、火2、風2。ソーマと

ゼラスキスが風である。もつともソーマは色々魔法を使えるが対外的にメイン風、次点水である。

洞窟内の通路は人間にはまだ広がったがオーク鬼には狭く、少なくとも戦うには向かないようだ。

通路で対峙したオーク鬼は持つてる武器を振るうことができず、ソーマたちは魔法で直線的に攻める。

倒したオーク鬼は通路の端に寄せる。そのままでは撤退の邪魔になるのだ。

いくつかの横道があつたが、ゼラスキスは見ることなく牽制で魔法を放っていた。あとでソーマが『視た』が、そちらに逃げたオーク鬼も隠れて迎え撃つオーク鬼もいなかった。

隊員の負傷は、捌ききれなかつた投石によるものと、オーク鬼を倒し、隊列を整えるその隙を弓矢で狙われたものがあつた。

どちらもたいした被害にはならず傷も既に魔法で癒されている。そんな幾度かの通路での戦闘を経て、大きな空間に出た。

「うじゃうじゃいるな」

「反対側にも通路がありますから逃げられますね」

「魔法を駆使して塞げ！向かってくる分はどつとでも対応できる」

魔法で通路の前に土を盛り、錬金をかける。逃げられなくなったオーク鬼が一斉にこちらを向く。その数およそ30。

「皆！まだいけるか？前衛と中衛は交代。火の魔法も使つていいぞ、ただし絶対当てる！それと広域魔法は禁止だ。これだけ相手すれば追撃は必要ないだろう。しっかりやれ！」

ソーマの命令と檄^{げき}が飛ぶ。

戦局はさほど厳しいものではなかつた。土メイジが柵を作り、立ち往生するオーク鬼をそのスキマから迎撃。投石や弓矢などの遠距離攻撃は風で対処。柵にはばまれ、横に広がりすぎたオーク鬼を風で吹き飛ばし、容赦なく焼く。

気づけば一方的であつたが、いかんなく魔法を使い、体力はともかく精神力はぎりぎりであつた。

「おわりましたかね？」

「みたいだな」

生臭い臭いが立ちこめる空間となつてしまつた場所。その端に大きな布をかけられたなにかがあつた。

「なんでしようね？」

「祭壇じゃないか？」

「彼らのでしょうか？」

「ここに隠れていた人間かもしれないな」

「少し調べてみますか」

「くっ！ま、まてっ！」

少し遅かつた。ゼラスキスがかけたディテクトマジックに反応したのか、その祭壇が、いや洞窟そのものが音を出しはじめた。

「失敗でしたかな？」

「今はいい。皆！全力で逃げるぞ！」

そう言うのが早いか、洞窟は崩れだした。

「ちよつと敵しいか・・・お前ら！先に行け。道は俺が作つてやる」

ソーマが魔法で風のトンネルを作る。しかし反対の聲が上がる。

「待つてください、そうしたらソーマ様が・・・」

「時間がない！さつさと行け！俺一人ならどうとでもなる」

そいつって吹き飛ばすように隊員たちを送り出したのと洞窟全体が崩れたのはどっちが早かつたか。

「ソーマ様っ！」

崩れた山を見やる隊員たち、自らの浅慮を呪つたゼラスキス。

「なんてことだ・・・」

「案外大丈夫だと思つんですがね？」

「それでも必要以上に手を煩わす結果になつてしまつた」

そんなことを助けられた隊員たちが話していると、崩れた山の一部が爆ぜた。

「何を気に病んでる？戦いに不確定は付き物だろう？」
無傷のソーマがそこにいた。

既に暗くなっていたため森で一泊となった討伐隊、話はソーマがどうやって助かったのかと、あの祭壇についてであった。

「え？自分の周りに風のドームを作って、それを解いた瞬間にファイアストームで吹き飛ばしただけ」

「いやいやいやいや、おかしいですから。風であの質量を受け止めることがおかしいのに、さらに吹き飛ばすって」

「それに私たちを助けるためにあんな精緻せいぢな魔法を使ったのに、立って続けにそんな大技を・・・」

隊員たちがソーマの魔法でやいのやいのしてる中、ゼラスキスが問うた。

「しかしあの祭壇はなんだったんでしょう？」

「なんだったかはわからないけど、仕掛けは生贄を逃がさないためのものだったんじゃないかな？」

「ほうほう」

「それが古くなったのと、オーク鬼がああ空間をいじったことで正常に働かなくなった結果」

ソーマが洞窟があった方向を指差す。

「ああなった、と言うのが俺の推察」

「なるほど。しかし生贄を逃がさないためにあんな大掛かりなものを用意するとは・・・」

「じゃあ韻竜でもいたんじゃないか？元々横暴な韻竜の棲家で、祭壇と称してあの仕掛けを使って閉じ込めようとした。でも、無理だった。で、生贄用に使いまわした」

「どっちにしろ人に害しか与えない類のものですな。かつてそうあり、このときもソーマ様を危険な目にあわせることになった」

ゼラスキスは少し悔しそうだ。

「俺にかかれれば武勇伝に早変わりさ。無事なんだから報告書に書かなくていいぞ?」

「とりあえず崩れたと結果だけ書いておきますか」

そして何事もなく朝を向かえ、屋敷に帰ってきた。

「お帰りなさいソーマ。無事だったかしら?」

風呂から上がったソーマを部屋でカトレアが迎えた。

「ああ、何の問題もなかったぞ」

「いろいろあったのね」

笑顔でこう返された。本当に勘が良い。

「どんなピンチもカリーマ様との訓練とは比ぶべくもないさ」

「ふふっ、ひどい言い方。今回はどんなところだったの?」

カトレアに今回の討伐の旅の説明をするソーマであった。

後日、廊下でソーマは憔悴したゼラスキスとはちあわせたのだが、ゼラスキスの様子を訝しく思いたずねた。

「どうしたのだ」

「いえ、カリーマ様との特別訓練がございまして。ソーマ様を除く先日の部隊員全員で、でした」

「どういうことだ?あの件は報告書には書いてないのだから?」

「別件でございます。ソーマ様も追って沙汰あると思いますので、では失礼します」

「どういうことだ?」

ソーマが事態に気づいたのはその後の昼食のときであった。

第13話 討伐隊とソーマ（カーリー又編 番外）（後書き）

これも書くのが難しかった。

自作チート相手にピンチを演出するのがどうも苦手だ。

そういう時はカーリー又かカトレアに何とかしてもらっただが（笑）

今回もお読みいただきありがとうございます

週間アクセス：10799（9/14確認）は本当にうれしくおもいます。

これからも頑張って更新していきます。

既にお気に入り登録、評価、感想を書いていたいただいた皆さん
ありがとうございます

まだの皆さん。気が向いたらよろしくお願いします。

第14話 公爵とソーマ（前書き）

いわゆる内政部分

そしてソーマがついに・・・

関係ないですがジミヘン没後40年ですね。Purple Haz
eでも弾くか・・・

異世界召喚で思い浮かぶ作品を感想に寄せていただきありがとうございます。
ざいます。

前書きではありますが、ここで感謝の意を示させていただきます。

第14話 公爵とソーマ

「君がくれた情報は大きい役に立っているよ」

「公爵様のお役に立ててうれしく思います」

「ソーマは何でも知っているのだな」

「私には知識だけ、ここでなにかを為す力がございません。ヴァリエール公爵のお力添えあつてのことです」

ソーマがまず与えた技術は農民のためのものであった。農業については冬の間情報をもとめ、早く取り掛かった方が良いと判断したのだ。

商品価値の高い作物はないかとソーマがいろいろ物色していくと、テンサイ、要は砂糖大根を見つけたことができた。

これは育成が難しい植物だが、砂糖が高値で取引されるハルケギニアではその手間をかけるに値すると考えたのだ。

このように価値を含んでも抽出が困難なものや、価値が無いと思われるものに価値を見出すことが主であった。

また、この世界では分かっているようで分かっていない『連作障害』についての説明も加えた。土メイジならば解決できるがもちろんだたではないからだ。

このように農民を助ける情報を多く与えた。

「なぜ農民を助けるのだ？」

「税を集めるにしろ、戦争で徴用するにしろ、平民が元気で悪いことはありません。最も悪政となつたらいろいろ面倒かもしれません」

「そうしないようにするのも、そうなくてもなんとかするのが貴族の仕事だ」

次に測量技術である。魔法世界であるゆえ感覚派が主流なためか、

このあたりは非常にいい加減であった。

まずは検地を薦めた。土地の測量から取れ高を予測することで、大きな不正の芽を潰しておく意味もあった。

次に製図方法と併せて領内道路の詳細な地図を作った。この世界の地図はやはりお世辞にも正確とはいえなかったのだ。

他の領地で堂々と測量をするわけにはいかないが、一つ正確な基準があれば、それを元にした人間の感覚でも何とかなるものである。そうしてトリステイン国内の道路状況を把握した。

「いろんなところでいい加減なんですね」

「細々《こまごま》したことをするのは貴族としてどうかという風潮なのでな」

「地図も税もなんというか……。中央がすっかりしてないと不正が横行しそうですね？」

「それについては弁明もできんな」

そして、ソーマが魔法を学び、自身の錬金で何ができるかを知った後には、新たなアイデアを公爵に提供した。

ソーマの『知識』と錬金の相性は抜群なようで、地球上のあらゆる物質の錬金を可能としていた。放射性物質はさすがに遠慮したが、そしてまず公爵に見せたのは“アルミニウム”であった。加工しやすい、軽いなど利点が多い。強度については『固定化』でまかなえる。

およそ万能であろう金属に公爵は非常に興味を引かれた。

「すごい金属だな、これは」

「この世界にもわりと多く存在する金属だと思っんですけどね。ただ、単独で抽出するのは困難ですが、魔法があればなんとかかなりますか」

「我々が直接作れないとなると、これが含まれる鉱脈を見つけてなんとか生産体制を確立したいものだな」

「計算上は銅よりずっと多く存在するはずなんですけどね」

「君の世界ではどうやってこれを見つけたのだね？」

「知的好奇心でしょうか。例えば、この石は2つ以上の物質からできているからそれを分けよう、といったような」

「見習わなければならぬ」

「研究と実験はお金がかかりますがね」

「アカデミーへの予算を決める時に王室も似たようなことを言っていたな」

「どこの世界もその辺の事情は変わらないんですね」

最終的にソーマの話は外貨を稼ぐ方法にまで至った。

ソーマは錬金で作った色ガラスを見せながら言う。

「こういうのはロマリアに売れませんかね？」

「うむ、教会なら高値で買い取ってくれるだろう。しかしいいのか？ そうなれば結果的にはどこかの平民が苦しむことになるぞ？」

「なかなか『みんな幸せ』とは行きません。まあ直接ロマリアに卸せばいいんですが」

「距離が遠いのがネックか……。隣国に売るものは無いのか？」

「そうですね、りんごでお酒でも作りますか？ 蒸留酒スピリッツという強いお酒です」

「ほう？ どうやって作るのだ？」

「お酒を温めるとアルコール分が飛ぶでしょう？ その飛んだ分を集めてアルコールを強めるんです。そしてそれを樽で10年ぐらい貯蔵して完成です」

「10年か、すこし長いな。あとは、ヴァリエールで独占できるか？」

「ちょっと裏技を使います。8年分ぐらいは供出するのでりんごとその方面に強い専門家の提供をお願いします。独占については蒸留酒の類をこちらで見かけませんか。あるにしてみりんごでは作っていないでしょう。あとは……名前ですね。スピリッツとは酒の

種類の名前なので」

「君の世界ではなんと呼ばれてたのだ？」

「カルヴァドス、ですね。作ってる地域の名前でした」

「ならそれでいいだろう」

公爵のため、そして自分の楽しみのため、蒸留酒を『別荘』で貯蔵し寝かすことを決めた。

しばらくたったある日、いつものように互いの状況を報告しあった後のこと。

「そうだ、君の養父になる伯爵に会う段取りがととのったぞ」

「そうですか。やはり手ぶらというわけにはいかないのでしょうか？」

「そうだな。何か用意できるか？」

「手土産の準備はありますが、利権云々の配分は公爵様の仕事です」「いつの間に準備したのだ？しかし面倒なことを押し付けられてばかりな気がするが？」

「公爵様ほど忙しくはないので。その忙しさは上に立つものの義務ですよ」

「わかつてはいたが、君に言われるとなぜか癪に障るな」

「では代わりにカリーヌ様と練兵場で戯れますか？」

「それは君の義務だ」

「それは初耳ですね」

「君は色々な意味で娘達の助けになってるようだが？」

「僕はカリーヌ様のストレス発散用のサンドバックですか？」

「使えるものは使うのも貴族だ」

「もう好きにしてください」

こうしてレニエ・ド・ジャルジェ伯爵に会うことになった。

屋敷の者に案内され奥の部屋に入る。そこには体つきこそ細いものの、鷲のように世界を睨むがとき眼光を放つ壮年の男性がいた。

「ようこそ、公爵閣下」

「ご無沙汰をしている、伯爵。コイツが話をしていたソーマだ」

「初にお目にかかります、ジャルジェ伯爵。カトレア様の使い魔、ソーマと申します」

「こんな子が使い魔か？にわかには信じられんな」

「俺も信じられなかったよ」

二人の関係を知らなければ、おそらくギョツとするような言葉遣い。カリィも含めた3人は魔法衛士隊時代からの友人であった。

「さつそくですがレニ工様、お土産がございます」

「ほう、君からかね。ふむ、反りのある剣・・・か」

「刀といます。大きい方が『太刀』、小さい方が『脇差』でございます。素の状態をお見せしたかったので、固定化は掛けておりません」

ソーマの渾身の作。五郎入道正宗、の贋作である。このために別荘に籠ることも多かった。

「これは君が作ったのかね？」

刀を鞘から抜き放ち、しげしげと眺めながら聞く

「はい、未熟ながら」

「いつ作ったんだ？」

「これも裏技です」

伯爵も脇差を手に取りながら当然の疑問をぶつける。裏技の一言で済ますソーマ。伯爵もその言葉に秘められた『聞くな』という思いを酌む。

伯爵の興味は尽きない。

「切れ味はどうなのかね？」

「試したことがないのでなんともいえません」

「では今、試してもらおう」

伯爵はそう言うと、水差しの水から直径10センチほどの氷柱を作り、宙に浮かべた。切ってみる、と言っているのだ。

「折れはしないと思いますが、曲がるかもしれませんよ?」

「そのときはもう一回作ってもらうさ」

「では、せめて固定化をお願いします」

伯爵は刀に魔法を掛ける。ソーマは鞘に入った刀を受け取り、刀を『視る』。おそらく最低限の固定化だろう、非常に弱い力を見てとった。

ソーマは氷柱から少し間合いを取り、構え、そして動く。抜き放ち、斬り、納める。一瞬とも言っていないその業を二人は見ていた。

「大丈夫だったようですね」

刀を^{あいた}検めるソーマ。刀を伯爵に返すとき、伯爵と目が合う。ソーマは、あの目で見られていたのかと^{おの}慄いた。

「この剣もさることながら、結構な腕前だ」

「ありがとうございます」

「3年ほど前から連日のようにカリーヌと練兵場で戯れているらしいからな」

「君は本当に人間なのか?」

「人間で納得いかなければ、使い魔で納得してください。もう一つお土産があります」

そう言っ取り出したのは液体の入った大きめのビン。

「マールと言うワインの搾りかすから造ったお酒です。そしてお土産とは、これそのものではなく、造り方でございます」

これには伯爵も目を見開いた。土産があるとは聞いていたが、中身は聞いていなかったからだ。

その様子を見た伯爵がたずねた。

「伯爵も聞いてなかったようだが?」

「利権については当事者同士で話し合っていたたくよう進言しておりますので」

「そうか、では話をさせてもらおう。君はワシの子らと会ってくるがよい。ああ、土産の剣も持って行け。そういうのが好きだからな

「娘が、だが」

メイドが呼ばれ、ソーマが一礼し部屋から出ていった。

「聞きしに勝る、だな」

「俺も予想外だったよ」

部屋に残る二人が息を吐く。試し斬りのくだりから、二人をして緊張を要したのである。

「しかしまだまだ底が見えんな」

「戦ったカリーヌも同じことを言っていた。そして万が一のための首輪がヴァリエールでありカトレアだ」

公爵も当初は半信半疑であったが、引き出せる情報の有用性に信頼、と言うよりは、他の者の手に渡る恐怖を感じていた。

「それでもよくやってくれている」

これは公爵のまぎれもない本音であった。

「しかし、あの子を貴族にしたあとはどうするのだ？」

「ヴァリエールで奉公、フォンティーヌで家来・・・そしてカトレアの病気が治るなら、いろいろ考えざるをえない」

「結婚も、か？」

「万が一そうなくても、娘はやらんぞ。フォンティーヌになってもらうからな」

「ではそのときは『息子殿』にそれなりの“なにか”をせがむとするぞ」

親の顔、領主の顔、そういうものをない交ぜにした二人の会話は続く。

「そうだ、息子殿からもらった酒でも少し飲もうか、おい、グラスを持ってこい」

ディテクトマジックをかけ、メイドに毒見をさせる（メイドは酒のきつさに驚いていたが）。それなりの地位にあるもの^{さが}の性である。「うむ、美味しいが・・・やはり少々きついな。メイドが驚くわけだ」

「確かに。追い出す前に息子殿に飲み方を聞くべきだったな」

「ヴァリエールの似たような酒ならば、水か炭酸水で割って飲むよ
う薦められたぞ」

「では試してみるか」

こうして飲みながらも、ビジネスの話を続けた大人たちだった。

ソーマはメイドに連れられながら考えていた。自分の価値は見せた。もとより、既定事項のような話でもあった。不信任は、煽つてないはず。

考えてる間に着いたらしい部屋にその人はいた。

すばらしく美しいブロンドの髪、細くも長い四肢、そして何より目を引いたのは、軍服をアレンジしたようなパンツルック。

そう、『男装』した女性にしてレニエ伯爵のご息女、現ジャルジエ家当主の妻、オスカル・フランソワ・ド・ジャルジエであった。

目が点になる、と目を奪われるの間を彷徨たぐひっていたソーマに黒髪の男性が声を掛けた。

「はじめまして。ジャルジエ家当主のアンドレ・グラデュイエ・ド・ジャルジエだ。君が僕たちの弟になる子かい？」

彼の助け舟により、ソーマはようやく会話することができた。

「また別の酒でも持って来てくれ」

「旨い酒なら何でもいいぞ、我が義弟ていよ」

客が帰るそのときすら酒の話しかしない親娘おやこ。かろうじてアンドレがフォローする。

「養子縁組の手続きなんかはこっちでやっておく。一応、一族にお披露目のようなものもあるけど、そのとき必要な物もこっちで準備しておくよ」

「何から何までありがとございます」

アンドレの申し出にソーマは慇懃に頭を下げる。

「ははっ、気にしないでくれ。いまさら君にしてあげられることも少ない。万が一の時は君が後継者争いに巻き込まれかねないしね」「そうならないことを祈ってます。義兄様も、きちんと将来とか跡継ぎのことを考えてください」

「やれるだけね。それじゃあ帰りの道中、気をつけて」

再びソーマは頭を下げ、残りの“家族”にもあいさつをする。

「はい。それでは失礼します、義父様、義姉様」

「おう、ヴァリエールでしっかりやれよ」

「お酒待ってるぞ」

ソーマの中で義姉の評価がどんどん下がるのだった。

屋敷までの帰り道、馬車の中で公爵がソーマに聞いた。

「どうだった、ジャルジエ家は？」

「すごい衝撃を受けました。それはもういろんな意味で」

「私が初めて会ったときも衝撃を受けたよ。動かないのに上官の評判がいいというふざけたヤツだった」

公爵が遠い目をした。

「婿養子の当主が一番まとものもうなずけます」

「悲しい現実だな。酒を送れとか言われていたがどうするのだ？」

「一応こっちで増産しますが、アンドレ様にもなにか送らねばなりませんね。色々な義理立てをしていただきましたし」

苦労人の義兄のため、色々考えるソーマ。

「酒で済む相手ではないからな」

「それに何を送ってもあの二人に持っていかれる様子しか浮かびません」

公爵とソーマは馬車の中で大きく笑いあった。

第14話 公爵とソーマ（後書き）

アイデアだけで全部丸投げソーマ君
貴族になったよソーマ君

の二本でした。

ジャルジエ家の名前の元ネタは『ベルばら』です。

カリィ又編でフランス革命の話をしたのは伏線だった、なんてこたあない。

しかし、オスカルがただの酒飲みに……。

イメージ的には『食卓の騎士』のハラペコ王の酒バージョンです。
武人だしね。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

お気に入り、評価、感想、その他諸々よろしく願います
とりあえず読んでいただけることが一番うれしいです。

第15話 ジャルジェとソーマ（公爵編 番外）（前書き）

番外編その2

ジャルジェの人がいかに変な人たちか編

第15話 ジャルジエとソーマ（公爵編 番外）

「はじめまして。ジャルジエ家当主のアンドレ・グラデュイエ・ド・ジャルジエだ。君が私たちの弟になる子かい？」

そこでソーマはようやく自分が呆けていたことに気づいた。

もちろん決して目の前の男のせいではなく、奥にいる、男装の令嬢に目を奪われたためだ。

「はじめまして。ヴァリエール家で行儀見習いをしておりますソーマと申します」

「そこまで堅苦しくなくていい、家族になるんだから。もっとも養子縁組してもヴァリエール家に出向という形だろうけど」

「まだ決まっていないとうかがってますが？」

「決まっていないなら私たちが会う必要も無いだろう？」

口を挟むオスカル。あけすけな返答にあっけに取られるソーマ。

「失礼した。私はオスカル・フランソワ・ド・ジャルジエ。君が会ったレニエは私の父だ」

「は、はじめまして、奥様」

「はははっ、名前で呼んでくれないのかい？ 姉弟になるんだろう？ なのにに囚われることのない自由な人だ、という印象を受けるソーマ。」

「オスカル、君がしゃべるだけで私たちの義弟が困っているようだぞ？」

アンドレがすかさずフォローする。ソーマはアンドレから苦労人の臭いを嗅ぎ取った。

「なんだと？」

「もう大丈夫でございます。義兄様、義姉様」

「くっ!？」

オスカルはソーマの返事に身を震わせ、次の瞬間、ソーマに飛びついた。

「ああ、かわいいなあ。かわいいぞ、お前は」

「オスカルは四姉妹の末妹だね。弟が欲しいと昔から散々わめいていたよ」

抱きつかれて顔を赤くしながら、『だからといって、思春期真っ盛りの少年に抱きつくか？』とソーマは思っていた。

なんとかペースを変えるため、ソーマは話題を作る。

「あ、あのっ、先ほどレニエ様にお土産をお渡ししたのですが、お二人にお見せするようにと言われまして・・・」

「それでメイドが変な曲がった剣を持って入ってきたのか」

納得したようにアンドレは言った。さすがに当主のいる部屋に客人が武器を持つては入れない。

レニエの時は武器と思われていなかったか、あるいは武器であってもレニエに問題はないという判断か。

「刀、と言います。斬ること、突くことを目的とした武器です」

「ほう、面白いな。アンドレも見てみる」

オスカルがそう言うと、脇差をアンドレに向かって放り投げた。

いくら鞘がついているとはいえ、武器だと説明した物を放り投げられたことが、ソーマには衝撃的であった。

「気にしなくていい。コイツは昔からこういった感じだ」

アンドレがすぐフォローする。

「切れ味はどうなのかな？」

もはやソーマに聞くことなく、自分で試したいらしい。その意を汲んだアンドレが氷柱を作る。

「ちよつと・・・」

ソーマが驚いたのも無理はない。レニエが作ったものよりずっと太い、40cmはあるつかという標柱がそこにあった。

「あ、こ、固定化はほとんどかかってないの、で」

ソーマは、鞘から刃を抜いたりしながらなにかを確認しているオスカルに一応注意していた。

それが聞こえたかどうか、オスカルは氷柱を睨みつける。

「てええつやあつ！」

右から袈裟斬りに振るわれた刀はわずかなブレもなく氷柱を切り裂いた。

「なかなか面白い剣だな」

事も無げに言うオスカルに対し、もはやソーマは何もいえなかった。

ようやくソーマが落ち着いてきた。そしてさっきの会話の中で聞きたいことがあったのだ。

「先ほど、昔からおっしゃいましたが、お二人が出会ったのはいつごろなのですか？」

「実はな、私が七つの時にこいつを拾ったのだ！」

オスカルがとんでもないことを言う。

「拾った、って、義兄様は貴族ではないのですか？」

思わずソーマが聞き返す。

「私は、詳しくは知らないがガリア貴族の者だったらしい。生まれたときから貧乏暮らしで自分の出自なんて気にする暇もなかったが、もう慣れた、と言わんばかりの雰囲気です。アンドレが話し始める。」

「で、私たち家族がガリアの近くを旅行していたときに、アンドレを見つけたのだ。私は父に言った『あの子が欲しい』とな。そのころのアンドレはもう本当にかわいくてな……」

やっぱりとんでもない人だ、とソーマは確信した。

「そしてそのまま私の家族にあつたら父から、自分が貴族の血をひいてるって聞かされてね」

「聞けば没落したのではなく、追放されたんだと。これもなにかの

縁だから貴族の子として育ててあげてくれって言われてね」

「義父さんは家族ごと引き取ってくれたよ。そしてみんな幸せ、で今に至る」

さらっと話してくれた内容がここまで波乱万丈だと、反応に困るのはソーマだけではあるまい。

「でも、アンドレと結婚するなんて思ってもなかったんだぞ」

「私はオスカルが好きだったけど、結婚できるとは思ってなかったな」

なんとも甘い空気が漂う部屋、続きを話したそうな二人。ソーマは諦めた。

「そのころには私の姉達もすでに結婚して、この屋敷にはいなかったんだ。そして、父に『跡継ぎをさがせ、さもないと勝手に選ぶ』と言われてね」

普通の貴族ならば結婚相手すらろくに選べないものだが、あのレニエがそこまで言ったことにソーマは疑問を感じていた。

「で、散々悩んだ挙句、アンドレと結婚すると言ったんだ。一応私も貴族だ。平民と結婚など、どれだけ荒唐無稽なことを言ってるかは知ってるつもりだった。だがどう考えてもアンドレ以外と一緒にいるなど想像ができなくてな」

「義父さんはそれをオスカルから聞き出すのが狙いだったみたいだね。私が勝手に選ばれるところだったよ」

そういうことか、とソーマは一人納得していた。

「さて、ここまで聞いたんだ。君の話も聞かせてくれるかな？」

「14の子どもに期待されても、そんな面白い話はありませんよ？」

「君の知ってる話でいいんだ」

アンドレがソーマに促す。

「では、私の聞いた革命の物語の話でも・・・」

ソーマは以前カリーヌに話したフランス革命の話をした。違うの

は少しベルばら寄り、ということだ

「なんてことだ・・・」

「ああ、悲しすぎる」

アンドレとオスカルはそろってかぶりを振った。

「王に嫁いだ者が、一人の女として生きられぬ悲哀をここまで・・・」

「女であることを否定した者、否定された者に惚れた男たち・・・」
「今もなお王制貴族制の中に生きる人たちには、大いに感じ入るところがあるらしい。二人の感想の中にもそれを見て取ることができ

る。」
さすがにソーマも『（世間知らずのマリーアントワネットが周りを巻き込むドタバタ劇、じゃないのか？）』とはおくびにも出さなかつた。

「そういえば、エレオノールは元気か？」

不意にオスカルが聞いてきた。

「お知り合いでしたか？そうですね、アカデミーも忙しいようで、帰ってくるたびに色々聞かされます」

「私とエレオノールは魔法学院の同級生だ」

「ええっ？」

ソーマは驚いた、フリをした。貴族同士で歳も近ければ自然とそういう接点は生まれる。ルイズでさえ姫殿下の遊び相手だったというのだから。

「あのころからエレオノールは堅物でな、私のような人間は嫌いだったようだが、私はあいつのことがカワイくてな、よく酒瓶片手に絡んだものだ」

酒瓶！？とソーマは思ったが、思い返してみれば、オスカルはずっとグラス片手に話をしてたじゃないか、と納得することにした。

「一見相性が悪い方がうまくいくこともあるのだ、例えば私とアンドレだって・・・」

「え？相性が悪いのですか？」

ソーマが驚いたように聞く。それもそのはず、そんな雰囲気は感じられなかったからだ。

「魔法の相性だね。私が『水』でオスカルが『火』なんだ」

「なるほど。そういうことですか」

「義父さんに言われたのは『あいつの火を消せるのはお前ぐらいだ』とかね」

「失礼な話だ。変化を司る火に対する冒瀆だな」

「変化、ですか？」

「そうだ、変化だ。火で燃やせばそこには燃やす前と違う物が生まれる。燃える前とのつながりを残しながら別の物となる。故に変化なのだ」

「よくわかります」

貴方が変な人だということに、とは続けなかった。どうやらレニ工の変人の血はオスカルにこそ色濃く受け継がれているようだ。

「そういえばヴァリエールでも酒を扱うようになったな。あれは好きだぞ」

「それはありがとうございます」

考案者として製造元として、褒められるのはうれしいことである。「付き合うのはいいのけれど、あれをストレートで飲まさないでくれるかな？」

「あんなすばらしい酒を薄めるなんてとんでもない」

アンドレはいたるところで苦労しているようだ。40度を超えることもある蒸留酒をストレートでなどと、ソーマにはこのとき想像できなかった。

「好みは人それぞれです。私も飲むときは飲みやすい程度に薄めますし」

「君はあの酒のよさを分かっているじゃない。機会があればゆっくり教えてやるう。残念ながら今はストックを切らしていな」

めてください」

「その損失をかぶるのは私なのか・・・」
それは実に悲哀に満ちた声だった。

第15話 ジャルジェとソーマ（公爵編 番外）（後書き）

むちゃくちゃなのは書いてるときから思ってた。

エレオノールとオスカルが同級生という話をエレオノール編で入れ忘れて

どうしよっかなー、なんて考えてましたが、かまわず放り込んだり。

でもオスカルとアンドレに幸せになって欲しかった。

この話を作った理由の半分であります。

でもオスカルをこんなキャラにする予定はなかった。

必然的にアンドレは苦勞人ルート一直線です。

次で第2部終了かもしれませんが

3部をどうするか決めかねてます。

迷走しても目をつぶって読んでいただけると・・・

で感想あたりで「どうなってんだよ！」って言うっていただければ。

読んでいただきありがとうございます。

しつこい、と言われてもお礼は書き続けます。

お気に入り登録、評価、感想

いずれにも変わらぬ感謝をいたしております。

これからもよろしくおねがいします。

第16話 カトレアとソーマ(前編)(前書き)

どうしてまさかの前編

次話はちゃんと後編なのだろうか

トコロデ夜はだいぶ涼しくなったよね

第16話 カトレアとソーマ（前編）

「今日は何をするのかしら？」

もはやカトレアにとって何度目かもわからない『別荘』。しかし、カトレアは嫌ではなかった。

屋敷から出られず、時には体を起こすことすらも苦痛だった。しかし、ソーマと出会ってからはそうだったことも忘れるくらい元気である。

しかし、そうなると人間、欲が出る。したいことが、出来なかったことが出来るならしたくなるのは普通だろう。

カトレアにとって『自分の知らないところを見る』と『誰かと一緒にいる』は、その中でも非常に高い優先度を持っている。

前者はともかく、後者の理由はやはりカトレアを気遣う皆の配慮の結果と言えるだろうか。

カトレアの“病気”のために周りの皆は努力した。その成果いかんは置いておいても、その忙しさゆえカトレアの近くに人はいなかった。それはカトレアの望むことではなかった。

一番長く一緒にいたのはあるいはルイズだったかもしれない。ルイズは自分の欲を優先させただけかもしれないが、結果的に大いにカトレアの癒しになったことは間違いない。

同時に優しいカトレアはルイズの魔法の悩みも一緒に抱えてしまうことにはなつたが。

そんなカトレアにとって、ソーマは文字通り自分を救い出してくれた人である。

ソーマと出会い、自分のしたかったことだけではなく、望まなかった病気についてさえ、望んでしまうようになった。

カトレアはソーマと『別荘』に行くことが好きだった。

カトレアは初めて『別荘』に行ったときのことを思い出していた。

見たこともない世界。不思議な植物たち、大きくないけどなにか暖かさを感じる家、草で編まれた床板、ふかふかじゃないのにすこく心地いい薄いクッション、色々便利なマジックアイテムって主張をするキツチンの道具。

そんな不思議な世界の持ち主で、不思議さを見せずに振舞う、不思議な男の子。

ソーマの座っていたクッションを抱えてまどろんでいたら、私に触れようとしてくれた男の子。

床に敷いた布団で、抱きしめながら一緒に寝た男の子。
私を助けてくれるって言った男の子。

「・・・さん、カトレアさん？どうかしましたか？」

「いいえ、なんでも」

カトレアは微笑みながら答える。今このときが、どうしようもなく幸せなのだ。

「んー？まあいいです。今日は僕の杖を作ります」

不思議に思いながら、今日することの説明をするソーマ。

「もう持っているではないですか？」

そういいながら、カトレアは『自分の』と言ったことに安堵した。ここに来るといつも、ヴァリエールのためになにか作っていたからだ。

「自分で一から作ります。あれは便利なので持っておきますが。そして何を杖にしようか迷ったのですが・・・」

そういつてソーマは青い石をカトレアに渡した。カトレアも何の石か分からないが、持っていると気持ちが悪くようだった。

「董青石といいます。ハルケギニアでも探せばどこかにあるかもしれませんが。それは杖に使えるか試すために僕がずっと持っていたも

のです」

「これはもらってもいいかしら？」

カトレアにしては珍しい申し出にソーマは驚いたが、すぐに頷いた。^{うなづ}

「ええ、どうぞ。磨けば綺麗な石になるはずですよ？」

「ありがとう。指輪にでも作り変えようかしら」

「ゲホツ・・・ゲホゲホ」

「あらどうしたのかしら？」

「何でもありません」

実はカトレアが石を左手の薬指に当てたせいなのだが、ソーマは考えないことにした。

「では準備を進めましょう。錬金！」

慣れ親しんだとは言いがたいが、しばらく使ってきたカミサマ特製警棒型杖を構え呪文を唱えると、青みがかつた石柱が現れた。

「いつ見てもすごい手際ね」

「うーん、慣れと言いますか、知っていると云いますか」

この辺にこの世界の魔法の限界がある、とソーマは思っていた。

ここまで自由度の高い魔法体系を持ちながら、皆が使う魔法は結局型にはまった物ばかり。

どちらかと言えばイメージ優先、努力次第に思えるこの世界の魔法は、教えるという過程でその可能性を潰している。

つまり知っていれば出来るが、その知る範囲を自分達で狭めているのが貴族である。

少なくともソーマはそう考えた。新しい魔法がなかなか出てこないと聞いていたが、それも故無きことではない。

「世界にはいろんな不思議があります。魔法はそれを見えなくしている。知っている、十分だと思ひ込ませる」

柱を杖の形にしながらソーマは言う。

「私はそんな箱庭のことすら知らなかったの。だから、ソーマにとっても感謝しているわ」

「ああ、ごめん。少し無神経だったかな」

「そんなことないわ。貴方はいろんなものを見せてくれた。私に未来をくれた・・・」

思わずソーマは作業の手を止めた。

「（俺は笑顔のカトレアしか知らない。その笑顔を、歪めたくない！）」

「どうかしましたか？」

「私もこの世界のことはあまり知らない。実はカトレアと一緒になんですよ？だから・・・病気が治ったときは、二人で世界を見て回りましょう」

作業のことも忘れたように、ソーマはカトレアに手を伸ばし、その手を取る。少し驚いているカトレアはソーマの手を優しく握り返し、微笑んだ。

「ぜひお供させていただきますわ」

「そのためにも、しないといけないことをやりますか」

作業を止めていたことを思い出したソーマは、ようやく杖になるうとしてる石柱に向き合った。

「素敵な杖ですわね」

「思ったよりもいい出来になったよ。だけど・・・重いな」

出来上がった杖は120cmほどの長杖。表面は磨き上げられたものの、所々に凹凸を残し、青く怪しい輝きをたたえる。しかし、少し重すぎたようだ。

「芯を別のなにかで作るかな・・・いや、むしろ杖じゃなくてもいいのか？」

ソーマは石を指に当てたカトレアの姿を思い出していた。少し頬が熱くなる感じがしたが、気を取り直した。

「杖は『杖』という形が大事なんでしょうか？」

「どうかしら。魔法の杖、と言っぐらいだから昔から杖なのでしょ
うね」

このあたりもブリミル教の影響だろうか、とソーマは思っていた。
「ために腕輪で作ってみますか。地金は・・・」

アルミ、銀、金、プラチナ。ソーマは色々試した結果、銀にプラ
チナを混ぜて作るようになった。運用と魔法媒体としての両立を
図った結果であった。

「どうですか？」

出来上がった二つの腕輪を手にソーマはカトレアに出来をたずね
た。杖ならともかく装飾品の評価をソーマ自身下せなかったからだ。
「素敵だと思いますよ。私も欲しくなってます」

チエーン状になったバングル部分は六面W喜平を元にし、台座は
意匠もそこそこに、邪魔にならない程度の厚みを持って先ほどの青
い石を宝石にした、アイオライトがはめられている。

「いつか、作ってあげますよ」

「今じゃないのですかね？」

少し首をかしげ、残念そうな顔をするカトレア。

「いろいろ実験したので今日は無理です」

「あら、残念」

そうして、この日の作業が終わった。ここからは二人にとっては
ある意味日常である。

カトレアが好きだという和食を作り、庭や景色、月を愛で、二人
で寝る。

こうしていつもどおりの余分な日が過ぎて行った。

その後、しばらく経ってから、ソーマの杖として契約された一対
の腕輪、その片方をカトレアが持つことになった。『別荘』内の原
理から考えて、ソーマの魔力を通した『杖』ならばカトレアの病気

を抑えることが出来ると思ったソーマが渡したからだ。

しかし、思い通りにはいかず、効果はあったものの不安定であった。病気の発作を抑えられなかったのだ。

ソーマは迷っていた。カトレアのために使えそうな宝具を選別したが、これでうまくいかなければ、あるいは自分がカトレアを治すことが不可能のような気がしていた。

だからこそ、見つけても使うまでに逡巡があった。しかし、カトレアをずっと見ていたソーマは、カトレアにもっと自由になって欲しいと思っていた。

ある日、ソーマはカトレアにとある杯を見せた。金色の杯に刻まれた意匠は蛇。

ヒュギエイア　医神アスクレピオスの娘であり、その彼女が薬を入れていたという杯、それがこのヒュギエイアの杯である。

ソーマの持つ数少ない医療目的の宝具、しかし担い手たる力を未だ持たぬソーマにどこまで扱えるかは未知数であった。

しかしソーマは、ケリユケイオン、アスクレピオスの杖も出来ることはそこまで変わらないと考えていた。杯の持つ神秘は真名を開放しなくともあふれ出している。恒常的に使うにはうってつけだろう。

そんな杯を手に取りながらカトレアが言う。

「素敵な杯ね。そして・・・きつとすごい力がこめられてる。これもソーマのお手製かしら？」

「これは貰い物のマジックアイテムです。入れられた薬の効果を高めます。もしこれで、治らな、かつたら・・・」

言葉を濁す。治らなければ治療が不可能ということになる。いや、薬で治せないだけであり、手術等の手段は残されていた。そしてソーマにはその『知識』があり、しかし、いきなり実行は出来ないと考えていた。

「治らなければ、貴方が私のそばで、私を治す方法を探せばいいのよ」

その言葉を聞いたソーマはいつそう悲痛な面持ちをしてしまった。

結果としてカトレアの病気の抑制にソーマがそばにいる必要が無くなっただけに終わった。

カトレアはさらなる自由を得ることになったが、それがカトレア本人の望みと、どれだけ乖離していただろうか。そして、そのことに気づけないソーマ。

さらに悪いことに、このころからソーマはヴァリエール家の人たちの用事が増えた。カトレアが同席できるものもあったが、邪魔は出来ない。ソーマの横か同じ部屋のどこかでおとなしくするしかないのだ。

それでもソーマに笑顔を見せ続けたカトレアは本当に強かったと言えるよう。

しかし、すれ違っただけでもなく、ソーマにハルケギニアの文字を教えるときや、ソーマが『別荘』で色々するときはもちろん一緒に行き、めいいっぱい甘えさせるのだった。

ある日、公爵はソーマとの意見調整が終わった後、カトレアのそばにいないか、とソーマにたずねた。今日はソーマといつも一緒にいるはずのカトレアがいないのだ。

ソーマは事の次第を説明し、付け加えた。

「治らなければ取り除けないかと考えました。が、今の私のその技術も度胸ありません。なので、少し、旅をしたいなと思います」

その言葉を聞いた公爵は複雑な顔をした。

「ソーマ、君は私たちに、カトレアを助ける、救うと言った。それができていないと君は思っているようだが、最近のカトレアをちゃんと真正面から見たかね？」

ソーマは公爵が言わんとしていることが分からなかった。

「君は病気を治すことに固執していないか？今、病気は抱えていても、君のおかげで元気なカトレアは、私から見れば十分救われていたのだ」

「ですが、カトレア様にはもっと自由に、この世界を見てもらいたいのです」

「そのためにカトレアを悲しませるのか！？」

ソーマは驚いた。ようやく公爵の言いたいことが伝わってきたのだ。つまり、今のカトレアは幸せなのだ。

「ですが・・・」

「今のカトレアの望みはおそらく君と一緒にいることだ」

ソーマの言葉をさえぎって公爵は静かに言った。

「もう一度考えたまえ」

部屋を出る公爵。

一人になったソーマは、頭を抱え、深い思考の闇の中に落ちていった。

第16話 カトレアとソーマ（前編）（後書き）

2部を好き勝手書いてたツケが今ここに集結

アイオライトは9月の誕生石にして私の誕生日石でもあります。

石言葉は調べた限り2つ見つけ、1つはカトレアに、1つはソーマにふさわしい言葉でした。

意図したわけでもなく偶然なんですがね偶然ですよ。

本当は黒曜石を使いたかった。

オブシダンソードとか作りたかったんだけどな・・・

読んでいただきありがとうございます。

総合評価も1000に届き「うわぁ、4桁乗ったよぉ」と

一人ニヤニヤしております。

これからも厳しくも温かい目で見守っていただければ、とおもいます。

第17話 カトレアとソーマ（後編）（前書き）

確かに後編になった

そのかわりか、第2部終わらず……………

構成見直し実験中：行の空け方

第17話 カトレアとソーマ（後編）

「どうすればいいんだ」

ソーマは自信がなくなっていた。自分の信じていたことが間違っていると言われたも同然なのだから無理もない。

「今のカトレアが幸せなんて、そういえば考えたこともなかったな。病気を治す、それが大前提であった。しかし、それが崩された。おそらく誰よりもそれを望んだ人に覆された。」

考えに考えた。なぜ治したいのか、病気だから？大事な人だから？かわいそうだから？自分がそうしたいだけ・・・？

自惚れていたのか、それともカトレアにいいところを見せたかったのか。自分はカトレアの何を見てきたんだ？何を知ってるんだ？ソーマは部屋を飛び出しまっすぐにカトレアの部屋に向かった。自分の気持ちを確かめるために。

コンコンツ、と扉をノックする。合図なんて決めていない。なくてもカトレアがわかってくれるからだ。

「どうぞ」

「カトレアさん、話があります」

自分に向き合うことに決めた。カトレアと向き合うことに決めた。今までは物語を上からなぞるような、まるで体験入部のような気分だった。

でも、ここで生きないといけない。どんな力を持っていても俺はここで生きる一人の人間でカトレアもそうなんだ。

「ふふっ、怖い顔してるわね。でも、やっと、私を見てくれたのかしら?」

見透かされてる。でも今は怖くない。

「僕は・・・」

言う前にカトレアに抱きしめられた。不意に涙が出そうになった。こんな俺をずっと、わかって見守っていてくれたのか。

「貴方はいろいろ背負ってこの世界に来てたんでしょ?なのに、まだ背負いこもつというの?」

「カトレア一人ぐらいは背負える・・・。それが、俺の望みで、使命だ!」

カトレアの目を見て言う。素が出たけど関係ない。

「ありがとう。今のソーマ、すごくいい顔してるわよ」

「この距離でそう言われると、すごく恥ずかしいんですが・・・」

「そうでもしないと、貴方の慌てたかわいい顔が見れないでしょ?」
至近距离で言われるとすごく恥ずかしくて、目をそらしたくなる。
でも、しかたない。今は甘んじて受け入れよう。

「早めに飽きてください。じゃないと・・・」
今の自分には眩しすぎる。

「じゃないと?」

「いいえ、なんでもありません」

しばらく恥ずかしい顔を堪能された後、ようやく放してもらえた。そういえばまだ話したいことを話せてないじゃないか。

「話を戻します。実は旅に出たいと思ひまして」

「私を置いて？」

「はい」

「私を置いて行くの？」

「・・・はい」

すごく悲しそうな顔をするカトレアを見て、ソーマの心はさすがに痛む。しかしどうあれ、話を、思っていることをちゃんと伝えるべきだと、ソーマは話を続けた。

「今すぐではありません。教わってるこの世界の文字もまだ完璧ではありませんし、カリィ又様との訓練も、まだ十分とは言えないでしょう」

「そこまでして行く理由は、何なのですか？」

「カトレアさんの病気を治すため。そして、カトレアさんの思いに応えるためです」

「今でも十分よ、十分に応えてくれるわ」

引き下がるカトレア。しかしソーマは落ち着いて答える。

「今、僕はカトレアさんに甘えてるだけなんです。好意に胡坐ひんがしをかいている。それじゃダメだと思う。僕が満足できないんです。男として・・・」

「ソーマ・・・」

沈黙が二人を包む。見つめ合ったまま時間だけが過ぎていく。

「勝手に行かないこと、約束しなさい」

「わかりました、我が主よ」

「・・・ふふっ」

「はははっ」

そして二人は笑いあい、夕食まで久しぶりにゆっくりとした時間を過ごした。

「公爵様、カリリーヌ様。夕食後に少しお時間をいただけますか？」

その日の夕食時の一幕。カリリーヌは珍しいと思ったか少し驚いた表情を見せ、公爵は少し暗い顔をした。

ルイズはカトレアの表情から察してろくでもないことだと思ったのか、ソーマに向かって叫ぶように言う。

「アンタ、まさかちい姉さまになにかしたんじゃないでしょうね！？」

「違いますよ、ルイズ様」

ソーマの曇りのない表情は開き直りとも取られたかルイズはまだ収まらない。

しかし

「ルイズ、そうではないのよ」
と言うカトレアの一声でしぶしぶ納得する。

「きつと大事な話だから、その間、ルイズは私の部屋にいらっしや
い」

「・・・はい、ちい姉さま」

夕食後しばらくして三人は別の部屋に来ていた。

「あの様子だとカトレアには話したようだな？」

公爵がいきなり切り出す。カリーヌはまだ事態についてこれない。

「はい。賛成とまではいきませんが、納得は・・・してもらえたと」

「わかるように説明をなさい」

「たまらずカリーヌが言う。夕食時の様子からして、良くないこと
だと見当がついているのだ。」

「実は、カトレア様を治す能力を身につけるため、しばらくお暇を
いただけないかと思ひまして」

「そう言った瞬間、あたりの空気が確実に“ピシッ”と鳴った。公
爵も圧されているようだ。」

「説明を続けなさい」

「私の持つマジックアイテムで治療を試みた結果、悪化はせずとも、
治しきれないことがわかりました。次の手段を考えただのですが、高
度な技術が必要とするうえ、失敗すればカトレア様の命に関わるの

です。故にその能力を身につけるべく、公爵様をお願いをしたわけでございます。」

「カーリ又はこめかみを押さえ、頭を振りながら言う。」

「カトレアにも話をしたのですね？」

「今でも十分だとおっしゃられました。」

「私も同感です。なのになぜそういった話になるのです？」

「私もそれが疑問だ。カトレアの気持ちはわかったのだろうか？」

「助ける、と言った男としての矜持です。現状維持では墮落する一方ですし、私も、きちんとカトレア様を選ばれたのです。」

「ソーマは言い切った。これがつまらないプライドゆえんであると。」

「はあ……大馬鹿者ですね。」

「まったくだ。本当にカトレアを任せていいのだろうか？」

公爵とカーリ又は二人そろってため息をついた。

「あ、あの……公爵様？カーリ又様？」

「魔法の訓練は今まで以上に厳しくいきますよ？覚悟をしておきなさい。」

「わかりました、って私の話は……。」

「ヴァリエールのためになる情報、知識をもっと頂こうか。君に死

なれても困らぬようにな」

今度はソーマが状況についていけなくなる番であった。しかし、内容からソーマは自分の主張が認められることがわかった。

「そういつわけだ、勝手に行くなよ？」

「貴方はまだ子どもです。せめてもう少し成長し、精神的にも体力的にも余裕を持つてからにしないさい。カトレアの病気の様子も、このままとは限らないでしょう？」

「ありがとうございます」

ソーマは二人に深々と頭を下げた。

「だが、娘たちを説得するのは君の役目だ。エレオノールもルイズもなかなか素直ではないから覚悟をしておくんだな」

「しよ、承知しております」

話せばわかる、よな？という甘い考えをまだこのときのソーマは持っていた。

カトレアの部屋ではルイズが夕食の時のことを聞きただしていた。
「ちい姉さま、ちゃんとしようじきにはなしてください」

「男の子にはいろいろあるものなのよ？ねえ、ルイズ？貴方、ソーマのこと、嫌い？」

「えっ？そんなの・・・」

自分からちい姉さまを奪った悪者、ルイズにとってソーマはそういう位置づけであった。しかし、魔法を見てもらってから後は、そういう感情も少し薄れていたのも事実だ。

だが、ルイズはこの質問の意図がわからず混乱するばかりであった。

「たとえ嫌いでもいいわ。でも、きっとそのうちにソーマから貴方に話があると思うの。そのときはその話を聞いて、どう思ったかをちゃんと伝えてあげて欲しい」

「ちい姉さま？」

「ソーマのことはそれだけ。ルイズ貴方の話をきかせて。最近お話ししてなかったでしょ？」

ルイズは納得がいかなかったが、困らせたくもなかったので自分の話をすることにした。

庭で四葉のクローバーを見つけたこと。でもそれは風で飛ばされてしまったこと。もう一度探そうとして転んでしまい、服を汚してしまったこと。そのことで怒られてしまったこと。

カトレアは、そんなルイズのなんでもない日常を、うれしそうに聞いていたのだった。

ソーマがカトレアの部屋に戻るのとルイズが自分の部屋に帰ろうとするのが同時であったようで、ドアのところまで、二人はすれ違った。

ルイズはソーマをにらみつけ……することはなく、目があっても

好悪の判断つかない微妙な顔をして去っていった。

「なにかあったのですか？」

「女の子にはいろいろあるのよ」

さすがに不思議に思ったソーマはカトレアに聞くが、はぐらかされてしまった。

「話、してきました。ちゃんと」

報告するソーマに浮かない顔をしながらカトレアが返す。

「なにか、言われた？」

「大馬鹿者、と。あと、出発はかなり先になりそうで、最後にエレオノール様とルイズ様への説得は自分でしろ、とのことでした」

返事に安堵するカトレア。しかしすぐにつつまいてしまう。

「時期が来たら行ってしまふということですね？」

「・・・はい」

「でしたら、それまで、ちゃんと私を見ててくださいね」

「もちろんです」

二人の関係は、ようやくながらここから本当に始まったのかもわからない。

第17話 カトレアとソーマ（後編）（後書き）

キャラがストライキする

強引な展開を嫌がったのことでしょうか？

次話でこそ2部終わらせませう。嘘予告は今回はさみませんよ???

ここまでお読みいただきありがとうございます。

積み重なる感想、お気に入り登録、評価にプレッシャーを感じながらも

感謝の気持ちでいっぱいになります。

これからも何卒よろしくおねがいします

第18話 ソーマの旅立ち（前書き）

第一部最終話

ようやく書けた、俺、寝る、

第18話 ソーマの旅立ち

「貴方は何を考えているの!?!」
エレオノールの怒声が飛ぶ。理由はソーマが旅にでたいと思っ
ていることを話したからだ。

カトレアにその話をした日から1年。カトレアは元気だった。単
独行動も出来るようだが、それでも変わらずソーマのそばで過ごし
ている。

変わったことといえばソーマに部屋が与えられたことだ。それで
も寝るときは一緒なのは、カトレアのわがままだったりする。

しかし病気が無くなったわけでも完治したわけでもない。

今の状況がいかなるバランスで成り立ち、どうすれば崩れるのか
がわからないソーマにとっては、安心できる状況ではなかった。

つまりソーマはまだ旅に出るつもりなのだ。

「どうしてそういう結論になったの!?!カトレアのことを考えてい
ればそんな・・・」

そんなソーマの気持ちを理解できない、とわめくように説教をす
るエレオノール。

だが、ソーマにしてみれば、あの日に公爵に言われたことの焼き
直しでしかなく、なんら障害とは感じていなかった。

ただ相手が公爵ではなくエレオノールであったことが、話を長く
するのだった。

「カトレア様のことを考えての決断です。公爵閣下も公爵夫人も、

良い、とは言ってくれませんでした。認めては下さいました。」

「だからどうしてそうなるのですか！貴方はカトレアのそばにいないといけないし、そう思って私も……」

終わりそうにない話にソーマは小さくため息を吐いたが、それもまたエレオノールの逆鱗に触れたようで

「大事な話をしているというのに、なんなの、貴方は！」
と一層まくし立てられた。

「（今日の説得は無理だな……。長期戦で行くか）」
と、ソーマも白旗を揚げ、おとなしく説教を聞くことにしたのだ。
った。

「いい？わかったわね？」

「ハイ、エレオノールさま」

永遠に続くかと思われるような説教が終わったときには、ソーマの精神はもはや限界であった。

「（ああ……。終わっ……。た……。）」

「もう、父様たちも父様達よ。どうして認めたりするのかしら……」

「説教”は終わっても怒りの収まらないまま工部屋を出るレオノールであった。」

そして、そんな怒りはついにカトレアにまで向けられていた。

「どうということなの、カトレア？」

「どういふこと、とは何のことですか？」

「決まっています。ソーマのことです。何でも屋敷から出ることを、あなたと離れることを認めたとか」

「そのことなら、決定ではありませんよ？私の病気がそれまでに治ればいいのですし」

あまりにもあっさり言い切るカトレアを見て、エレオノールに疑問が湧いてきた。

「（なにかに執着したりしないこの子が、初めて執着を見せたのがソーマだったのに）ひよつとしてソーマと何かあったのかしら？」

「エレオノール姉さまが心配するようなことは起きてませんわ。ただ、ソーマが彼なりの方法で、私の思いに応えようとしてくれていて、そしてそれを邪魔したくない、そう思えただけです」

エレオノールはカトレアのことがわからなくなっていた。なぜ大事なものを放してしまうのかを理解できないでいた。

それでも互いが互いのことを思い、その上で決めたことにこれ以上なにか言って変わる気がしなかった。

「・・・ならせめて、約束を破ったときの罰ぐらい決めておきなさい。信賞必罰は上に立つ者の義務よ」

カトレアは少し驚いたような顔をし、しかしすぐにうれしそうに、はい、と短く答えたのだった。

「ふう、なんとかなったのかな？」

カトレアからエレオノールと話したことを聞き、その内容に安堵しソーマは独りごちていた。

「（ルイズはまだ早いか……。正直、今のところ一番どう出るかわからないのがルイズだよな）」

あの日以来ルイズの態度は変わっていた。それまでは、会うたびに何かしらの感情をぶつけてきたのだが、今はそんなこともなくなった。

だが、ひいき目に見ても、ルイズがソーマを受け入れた、とは言えないだろう。

そのあたりも、ソーマがルイズのことをわからなくする原因であった。

「まだ子どもですからね」

「子どもだなんて思っていると、そのうち痛い目を見ますよ？あの子も私の娘なのですから」

訓練の休憩中にカーリヌと話をしていたソーマ。

エレオノールと話がついたらしいこと、ルイズに話すのはまだ早いと思っていること。

そんなソーマの言にカーリヌが、ルイズの母としてか先のような忠告をしてきたのだった。

「でも、今話しても無駄なのは確かでしょうね。今あの子は貴方に対して意識的に無関心になってるのでしょう」

「意識的に、無関心……」

「だから、仮に今あの子に話せば、うなずいてはくれるでしょうが、それは納得からは程遠いものでしょうね。」

ルイズを納得させる、その点について考えても、今話すべきではないのは明白だった。

「（結局先送りか。先方の事情とはいえすっきりしないな）」

「ではそろそろ再開しましょうか。その新しい腕輪型の杖も慣れたでしょう？ですから普通の杖での模擬戦をします。違いがわかってこそ奇襲も映えるというものですし、いちいち切り札になるものを見せびらかす必要ありません」

「せっかく作ったのに・・・」

用途は奇襲、そう言われ、また使う機会も減らされたソーマは少
しうなだれてから、『烈風』と向き合うのだった。

「わからない・・・」

ルイズはカトレアに言われた言葉を反芻しながら、しかし未だそれを理解できずにいた。そして、その迷いは行動となっても現れて
いた。

そういう感情を抜きにしたときに、ソーマとの距離感がつかめな
かったのだ。

結果として、カリーヌが『意識的な無関心』と評したような状態
になっていた。そう、あからさまな無視ではなく、そこにあって当
然のものに当然のように振舞っていた。

「ちい姉さまはいつたい何を考えてらっしゃるのかしら？」

あの日聞けなかったことにルイズは思いをはせる。あれは明らか
になにか変化の予兆だった、とルイズも感づいていた。

しかし誰もルイズにはそれを話さなかった。そのことに納得しよ
うとするも、仲間はずれにされたことへの落胆や、ソーマが話すと
姉に言われたものの、まだ何も話そうとしないソーマへの怒りで鬱
カトレア
屈した気分になっていた。

「もう、いつたいどうしたらいいのよー！」

その気持ちを晴らす方法もわからず、ルイズはまだ改善の様子も見せない魔法の練習へと向かったのだった。

そして時は過ぎ、ソーマがハルケギニアに来てから四年が経っていた。

この間、ソーマはオーク鬼の討伐をしたり、エレオノールの手伝いをしたり、公爵に情報を与えたり、カリーヌにボロボロにされたり、義父になるレニエに会ったり、ルイズと微妙な関係のままだったり、カトレアとまったり過ごしたりしていた。

「ようやくつて訳？私も甘く見られたものね」

つんつんしたルイズがそこにいた。理由は単純で、ソーマが先延ばしにしていた説明をするためだ。

「で、なに？聞いてあげるから早く言いなさいよ」

「実はこの屋敷を出ようと思っただけです」

「……はあ？アンタ自分が何言ってるか分かってるの？」

まさに寝耳に水、ルイズが想像だにしていない話であった。

かつてならばルイズにとって吉報となったかもしれない。しかしルイズも、もうそのころのような子どもではなかった。

「ふーん。で、ここから……ちい姉様の元から離れてどうしたいの？」

「カトレア様の病気は完治したわけではありませんし、このままでは完治することもないです。ですので、その手段を得るために外で

修行するのです」

「当てはあるの？今まで見つかってないのにアンタが見つけれられるの？」

「手段については私にとって既知のものです。しかし運用するにあたり、実験でカトレア様を使うわけにはいかないでしょう？」

ソーマの事務的な物言いにルイズは苛立っていた。本来そこにあるべき何かが見えなかったからだ。

「それでちい姉様から離れるの？ちい姉様の思いはどうなるの？治ったわけじゃない、って言ってもちい姉様は元気じゃない。そんなちい姉様のそばにいるのがアンタの役目じゃないの？あんたのちい姉様への思いはどこななのよ？」

途中からは泣きそうな声で、半ば叫ぶようにルイズはソーマに思いのたけをぶつけた。

ずっと胸がつかえる感覚だった。それを晴らすべく、ルイズは今まで見えてこなかったソーマのカトレアへの思いを問うたのだ。

「カトレア様の病気が抑えられるなら、私じゃなくてもいいかもしれない。こんな力が手に入ったのは偶然かもしれない。だから、そうじゃない自分の力でカトレア様を助けたいんです」

「あんだ、今さら何言ってるのよ・・・？アンタのおかげでちい姉様はあんなに元気なんじゃない」

「私はカトレア様のことが好きです！」

「・・・うん」

「あのカトレア様に見合う男になりたい。そう思っているからこそ、今回の旅が必要だと」

「・・・ちい姉様を悲しませたら私は許さない」

「悲しませません」

「ちい姉様を不幸にしたら私は許さない」

「必ず幸せにします」

「そう。ならアンタの勝手も少しの間だけ目をつぶっててあげる」

「ありがとうございます」

ソーマは嘘を吐いた。誰よりもカトレアのことを真剣に考えているルイズに対して。そんなルイズにソーマは自分の気持ちを言葉にする必要があると考えたのだ。

そしてその言葉を聞いたからこそ、ルイズも態度を軟化させたのだった。

こうして、ヴァリエール家の説得に成功したソーマだが、一つ心配があった。

それは先日会った養父になる男、レニエであった。

「養子になってすぐに、旅に出ます、はどう考えてもおかしいよなあ」

しかし、すぐにこれが杞憂であったと知ることになった。

次の年、場はジャルジエ家の屋敷。ソーマのお披露目パーティーの時であった。

周囲の人間にはいきなりの養子という話に少しの混乱が見られたものの、『相続をさせない分必要な援助をする』と、当主アンドレと前当主レニエが言ったこと、さらにその横にヴァリエール公爵も

いたことで文句を言う人間はいなくなっていた。

そんなパーティーのさなか、ソーマはレニエに正直にことの次第を話した。そしてその反応は、予想以上にあっさりしたものだっ

「ん、旅？いいんじゃないか？大事な人のためだろう？止めたりはせんよ」

「本当によろしいのですか？」

「気にするな。色々もらっているからな。ただ、旅の間、教会にはあまり喧嘩を売るなよ？そうなるとかばうのもそれなりに面倒だ」

教会、つまりブリミル教。歴史を習ったソーマは、ブリミル教相手に問題を起こすまずさを知ってはいた。

そしてレニエが取り立てて話をする以上、かなり注意が必要なんだとソーマも改めて意識しておくことにした。

「土産を楽しみにしてるぞ？ああ、アンドレたちにも話しておけよ」
「わかっております。ありがとうございます、義父上」

しかし、結局アンドレとオスカルに話できたのはパーティーが終わった後であった。

「そうか。前もって決めていたようだが、急は急だな」

「いいじゃないか、旅も楽しいもんだ。私みたいに余計なものを捨
うんじゃないぞ？はっはっはっ」

「余計な心配をおかけすることになってしまい申し訳ありません。
しかし、私が私である以上譲れないものなので」

「今さら止めるような無粋なことは言わないさ。ただ、無事で帰って来い。旅の目的よりお前の命を大事に思っている人がいるんだから」

「お土産頼んだぞ。うまくいかなくても無茶するなよ？」

「はい、ありがとうございます。では失礼します」

相変わらずの二人ではあったが、やはり新しい義弟が心配なのだろう。それでも、二人は笑顔で見送ったのだった。

「かつこよかったですよ。その衣装も良く似合っていました」

「ありがとうございます」

帰りの馬車の中、カトレアとソーマは二人で話をしていた。旅立ちの時間が近づいていて、二人に残された時間はあまりなかった。

「これで全部の準備が整ったということですね？」

「はい。だから出発の日まで時間もありませんし、二人でゆっくり話せます」

「なら、その間ずっとそばにいてくれますね」

カトレアは柔らかく笑いながらソーマの手に自分の手を重ねた。

ソーマも返事はせずに、その手を握り返すことで、自分の気持ちをカトレアに伝えた。

「ずっとこうしていたい。そんな願いもかなえてくれるのかしら？」

「そうできるよう、必ず帰ってきます」

見つめあう二人、そしてカトレアはソーマをやさしくと抱いた。

「ここがあなたの帰る場所です。他のどこでもなく、ここがそう。間違えてはいけませんよ?」

「間違えるはずありません。私は貴方のためだけにこの世界にいるんですから」

そう言うとソーマはカトレアを強く抱き返した。

二人はしばらく抱き合ったあと、また手をつないだだけの状態に戻り、ヴァリエールの屋敷までずっとそのままであった。

それから出発まで、約束どおりカトレアのそばに居たソーマだったが、ヴァリエール家の残りの人たちもまたソーマと話したいことが残っていたのか、たびたび呼び止められていた。

「貴方は強くなりました。それこそ、私と初めて戦ったときよりずっとです。それでも、貴方は無敵でも不死でもありません。危なければ退きなさい、退けなければ生き残りなさい。そして、必ず帰ってきなさい」

「君のいろんな知識には非常に助けられてるよ。帰ってきたらその続きの話でもしよう。万が一カトレアを泣かすようなことになったら、君がどんな常態でも容赦はしないぞ?」

「貴方がそんなに頑固だったなんて思わなかったわ。ならば、その

頑固さで必ず目的を達しなさい。必ずカトレアの元に返ってきなさい。私もまだ聞きたいことはいっぱいあるの。帰ってきたら続きを聞かせてもらおうよ」

「アンタはちい姉様の使い魔なの。貴族になってもそれは変わらないわ。だからアンタは勝手に死ぬことも許されないの。そのことをよく肝に免じておきなさい」

「時間が経つのは早いものです。貴方が来たときからそう感じていましたが、ここ数日はそれ以上に早かったです」

「私にとつてもこの五年間は早かったです。知らない世界で、とても得がたい経験もさせてもらいましたし」

出発前夜、ソーマはいつものようにカトレアの部屋でおしゃべりをしていた。しかし、その顔は少しばかりか、こわばっていた。

「怖いですか？」

「怖いです。もし、旅に出たのに、それでもうまくいかなかったらと思うと、とても怖いです」

「大丈夫です。私が信じた貴方ならきつと成し遂げてくれます」

カトレアはソーマの頬に触れながら言う。ソーマはカトレアの手に自分の手を重ねながらたずねる。

「貴方の使い魔は優秀ですか？貴方は使い魔を信頼してますか？」

「はい、とつても」

「ならばその期待に応えられるよう私も頑張ります」

こうして出発前夜の夜は過ぎていった。

出発の朝。門には見送りにわざわざ出てきた四人がいた。

「気をつけるのだぞ」

「無事に帰ってきなさい」

「ちい姉様のためにもしつかりしなさいよ。あと、エレオノール様からの伝言、帰ってこなかったら草の根かき分けてでも探し出す、とのことよ」

「はい、気をつけていきます」

言葉をかける三人。しかしカトレアはうつむいたまま何も言わなかった。

「カトレア様・・・」

「・・・いつてらっしゃい」

「いつてきます」

ヴァリエール家の人たちと、いつもの優しい笑顔になったカトレアに見送られ、ソーマは馬車で、一路トリスティンの王都を目指した。

第18話 ソーマの旅立ち（後書き）

なんとかここまでたどりつくことができました。

3部は旅のソーマ中心なのでカトレアスキーの方はしばらくお待ちください。

それよりも個人的都合で、次の投稿まで少し日が空くかもしれません。

キリのいい場所だったので私もほっとしてます。

開始したらまたよろしくお願いします。

9/21 週間アクセス：19017

目を疑いました。

多くの方に読んでいただき大変ありがたく思っております。

これからも、多くの方に読んでいただけるよう邁進してまいります。

第19話 王都に来たソーマ(前書き)

第3部開幕

しばらく投稿できない、なんてことはなかった。

しかし目標より18時間遅れの投稿。

今回は残念クオリティと本編にあまり関係ない説明が多いので飛ばしても実は問題がなかったりする。

第19話 王都に来たソーマ

王都トリスタニアに向かう街道。ソーマは商人と共に馬車に乗っていた。そして道すがら、お互い情報を交換していた。

「すると、兄ちゃんはその屋敷を出て流浪するということですか？ 酔狂だねえ・・・」

「どうしてもやりたいことが出来たからな。それもあそこに居ては出来ないことが」

「なるほど、ジャルジェの坊ちゃんになるぐらいだ」

「変人と言いたいのか？ 誉め言葉として受け取っておくよ」

さっぱりした物言い。彼はソーマの造った蒸留酒の販路を確保してくれた商会の人間である。

もともと特産品がなく、そういうチャネルを持ってなかったヴァリエール家に信用され、カルヴァドスと共に、ジャルジェ家のマーも独占している状態である。

表向きは複数の小さな商会が動いているが、大本はここ一つだけなのである。

「新しい酒のおかげで大もうけですが、結局、貴族の間で金が回ってるに過ぎません。それを平民に還元するなんて一握りどころか片手で十分数えられる」

「となると、平民の暮らしは厳しいのか・・・」

「厳しいなんて一言じゃすみません。ヴァリエール領なんて特別もいいところですよ」

トリステインで領地経営が成功しているのは、特産品を抱えてい

る、港があるなど商業の要地である、領主に奇跡的経営手腕があるなど、非常に限定されている。

つまりそれらがなければ民から搾り取るしかないのだ。

そして、トリステイン王国は国王が崩御し、その後王族はだれも戴冠することなく、今なお政治的空白をつくりだしている。

あくどい貴族はそこを見逃すようなことはせず、国を食い物にしている。

為政者が平民の方を向くはずがない今、平民の暮らしが良くなる要素などトリステインには存在しないのだ。

それをうわべだけでも知っていたソーマは、大別して貴族相手に売れる商品の情報と、平民が強く生きていけるような、平民の価値を高める情報を公爵に渡してきた。

しかし、この世界の状況は想像以上に悪いらしく、一般的な平民ですらほぼ極限状態まで疲弊していた。

「賊も確実に増えています。ヴァリエール領を出入りする少し大きな馬車はかなり狙われるようで」

「被害は出ていないのか？」

「我々に限っては大きな被害はありませんね。取引が大きくなってからは護衛に複数メイジを雇ってますから」

「それでも賊の規模が大きくなれば、ヴァリエールとしても対策をしなければならぬか」

「今回はオンボロ馬車ですからね。そんなに心配はないでしょうし・

・

「そんなことさせはしませんよ」

「ありがたい話だ」

そんな情報交換やら他愛もない話やらを続けているうちに、街道沿いの宿場町についた。ここで一泊するのだ。

「フェイスチェンジで顔を変えますから間違えなてください」

「そこまでする必要があるんですかい？」

「理由よりも気分の問題です」

顔を変え、さらにその上からローブをかぶり顔を隠すソーマ。

しかし、フェイクの大きめの杖を持ち、貴族、そうでなくともメイジであることを匂わせる。

「怪しすぎるでしょう」

「怪しい人間のことを、宿屋の主人にあからさまに釈明するほうが余計怪しいでしょう？」

宿屋の主人はトラブルなくお金が手に入れば文句はないのだ。いちいち火中の栗に手を入れる真似はしない。

「そういえば、別れたあとのお金はどうするんですか？」

「出来の悪い裝飾品がいくつかある。それを売ろうと思う。金貨はかさばるからな」

「それは賢明な判断で」

金貨というのは重い。長旅ならば無駄に金貨を持つよりも、宝石のようなものにしたほうが、かさ張らずにすむのだ。

しかし上等すぎても結局高価になりすぎるうえ、出所を探られることもある。

そうしないためにソーマは『出来の悪いもの』を錬金で作ってお

いたのである。

「それはそうと、商人の大事な馬車に見張りもつけなくていいのか？」

「空ですよ？そこまで馬車を欲しがると人はなかなかいないでしょう」「それもそうか。積荷は俺自身だからな」

ひとしきり笑ったあと、翌日もまた長時間馬車に乗ることになるので早めに寝ることになった。

こうして、ソーマの旅一日目が終わった。

翌朝、まだ日が昇る前。二人は既に出発できる準備を整えていた。

「今日中には着きますね」

「何もなければな」

この日もまた前日と同様、他にすることもなく二人は話ばかりしていた。トリステインと他国の関係、アルビオンの不透明な状況、ゲルマニアの隆盛。

出発して数時間、太陽も高くなり、だんだんトリステインに近づいてきたとき、ソーマは予定を聞かれていた。

「トリスタニアについてらどうするんです？」

「王都の様子を見て、適当に情報集めてから放浪する。寒村の方を巡るかもしれん。目立とうと噂になりたくない」

「なににせよ無茶はやめてください。命あつての、ですから」

「貴方も気をつけることだ。このまま無事に着いても、町で別れたあとで気を抜かないように」

ソーマが警戒する中、順調に進んでいく馬車は、日が落ちる前に王都トリスタニアに到着した。

商人と別れたソーマは、一人で情報の集まりそうな店を目指す。

町には確かに首都らしい活気はあった。しかし、それ以上に町としての機能に限界をソーマは感じていた。

狭い道、限界まで集積した店舗、人の流れもスムーズとは言いがたい。そしてなにより、閉まっている店がが少なくない。

時間が遅いのか、とソーマは思ったが、しかしこれでも王都なのかとソーマは首をかしげていた。

「他の町や国も見ないと判断つかないか」

と独り言を言いながら、ソーマは情報が集まりそうな店を探していた。

そうして見つけたのは、食事もお酒も提供するが、決して高級ではなく、客の入りも悪くなく客層もそこそこ広い店だった。

「軽い食事と、軽くワインを」

こういった店では、さすがに杖は持っていないが、先日宿屋でしたような格好ではあまり歓迎されない。

しかしソーマは銀貨をチップ代わりにし、店主に黙認させたのだ。こうなってしまうえば、仮に文句を言う客がいても客同士のいざこざで済む。穏便に済ませれば早々追い出されることもないのだ。

「旅の途中なんだが、この辺りの地理を教えてくださいませんか？」

「どちらから来なさったんで？」
「西の方だ」

つまりガリアの方から、と言う意味だがもちろん嘘である。トリステインでは『ゲルマニアの方から』よりも『ガリアの方から』の方が通りがいいのだ。

「そうですね、南に馬で二日ちょっとの所にアルビオン行きの船が出てるラ・ロシエール、北にずっと行けば海ですが大きな町はさほどないですね。東は強い諸侯が治める地で、西は見てきたと思いませんがめばしいものはありませんね」

「そうか。やはり王都から離れば貧しい村も多いのか？」

「西は特にひどいでしょう」

「やはりそうか・・・」

適当に話をあわせながら食事をとる。傭兵のような団体もいたが、仕事が上手くいったのか皆上機嫌で酒を飲んでいて、絡んでくる様子もなかった。

「美味かった。ところでこのあたりに安宿はないか？」

代金に色をつけながら聞く。

「でしたら・・・」

丁寧に宿の場所を教えてもらい、店を後にした。

目的の宿に近づいていくと、なにか人だかりができていた。

聞いてみると、どうやら平民が貴族に因縁をつけられているらし

い。

「王都初日からか……。想像以上なのかもしれんな」

聞こえてきた声もまた、通り一遍のものであった。

「ワシをリツシユモン高等法院長とも懇意にしているルーイ子爵と知つての狼藉か？この愚か者め！」

「申し訳ありません、申し訳ありません。どうかお慈悲を」

「けっ、この平民風情が！」

想像通りだろうか、小太りで身なりだけは立派な男が怒鳴り、みすばらしい服の男が地べたに這い蹲つくはるように謝っている。

貴族の方の取り巻きは杖を取り出し、ニヤニヤしながら今か今かと機会を待っている。

「（すぐにでも介入したいが、どうしたものか……。とりあえず殺そうとしたら全力で止めるか）」

本来ならすぐにでもあの貴族をどうにかしたいソーマだったが、初めての事態ということもあり、また貴族がどれほど本気かも見るとために、あえて見守ることにした。

殺されさえしなければ、怪我だけならばいくらでも治せるという自信もあつたからだ。

「どづか……。どづかっ！」

「うるさい。おい、やってしまえ」

男の必死の謝罪もむなしく、取り巻きの杖が一斉に男に向けられた。

第19話 王都に来たソーマ（後書き）

なんともいえない出来、これは3部は速攻で終了か？

とりあえず考えよう。考えてから書けよ俺。

最近、ミンサガがやりたくてしょうがないけどPS2が残念な状態・
・
・
禁断症状のせいでソーマ君の使い魔がジュエルビーストになりそうです。

そうならないためにも、いい使い魔候補がいたら教えてください。
その際は人間はご遠慮ください。

ここまで読んでいただきありがとうございます。
初っ端からつまづいた第3部も頑張っていきますので
これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5501n/>

召喚した人、されたヒト

2010年10月8日10時56分発行